

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	火2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50101001	教育課程編成の課題と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
吉田 安規良, 比嘉 優			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

講義と演習を適宜組み合わせながら教育実践を下支えしている教育課程編成に必要な理論を学ぶ。現職院生は自らの教育実践を、学卒院生は教育実習での経験や児童生徒として受けた教育を見つめることを通して（理論と実践を往還しながら）、教育実践に必要な教育課程編成能力を修得する。さらに将来的に起こり得る課題に応える術（ヒント）を修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむことを目指す。

- (1) 学習指導要領を踏まえた教育課程編成に必要な事項について理解する。
- (2) 学校の所在する地域や児童生徒の実態といった学校事情に応じた教育課程の編成ができる。
- (3) 学校が担う教育課程内外の活動との関連を理解するとともに学校行事等を適切に利用した教育課程を編成することができる。
- (4) 沖縄県が抱える今日的な課題の解決を教育課程の編成の面からアプローチする。

児童生徒の系統的な学びを見据えた現任（採用希望）校種の教育課程の編成について理解するとともに、現任（採用希望）校の実際を事例にしながら現在の教育課程の良さと問題点や反省点を分析しつつ、教育課程内外の活動の融合や個に応じた指導、時代や社会が要請する諸事項に応えうる教育課程編成の力量の向上を図る。特にカリキュラムマネジメント（カリキュラムを主たる手段として学校の課題を解決し、教育目標を達成する営み）の重要性を再認識し、とりわけ沖縄県の教育課題に応える教育課程の在り方に迫る。

■ URGCC学習教育目標

専門性

■ 達成目標

学卒院生：教育課程編成やカリキュラム開発の基礎を得るとともに、カリキュラムの見方や考え方を修得する。

現職院生：自らの経験を通して教育課程やカリキュラム開発の在り方を検討することを通して、実際の教育現場に存在する問題解決に必要なカリキュラムの見方や考え方を修得する。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察 受講前後での受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）1年次学生

■ 授業計画

全授業を担当教員 2名が共同で担当する

- 第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における教育課程の編成の実際：受講者の実際を交流し、本講義の目的、内容、方法を明示する
- 第2回：学校教育と学習指導要領：学校教育と学習指導要領の関係性について説明する
- 第3回：教育課程編成の意義と原理：教育課程編成の基本的な枠組みについて考察する
- 第4回：教育課程編成と内容や指導の順序性・系統性：教育課程編成の実際について考察する
- 第5回：教育課程と指導計画：教育課程と各教科等の指導計画の実際にて考察する
- 第6回：へき地校・複式学級設置校の教育課程の編成事例～伝統的なカリキュラムマネジメントの実例：へき地や小規模校で設置されることがある複式学級の教育課程を事例として扱い、カリキュラムの在り方を議論する。
- 第7回：学校の特色に合わせた教育課程・指導計画の作成：学校の特色に合わせた教育課程・指導計画の作成を個人もしくはグループで行う
- 第8回：教育課程編成・指導計画作成と二学期制・三学期制の利点と欠点：二学期制と三学期制のそれぞれのメリット・デメリットを議論するとともに、今日的な課題の解決としてどのような学期制が有効か討論する。
- 第9回：各教科以外の指導計画の内容を取り扱い（1）（道徳・特別活動を中心）：指導計画の作成を個人もしくはグループで行う
- 第10回：各教科以外の指導計画の内容を取り扱い（2）（総合的な学習の時間・学校行事を中心に）：指導計画の作成を個人もしくはグループで行う
- 第11回：個に応じた指導の充実と課題：個に応じた指導の実際を交流するとともに、望ましい指導の在り方を討論する
- 第12回：模擬的な教育課程の編成・指導計画作成演習（1）教育課程を中心に：これまでの学びを整理する形で理想的な教育課程の編成作業を個人で行う
- 第13回：模擬的な教育課程の編成・指導計画作成演習（2）指導計画を中心に：これまでの学びを整理する形で理想的な指導計画の作成作業を個人で行う
- 第14回：教育課程や指導計画の評価と改善（模擬的に作成したものを例）：作成した理想的な教育課程・指導計画を発表し、意見交換を行う
- 第15回：授業のまとめ～カリキュラムマネジメントの考え方が学校を変える：授業全体を総括し、カリキュラムを主たる手段として学校の課題を解決し、教育目標を達成する営みであるカリキュラムマネジメントが現任校（採用希望校種）の課題解決にどのように寄与するのかについて意見交換する

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

授業の際に連絡する。

■ 事後学習

授業の際に連絡する。
毎時間の最後に学びの記録を作成するので、学びを振り返った後に必要な学習を各自が行うこと。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配布する。

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

現任（採用希望）校とその前後の就学段階の学習指導要領と解説。

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

何か教えを請う姿勢ではなく、自らとこれから受け持つ子どものために自ら学ぶ姿勢を受講生には求めたい。
授業中の提出物（課題等）は、教師教育の学術研究の資料として回答者が特定されない形で使用することがある。

■■ オフィスアワー

吉田：研究室（教育学部本館棟438）前に時間割とスケジュールを掲示している。基本的には授業時間と諸用務で留守にしている時間以外は研究室に在室しているが事前に電子メール等で連絡していただければ幸いである。
比嘉：月曜14：00-17：00

■■ メールアドレス

吉田：whelk@eve.u-ryukyu.ac.jp
比嘉：higa-t@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	木2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50102001	指導と評価の課題と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
吉田 安規良, 比嘉 俊			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

講義と演習を適宜組み合わせながら教育実践の本質とも換言できる「指導」とその鏡である「評価」に必要な理論を学ぶ。現職院生は自らの教育実践を、学卒院生は教育実習での経験や児童生徒として受けしてきた教育を見つめることとあわせて、指導と評価に関する理解を深め、指導と評価を一体化させた教育実践力について理論と実践を往還しながら考える。さらに将来的に起こり得る課題に応える術（ヒント）を修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむことを目指す。

- (1) 現任（採用希望）校での各教科の授業を中心に、指導と評価に関する理解を深める。
- (2) 「評定」が付随しない「評価」（総合的な学習の時間や教科としての「道徳」等）の指導と評価に関する理解を深める。
- (3) 各教科等の目標や内容を理解した上で、授業実践に活用できる実用的な指導と評価の計画を作成する

現任（採用希望）校で実際に担当している教科指導を例にし、教科の目標と内容、評価の観点と具体的な評価規準、評価技法（方法）と評価基準についての理解を深めるとともに、児童生徒の学力の把握と個に応じた指導と支援の充実に応える指導と評価の計画を作成・提案する。とりわけ沖縄県の教育課題である「学力向上（学力不振からの脱却・学習意欲の向上）」に応えることに迫る。

■ URGCC学習教育目標

専門性

■ 達成目標

学卒院生：「指導」と「評価」についての理解を深めるとともに、実践の中でそれを還元する際に必要な見方や考え方、必要な技能を修得する。
現職院生：自らの経験を通じ「指導」と「評価」の在り方を検討することを通して、「指導」と「評価」についての理解を深めるとともに、現実の教育活動に必要な「指導」と「評価」に関する見方や考え方、必要な技能を修得する。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察 受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）1年次

■ 授業計画

全授業を担当教員 2名が共同で担当する

- 第1回：現任（採用希望）校を例にした評価の実際：受講者の実際を交流し、本講義の目的、内容、方法を明示する
- 第2回：評価で明らかになる学力と各教科の内容と教材との関係（1）：ある教科・内容で到達すべき目標に迫る教材について個人もしくはグループで分析する
- 第3回：評価で明らかになる学力と各教科の内容と教材の実際（2）：分析した結果を基に、評価の在り方について意見交換する
- 第4回：現任（採用希望）校を例にした評価結果の活用の実際：受講者の経験を発表し、意見交換する
- 第5回：観点別学習状況評価と評定の関係：評価と評定の関係性と具体的な評価技法について講義する
- 第6回：評定がなじまない学習活動の指導と評価～道徳や総合的な学習を例に：評定しない学習活動の評価の在り方についてその実際を交流するとともに求められる評価の在り方について意見交換する
- 第7回：評価技法について（1）ペーパーテストを中心としたワークショップ：ペーパーテストの作成を通して何をどう評価していくのかを演習する
- 第8回：評価技法について（2）ペーパーテスト以外を中心としたワークショップ：ペーパーテスト以外の評価技法を用いた評価で何をどう評価していくのかを演習する
- 第9回：評価結果の統計的処理（1）：評価結果を授業に生かすための統計的処理について講述する
- 第10回：評価結果の統計的処理（2）：評価結果を授業に生かすための統計的処理について演習する
- 第11回：評価結果の統計的処理（3）：評価結果を授業に生かすための統計的処理をした結果からわかるところ（分析・考察）について演習する
- 第12回：模擬的な指導と評価計画の作成演習：受講者各人がある1単元（単位時間）を中心とした実用的な評価計画を作成する演習を行う
- 第13回：模擬的な指導と評価計画の分析：作成した評価計画を相互に発表し、その妥当性を議論した上で再度練り直す
- 第14回：模擬的な指導と評価計画の検証：練り直した評価計画を相互に発表し、その妥当性を検証する
- 第15回：授業のまとめ：これまでの講義・演習を通して受講者各人が現実的で望ましい指導と評価について提案し、意見交換する。あわせて授業全体を総括し、受講者各人の成果や課題を把握する
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

授業で指示する。

■ 事後学習

授業で指示する。
毎時間の最後に学びの振り返りを行う。各自振り返りしたことに関して不足部分を学習すること。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考
授業時に適宜必要な資料を配布する。

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考
現任（採用希望）校種とその前後の就学段階の学習指導要領と解説。現任教で作成された評価規準・基準資料。実際に使用している教科書、教師用指導書。

■■ 使用言語
日本語

■■ メッセージ
何か教えを請う姿勢ではなく、自らとこれから受け持つ子どものために自ら学ぶ姿勢を受講生には求めたい。
授業中の提出物（課題等）は、教師教育の学術研究の資料として回答者が特定されない形で使用することがある。

■■ オフィスアワー
吉田：研究室（教育学部本館棟438）前に時間割とスケジュールを掲示している。基本的には授業時間と諸用務で留守にしている時間以外は研究室に在室しているが事前に電子メール等で連絡していただければ幸いである。
比嘉：月曜14：00-17：00

■■ メールアドレス
吉田：whelk@eve.u-ryukyu.ac.jp
比嘉：higa-t@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	水1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50201001	教授・学習の課題と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
道田 泰司, 藏満 逸司			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

よりよい教授行為を行うためには、人がどのように学び、どのようにつまずき、どのように深まるかについて、実践的な知識を持つことが不可欠である。しかしそのような知見は、心理学の学習理論を視点として持ちつつ実践を見る目を養わなければ容易には身につかない。本授業はそのような人の学びのプロセスについて、知識・技能の習得と活用などの観点から理解し、それを踏まえて児童生徒のつまずきに対応した指導方法を知り、言語活動や協働学習なども含めた適切な学習指導方法を構想する力量の向上を図る。

■ URGCC学習教育目標

社会性、専門性

■ 達成目標

授業の到達目標及びデータ

- (1)児童生徒の学習のあり方について理解する。
- (2)児童生徒の学習状況に合わせたさまざまな指導方法を知る。
- (3)適切に児童生徒の学習状況を見取り、状況に合わせて適切な学習指導方法を構想できる。

毎回提示される事例を通して児童生徒の学習ならびに指導方法の理論について学び、それを数度のワークショップや協働作成によって具体化することにより、理論と実践が融合された視点を持つ実践者へと成長するきっかけをつかむことをを目指す。

【到達目標】

学卒院生：児童生徒の学習のあり方や状況に合わせた指導方法について、教育実習での経験や児童生徒として受けた教育を見つめることを通して基礎的知識を得るとともに、実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

現職院生：児童生徒の学習のあり方や状況に合わせた指導方法について、自らの経験の省察ならびに理論を通して理解を深めるとともに、児童生徒の学習状況に合わせた実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

■ 評価基準と評価方法

毎回の授業において質問や意見を表明するなど、積極的に参加しているか、および、最終的に作成された実践的指導方法計画において、それまでの学びがいかされたものになっているかによって評価する

■ 履修条件

教職大学院必修科目

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション（これまでの振り返り）
- 第2回：学びのプロセス（1）学習方略と学習観
- 第3回：グループ発表準備
- 第4回：学びのプロセス（2）知識はネットワークになっている
- 第5回：学びのプロセス（3）メタ認知と理解の深化
- 第6回：学びのプロセス（4）技能の習得と学習
- 第7回：学びのプロセス（5）次への活用につながる学習
- 第8回：学びのプロセス（6）学ぶ意欲と学習
- 第9回：学習指導（1）効果的な言語活動のあり方
- 第10回：学習指導（2）効果的な協働学習のあり方
- 第11回：学習指導（3）効果的な評価のあり方
- 第12回：実践的指導方法計画作成演習（1）レポート構想
- 第13回：実践的指導方法計画作成演習（2）第一次発表会
- 第14回：実践的指導方法計画作成演習（3）第二次発表会
- 第15回：授業のまとめ
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

授業時に指示する。グループによる発表準備あり。

■ 事後学習

各自で学びを振り返り、個人の課題や勤務校（勤務校種）の課題、県の課題と結び付ける。

■ 教科書にかかる情報

教科書	書名	学習支援のツボ（必要数を確認し、こちらで発注予定）			ISBN	4762828653	備考	
	著者名							
	出版社		出版年		NCID			

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

■ メールアドレス

michita@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	木4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50202001	思考・判断・表現力育成の課題と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
藏浦 逸司, 道田 泰司			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

人の思考の性質や思考を刺激する方法について理解とともに、児童生徒の思考に対応したさまざまな指導方法を知り、児童生徒の思考・判断・表現の現状を想定しつつ、状況に合わせて適切な学習指導方法を構想できる力量の向上を目指す。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

授業の到達目標及びテーマ

- (1)思考を刺激するさまざまな方法について理解する。
- (2)児童生徒の思考を見取りながら適切な指導方法を選択できる。
- (3)児童生徒の思考・判断・表現の現状を想定しつつ、状況に合わせて適切な学習指導方法を構想できる。

事例分析を通して児童生徒の思考状況の理解ならびに指導方法の理論について学び、それを数度のワークショップや協働作成によって具体化することにより、理論と実践が融合された視点を持つ実践者へと成長するきっかけをつかむことを目指す。

【到達目標】

学卒院生：児童生徒の思考状況の理解や指導方法について、教育実習での経験や児童生徒として受けた教育を見つめることを通して基礎的知識を得るとともに、実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

現職院生：児童生徒の思考状況や指導方法について、自らの経験の省察ならびに理論を通して理解を深めるとともに、児童生徒の状況に合わせた実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

■ 評価基準と評価方法

毎回の授業において質問や意見を表明するなど、積極的に参加しているか、および、最終的に作成された実践的指導方法計画において、それまでの学びがいかされたものになっているかによって評価する。

■ 履修条件

教職大学院・必修科目

■ 授業計画

- 第1回：児童生徒の思考・判断・表現力の振り返り（ワークショップ）
- 第2回：思考力育成の基礎(1)試行錯誤を通じた思考（事例分析）
- 第3回：思考力育成の基礎(2)協働を通じた思考（事例分析）
- 第4回：思考力育成の基礎(3)知識を通じた思考（事例分析）
- 第5回：合理的で反省的な思考としてのクリティカルシンキング（講義とワークショップ）
- 第6回：各学校における思考・判断・表現力育成の振り返り（ワークショップ）
- 第7回：思考力育成の実際(1)問題解決学習における思考・判断（事例分析）
- 第8回：思考力育成の実際(2)知識と思考をつなぐ授業における思考・判断（事例分析）
- 第9回：思考力育成の実際(3)おたずねを中心とした授業における思考・判断（事例分析）
- 第10回：思考力育成の実際(4)正解のない問いに対する思考・判断（事例分析）
- 第11回：表現力育成の実際（事例分析）
- 第12回：思考力育成教育作成演習（1）受講生チームによる協働作成
- 第13回：思考力育成教育作成演習（2）受講生チームの発表と評価
- 第14回：思考力育成教育作成演習（3）評価を踏まえた再構想
- 第15回：授業のまとめ
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

授業時に指示をする

■ 事後学習

感想と質問をweb classを使って記入するよう指示を出す。

■ 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

藏満逸司 火曜日午前中（事前にメールで確認してください）

 メールアドレス

michita@edu.u-ryukyu.ac.jp
itsushi@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	月3	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50301001	生活指導・生徒指導の実践と課題	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
丹野 清彦, 村末 勇介, 上間 陽子			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

生活指導・生徒指導及び教育相談の意義や実践、課題等について理解するとともに、現任（採用希望）校の実際を事例にしながら現在の生活指導・生徒指導と実践上の問題点や反省点を分析しつつ、教育課程内外の活動の融合や個に応じた指導、時代や社会が要請する諸事項に応えうる生活指導・生徒指導の力量の向上を図る。

生徒指導及び教育相談について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむ。

また生活指導・生徒指導の概念について、学習指導要領や資料をもとに、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。実践報告や演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を意識した力を身につける。沖縄県では、毎年のように生活指導的な課題やいじめに關した重大事案の報道がされ、多くの教育関係者や保護者・地域の方が胸を痛めている。いじめや不登校の問題は発達障害を持つ子どもや貧困問題と関連し学校や学校、あるいは地域で孤立している子どもや家庭も多く、沖縄県の抱える地域的な課題のひとつであるといえよう。しかし、いじめ・いじめられる子どもをどう分析し子ども理解を図ればよいのか、構想や積極的な指導についての専門的な知識と技術が必要であることを解説する。

そこで、事例をもとに子ども理解を深め理論と実践をつなぐことを意図する。そのため、各自の実践事例を中心に、自分小学校時代や中学・高校を思い出し、あるいは実践を思い出し実践を構想することを行い、実践記録を書くことを通して自己の実践を見つめ、これから実践を構想すること。

迫り方としては、授業では以下のような工夫を行い展開していく。

1. アクティブラーニングを取り入れ、グループ毎に自身の体験と結びつけて話し合う時間を設定する。
2. テーマによっては、ゲストティーチャーを招聘したりビデオ視聴をしたりして、より実践的・実感的な学習ができるようにする。
3. 授業ごとにミニ感想文を書き、相互に交流して学習の成果を共有できるようにする。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

非現職院生：生活指導・生徒指導及び教育相談についての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から生徒指導及び教育相談のあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得する。

現職院生：生活指導・生徒指導及び教育相談についての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から生徒指導及び教育相談のあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得する。

そのうえで、

- 1 子ども同士の関係性や生活指導上の問題を読み取り、見通しのある積極的な指導や早期発見に向けた対策や支援を目指し、子どもたちの抱えている課題を把握し、実践するための意義を理解できる。【社会性】【コミュニケーションスキル】【情報リテラシー】
- 2 気になる子には発達障害の子どもや家庭環境に課題のある子が多く、彼らの発達支援に向け、どのようにまわりの理解をつくりだすのか、基礎的な方法を理解できる【専門性】
- 3 カラフルを起こす子や気になる子には、成育歴や家庭環境に課題を抱えている場合が多く、彼らの問題行動を否定の中の肯定として読み替える力やどのような支援や指導が必要なのか基礎的な知識を理解できる。【自律性】【社会性】【コミュニケーションスキル】
- 4 子どもの権利条約や人権的な視点から子どもを守るために教師の発言や対話、指導を見直し、個と集団の指導の基礎を身につけることができる。【専門性】
- 5 子どもが行きたくなる学校、学びたくなる授業のあり方を整理し、学校行事や学級イベントなどの自主的な活動を年間計画に位置付け、自治的な活動を作りだすこと

を意図する基礎的な実践力を身につけることができる。【問題解決的能力】【専門性】

■ 評価基準と評価方法

非現職院生

- ①生活指導・生徒指導の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、実践を分析・検討・省察して自らの見解として表現することができたか。
- ②生活指導・生徒指導及び教育相談のあり方について、自身の経験や事例を分析・検討・省察するうえで、より広い視野と見地から指導のあり方を考察し、実践を構想することができたか。

現職院生

- ①生活指導・生徒指導の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、自らの経験を振り返り実践を分析・検討・省察して自らの見解として表現することができたか。
- ②生活指導・生徒指導及び教育相談のあり方について、自身の実践や事例を分析・検討・省察するうえで、より広い視野と見地から指導のあり方を考察し、実践を構想することができたか。

評価方法

各授業ごとの考察と全授業終了後に授業内容と講義に関する研究を踏まえ、レポートを提出し、それらを評価基準に照らして評価する。

■ 履修条件

特になし

■ 授業計画

授業計画：全授業を担当教員3名が共同で担当する

第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における生活指導・生徒指導の実際

第2回：「生徒指導提要」（文科省）にみる生徒指導の意義

第3回：個別・集団の行動評価を通じた学級の規範づくり、生活指導とは何か
第4回：学級の文化づくりを中心とした学級経営の実際
第5回：表現活動を中心とした個性尊重の場としての生活指導・生徒指導
第6回：個別の学習指導と生活指導・生徒指導のかかわり（詩を書くことを通して）
第7回：保護者との連携・協力と生活指導・生徒指導の実際（学級文化をつくる）
第8回：教育相談の充実
第9回：発達障害の実践事例と生活指導・生徒指導上の対応
第10回：問題行動に対する実践事例と生活指導・生徒指導上の課題
第11回：不登校のとらえ方と実践事例
第12回：学級崩壊の分析と生活指導・生徒指導上の実践課題
第13回：模擬的な学級開きの構想1（1～12回の授業を踏まえた構想を2回に渡って発表し検討する。）
第14回：模擬的な学級開きの構想2
第15回：授業のまとめ
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■■ 事前学習

非現職院生

- ①教育実習等を含めた経験の他に学部等での学習の成果を生活指導・生徒指導の視点から整理して授業にのぞむ。
- ②授業を通して考察したことを授業ごとに振り返り、まとめるなどをとして生活指導・生徒指導についての知見を広げる。

現職院生

- ①教育実習や現場経験等を含めた経験の他に学部等での学習の成果を生活指導・生徒指導の視点から整理して授業にのぞむ。
- ②授業を通して考察したことを授業ごとに振り返り、まとめるなどをとして生活指導・生徒指導についての知見を深める。

■■ 事後学習

レポート等にまとめて提出してもらいます

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

現任（採用希望）校の課題と「生徒指導提要」（文科省），学習指導要領とその解説。

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

授業ごとの資料等については整理し、かく授業や最終レポートに反映できるようにしておくこと。また、自らも先行研究や自分の実践等について整理すること。

■■ オフィスアワー

■■ メールアドレス

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	水2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50302001	学校不適応への実践と課題	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
丹野 清彦, 城間 園子, 上間 陽子			

■ 授業の形態

■ アクティブラーニング

■ 授業内容と方法

学校不適応及び特別支援の意義や実践、課題等について理解するともに、現任（採用希望）校の実際を事例にしながら現在の生徒指導と実践上の問題点や反省点を分析しつつ、教育課程内外の活動の融合や個に応じた指導、時代や社会が要請する諸事項に応えうる学校不適応及び特別支援教育の力量の向上を図る。

学校不適応及び特別支援について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむ。

- ①学校不適応及び特別支援についての本質や必要な事項について理解する。
 - ②学校の所在する地域や児童生徒の実態といった学校事情に応じた学校不適応及び特別支援の検証や対応について構想し、実践することができる。
- ことを内容とし、そのために実践例や資料をもとに検討し討論する。

【具体的には】

学校不適応について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を意識した力を身につける。沖縄県では、いじめや不登校の问题是発達障害を持つ子どもや貧困問題と関連し学級や学校、あるいは地域で孤立している子どもや家庭も多く、沖縄県の抱える地域的な課題のひとつであるといえよう。しかし、いじめられる子どもをどう分析し子ども理解を図ればよいのか、より良い集団、より良い人間関係の課題にどう迫るのか、現状を分析する専門的な知識と技術が必要であることを解説する。

そこで、事例や資料をもとに子ども理解や保護者理解、学校としての取り組みや地域や市町村単位での組織的な取り組みの必要性を理解し理論と実践をつなぐことを意図する。そのため、優れた実践を聞き、子どもたちが置かれている状況や、学校の在り方をとらえ直し、子どもたちが生きやすい楽しい学校・学級にするために、どのように実践を展開したらいいのかに迫っていく。

迫り方としては、授業では以下のような工夫を行い展開していく。

1. アクティブラーニングを取り入れ、グループ毎に自身の体験と結びつけて話し合う時間を設定する。
2. テーマによっては、ゲストティーチャーを招聘したりビデオ視聴をしたりして、より実践的・実感的な学習ができるようにする。
3. 授業ごとにミニ感想文を書き、相互に交流して学習の成果を共有できるようにする。

このような講義を通して、子どもたちの話し合い活動を中心とした特別活動の持つ意味や特性などを明らかにしたい。なお、現代的な課題であるいじめや不登校、発達障がいの子どもたちも取り上げ、学校が抱える課題を理解できるようにする。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

◆授業の到達目標

次の2つの目標を立てている。

非現職院生：学校不適応の子ども支援のための地域、保護者との協力関係づくりについての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な子ども支援のための 行政や学校組織、地域、保護者との連携関係づくりのあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得できる。

現職院生：学校不適応の子ども支援のための地域、保護者との協力関係づくりについての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から子ども支援のための行政や学校組織、地域、保護者との連携関係づくりのあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得できる。

具体的な達成目標として、

- 1) 学校不適応の子ども支援の重要性について理解する。【専門性】
- 2) そのため、どのような支援体制を構築するればよいのか、学校体制について関心を持つ。】【社会性】【コミュニケーションスキル】
- 3) 気になる子や気になる保護者を、困っている子、困っている親と読みかえ、共に成育歴や家庭環境に課題を抱えている場合が多く、読み替える力やどのような支援や指導が必要なのか、基礎的な問題を理解できる。【自律性】【社会性】【コミュニケーションスキル】
- 4) 子どもの権利条約や人権的な視点から、支援の必要な子どもにどのような配慮がいるのか、学校や地域、社会のあり方に目を向け、改善点を指摘できる。【専門性】
- 5) 行政や保護者や地域と連携するために何が必要なのか事例をもとに明らかにし学校の実情にあった対応計画を作成することができる。【問題解決の能力】【専門性】

■ 評価基準と評価方法

学校不適応及び特別支援教育の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができる。

分析・検討・省察の内容と学生自身の見解が、学校不適応及び特別支援教育の概要を十分に反映したものになっていることが確認できる場合に単位を与える。

非現職院生

①学校不適応及び特別支援教育の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、分析・検討・省察して自らの見解として表現することができたか。

②分析・検討・省察の内容と自身の見解が、学校不適応及び特別支援教育の概要を十分に反映し、より広い視野と見地から考察し、実践のあり方を考察することができたか。

現職院生

①学校不適応及び特別支援教育の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、分析・検討・省察して自らの経験と重ねて見解として表現することができたか。

②分析・検討・省察の内容と自身の見解が、自信の実践と学校不適応及び特別支援教育の概要を十分に反映し、より広い視野と見地から考察し、実践のあり方を考察することができたか。評価方法

各授業ごとの考察と全授業終了後に授業内容と講義に関する研究を踏まえ、レポートを提出し、それらを評価基準に照らして評価する。

■■ 履修条件

特になし

■■ 授業計画

授業計画：全授業を担当教員3名が共同で担当する
第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における学校不適応及び特別支援の実際
第2回：「生徒指導提要」（文科省）にみる学校不適応及び特別支援の意義
第3回：児童生徒個別の発達障害と学校不適応についての検討①（発達障害中心）
第4回：児童生徒個別の発達障害と学校不適応についての検討②（不適応事例中心）
第5回：学校不適応における学校自体の課題についての検討①（発達障害への対応中心）
第6回：学校不適応における学校自体の課題についての検討②（不適応への対応中心）
第7回：保護者との連携・協力と生徒指導の実際①（これまでの事例の検討）
第8回：保護者との連携・協力と生徒指導の実際②（特別支援教育のこれまでのあり方の検討）
第9回：発達障害の実践事例と生徒指導上の対応①（発達障害に対する事例検討）
第10回：発達障害の実践事例と生徒指導上の対応②（発達障害に対する組織的対応）
第11回：不登校のとらえ方と実践事例 検討①（不登校に対する事例検討）
第12回：不登校のとらえ方と実践事例 検討②（不登校に対する組織的対応）
第13回：模擬的な学校不適応に対する構想①（授業を踏まえた構想を2回に渡って発表し検討する。）
第14回：模擬的な学校不適応に対する構想②（授業を踏まえた構想を2回に渡って発表し検討する。）
第15回：授業のまとめ
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■■ 事前学習

非現職院生

- ①教育実習等を含めた経験の他に学部等での学習の成果を学校不適応の視点から整理して授業にのぞむ。
- ②授業を通して考察したことを授業ごとに振り返り、まとめることをとして学校不適応についての知見を広げる。

現職院生

- ①教育実習や現場経験等を含めた経験の他に学部等での学習の成果を学校不適応の視点から整理して授業にのぞむ。
- ②授業を通して考察したことを授業ごとに振り返り、まとめることをとして学校不適応についての知見を深める。

■■ 事後学習

レポートにまとめて提出してもらいます

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

現任（採用希望）校の課題と「生徒指導提要」（文科省），学習指導要領とその解説。

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

授業ごとの資料等については整理し、各授業や最終レポートに反映できるようにしておくこと。また、自らも先行研究や自分の経験や実践等について整理すること。

■■ オフィスアワー

■■ メールアドレス

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	木1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50401001	学級経営の実践と課題	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
白尾 裕志, 村末 勇介			

■ 授業の形態

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

学級経営の意義や実践、課題等について理解とともに、現任（採用希望）校の実際を事例にしながら現在の学級経営と実践上の問題点や反省点を分析しつつ、教育課程内外の活動の融合や個に応じた指導、時代や社会が要請する諸事項に応えうる学級経営の力量の向上を図る。

学級経営についての本質や必要な事項について、これまでの経験や先行研究から理解する。さらに、学校の所在する地域や児童生徒の実態といった学校事情に応じた学級経営の在り方及び検証を通して学級経営について構想する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

学卒院生：学級経営についての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から学級経営のあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得する。

現職院生：学級経営についての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から学級経営のあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得する。

■ 評価基準と評価方法

学卒院生：① 学級経営についての自らの見識の上に省察を加え、論理的にまとめることができたか。
② より広い視野と実践的な見地から学級経営のあり方について考察し、これらを踏まえた実践力のあり方を構想することができたか。

現職院生：① 学級経営についての自らの経験と見識の上に省察を加え、論理的にまとめることができたか。

② より広い視野と実践的な見地から学級経営のあり方について考察し、これらを踏まえた実践力のあり方を構想することができたか。

評価方法：各授業ごとの考察と全授業終了後に授業内容と学級経営に関する先行研究を踏まえたレポート提出して、それらを基に評価基準に照らして評価する。

■ 履修条件

特になし。

■ 授業計画

- 1 学級経営についての概念及び現職院生の経験知としてのまとめを確認して、学級経営における課題や求められることについて考察してまとめる。
- 2 学級経営についての概念及び現職院生の経験知としてのまとめを確認して、学級経営における課題や求められることについて考察してまとめる。
- 3 現任（採用希望）校の実際を事例にしながら現在の学級経営と実践上の問題点や反省点を分析、検討する①。
- 4 現任（採用希望）校の実際を事例にしながら現在の学級経営と実践上の問題点や反省点を分析、検討する②。
- 5 学級経営上の課題を教育課程の融合の視点から検討する。
- 6 学級経営上の課題を個別指導や集団指導の視点から検討する。
- 7 学級経営上の課題を時代や社会が要請する諸事項に応えうる学級経営の視点から検討する。
- 8 学級経営に関する先行研究から現代の学級経営の課題について検討する。※学級組織からの学級づくり①
- 9 学級経営に関する先行研究から現代の学級経営の課題について検討する。※学級組織からの学級づくり②
- 10 学級経営に関する先行研究から現代の学級経営の課題について検討する②。※個別指導からの学級づくり①
- 11 学級経営に関する先行研究から現代の学級経営の課題について検討する②。※個別指導からの学級づくり②
- 12 学級経営を多様な視点から分析し、再構成して実践可能な構想案を作成する①
- 13 学級経営を多様な視点から分析し、再構成して実践可能な構想案を作成する②
- 14 学級経営試案を発表して、検討する。
- 15 学級経営試案を検討して、まとめる。

■ 事前学習

学卒院生 ① 教育実習等を含めた経験の他に学部等での学修の成果を「学級経営」の視点から整理して授業に臨む。
② 授業を通して考察したことを授業毎に振り返り、まとめることを通して学級経営についての知見を広げる。

現職院生 ① 教育実習等を含めた経験の他に学部等での学修の成果を「学級経営」の視点から整理して授業に臨む。
② 授業を通して考察したことを授業毎に振り返り、まとめることを通して学級経営についての知見を深める。

■ 事後学習

・自らの経験と学修したことを比較、考察してまとめる。

■ 教科書にかかる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかる情報

 参考書全体備考

生徒指導提要（文部科学省）

 使用言語

日本語

 メッセージ

授業ごとの資料等については整理し、各授業や最終レポートに反映できるようにしておくこと。また自らも先行研究にあたること。

 オフィスアワー

月曜日 16時～17時・318研究室

 メールアドレス

shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	月4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50402001	学校改革の実践と課題	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
田中 洋, 小林 稔, 下地 敏洋			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

学校教育の現在と改革の方向性について、中央教育審議会答申等の基本資料を読みながら理解するとともに、実践事例を分析することによって、学校経営の構想力を養う。そのうえで、有効な学校改革ビジョンを作成する。

学校経営についての本質及び基本的事項について理解を深めるとともに、今後の学校経営に求められる基礎的な資質・能力を養う。

学校経営に関する基本的理論を概観するとともに、自らの経験に照らし合わせながら、学校改革に関わる具体的な事例を検討する。それによって、学校改革にあたって必要な資質・能力の修得を目指す。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

・学卒院生：学校経営に関する基礎的理論について理解するとともに、学校改革の具体的な事例の検討を通じて、学校改革に必要な視点や条件等を省察しながら組織の一員として積極的に参画することができる資質・能力を養う。

・現職院生：学校経営に関する基礎的理論について、自らの実践に照らし合わせながら理解するとともに、具体的な事例の検討を通じて、学校改革を現実的課題として取り組むことができる資質・能力を養う。

■ 評価基準と評価方法

- レポート…個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
- 受講態度…授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
- 発表/表現…授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
- 自己省察…受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次生

■ 授業計画

全授業を担当教員 3 名が共同で担当する

第1回：イントロダクション（学校改革の意義）

第2回：学校経営概論 1 …学校をめぐる現状

第3回：学校経営概論 2 …学校がめざす理念

第4回：学校経営概論 3 …現状と理念の齟齬を埋めるために

第5回：実践事例研究 1 …教員組織

第6回：学校経営課題改善に向けたビジョン作り 1 …教員組織

第7回：実践事例研究 2 …教育課程

第8回：学校経営課題改善に向けたビジョン作り 2 …教育課程

第9回：実践事例研究 3 …家庭との連携

第10回：学校経営課題改善に向けたビジョン作り 3 …家庭との連携

第11回：実践事例研究 4 …地域連携

第12回：学校経営課題改善に向けたビジョン作り 4 …地域連携

第13回：実践事例研究 5 …その他

第14回：学校経営課題改善に向けたビジョンの発表

第15回：まとめ

(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業で配布した資料等の精読や授業時に適宜指示する関連資料等について学習する。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

授業時に適宜指示・配布する。

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

中央教育審議会答申等の各種資料等。

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

常時受け付ける（教育学部棟325室）。

■ メールアドレス

tanakah@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	月2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50501001	学校教育・教員のあり方の課題と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
田中 洋, 下地 敏洋			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

現在の学校教育に求められている役割について、中央教育審議会答申等の基本資料を読みながら理解するとともに、家庭や地域との連携に関する実践事例を分析することによって、学校教育と教員の在り方について検討する。そのうえで、自身のこれまでの教員としての在り方について、合理的反省を行い、今後の指針を作成する。

今日の学校に求められている役割について、家庭や地域社会との連携を視野に入れながら、理解を深め、それを担う教員としての資質及び能力を養う。

学校及び教員について、その役割がどのように論じられてきたのかを理論的に振り返るとともに、自らの経験に照らし合わせながら、具体的な事例を検討する。それによって、学校及び教員のるべき姿を察できる資質・能力を修得する。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

- ・学卒院生：学校及び教員の役割について、これまでの理論を振り返ることによってイメージをつかむとともに、具体的な事例の検討を通じて、学校及び教員のるべき姿を模索できる資質・能力を養う。
- ・現職院生：学校及び教員の役割について、自らの実践に照らし合わせながら、これまでの理論を振り返るとともに、具体的な事例の検討を通じて、今後の自らの学校・教員像を描くことができる。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート…個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度…授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現…授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察…受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次生

■ 授業計画

全授業を担当教員 2 名が共同で担当する

第1回：イントロダクション（学校・教員の役割）

第2回：学校とは

第3回：学校と家庭の連携とは

第4回：実践事例研究 1～保護者～

第5回：実践事例研究 2～PTAその他の組織～

第6回：学校と社会の連携とは

第7回：実践事例研究 3～地域住民～

第8回：実践事例研究 4～行政・大学・企業～

第9回：学校と家庭と社会の連携とは

第10回：実践事例研究 5～その他～

第11回：現任校での家庭・地域との連携に関する報告 1

第12回：現任校での家庭・地域との連携に関する報告 2

第13回：家庭・地域との連携から見たあるべき学校・教員像の作成 1

第14回：家庭・地域との連携から見たあるべき学校・教員像の作成 2

第15回：家庭・地域との連携から見たあるべき学校・教員像の発表

(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業で配布した資料等の精読や授業時に指示した関連テーマの資料等について学習する。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

授業時に適宜指示・配布する。

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

中央教育審議会答申等の各種資料等。

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

常時受け付ける（教育学部棟325室）。

■ メールアドレス

tanakah@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	火1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K50502001	沖縄の学校と社会	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
下地 敏洋, 比嘉 優, 城間 園子			

■ 授業の形態

演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

講義と演習を適宜組み合わせながら沖縄の学校と社会の実態と課題について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつくる。

(1) 沖縄県の教育についての実態と課題を知り、指導方法の在り方について理解する。

(2) 沖縄県の教育の現状を把握した上で、進路指導や様々な教育課題に対する実践的資質・能力を養成する。

沖縄県の教育について社会とのかかわりなどより広い視野からの実態と課題の理解を進め、教育上の諸課題を明確にしながら、これまでの実践例を検討して、課題解決に有効な実践的な指導力を養う

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

学卒院生：沖縄の学校と社会の実態と課題についての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な対応のしかたについて考察し、課題解決に必要な実践的資質・能力を養成する。

現職院生：沖縄の学校と社会の実態と課題についての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な対応のしかたについて考察し、課題解決に必要な実践的資質・能力を養成する。

■ 評価基準と評価方法

沖縄の学校と社会の概要の理解を内容の具体的事例に即して、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができる。分析・検討・省察の内容と学生自身の見解が、沖縄の学校と社会の概要を十分に反映したものになっていることが確認できる場合に単位を付与する。

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次

■ 授業計画

全授業を担当教員3名が共同で担当する

第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における教育上の課題の分析（実態確認）

第2回：沖縄県の学校で取り上げられている教育上の諸課題とその背景についての分析1（学校）

第3回：沖縄県の学校で取り上げられている教育上の諸課題とその背景についての分析2（地域社会）

第4回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析1（沖縄の現状についての歴史的背景）

第5回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析2（沖縄の学力問題）※進路指導の課題を含む

第6回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析3（沖縄の家庭教育）※進路指導の課題を含む

第7回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析4（沖縄の子どもと社会：貧困問題）

第8回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析5（沖縄の子どもの生活：遊び・暮らし）

第9回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析6（沖縄の健康・食生活・医療）

第10回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析7（沖縄の子どもと教育）※進路指導を含む

第11回：沖縄県の教育と社会についての先行研究の分析8（沖縄の子どもと墓地）

第12回：沖縄県の教育と社会についてのまとめ1（全体での総括：教育課題の明確化）

第13回：沖縄県の教育と社会についてのまとめ2（院生による個別のまとめ）

第14回：沖縄県の教育と社会についてのまとめ3（院生による個別のまとめと発表）

第15回：授業のまとめ ※発表の続きを含む

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

■ 事前学習

- ・授業で指示する。
- ・授業で使用する事例については受講者が持ち寄る。

■ 事後学習

- ・授業で討論及び発表した内容について、関連する図書及び資料を確認するものとする。
- ・必要に応じて、課題についてエッセイ及び課題文を提出するものとする。

■ 教科書にかかる情報

■ 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配布する。

参考書にかかる情報

参考書全体備考

授業時に適宜必要な資料を提示する。

使用言語

日本語

メッセージ

オフィスアワー

メールアドレス

shimoto@edu.u-ryukyu.ac.jp

URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	金1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51101002	授業分析・リフレクションの理論と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
多和田 実, 小林 稔			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

自らの実践と教育理論とを往還する術であるリフレクションについて学び、リフレクションの結果を教育実践の改善へつなげる術を学ぶ。さらに演習を通してリフレクションの理論と実践を往還する。

さらに将来的に起こり得る課題に応える術(ヒント)を修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむことを目指す。

①授業を分析していく中で、単元の目標と授業の内容との関係を明らかにできる。

②児童生徒の実態と授業との関係から授業を評価することができる。

③学習内容を分析し、適切な指導法を選択し、学習指導案を作成し、その作成した指導案に基づく実践を評価し、授業を改善する適切な方策を提案することができる。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

学卒院生：授業分析の基礎を得るとともに、省察と実践と関連づけるために必要な授業計画、授業評価に必要なものの見方や考え方、必要な技能を修得する。

現職院生：自らの経験を通して、実際の授業計画、授業評価に対して省察と実践と関連づけ、次時に生かす術を修得するとともに授業計画、授業評価に必要なものの見方や考え方、必要な技能を修得する。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 35%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 35%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 30%

■ 履修条件

特にない

■ 授業計画

第1回：授業分析・授業研究の実際の交流：受講者の実際を発表することを通して本講義の目的、内容、方法を明示する

第2回：授業研究とは：授業研究について講述する

第3回：授業分析の視点（1）指導案からの読み取り：指導案から授業分析する演習を行う

第4回：授業分析の視点（2）授業実践からの見取り：実際の授業から授業分析する演習を行う

第5回：授業分析の視点（3）授業反省会からの見取り：授業後の反省会から授業分析する演習を行う

第6回：授業設計演習（1）学校種・教科・単元の決定：授業設計演習として想定する学校種・教科・単元を各人が決定する作業を行う

第7回：授業設計演習（2）学習目標と内容の分析：授業設計演習として想定した単元での学習目標と内容を分析する作業を各人が行う

第8回：授業設計演習（3）学習者の実態の分析・指導法の選択：授業設計演習として想定した単元での学習者の実態の分析をどのように行い、どのような指導法を選択するのかの作業を各人が行う

第9回：授業設計演習（4）指導案の作成：指導案の形で演習（1）～（3）での活動を整理する

第10回：授業設計演習（5）指導案の練り直し：作成した指導案を交流し、練り直す

第11回：授業設計演習（6）模擬授業：グループ毎に実際に授業してみる

第12回：授業設計演習（7）授業の改善：授業した結果から、授業改善を試みる

第13回：授業設計演習（8）模擬授業：改善した授業を実践する

第14回：求められる授業分析とリフレクションについて：授業分析と振り返りの在り方にについて意見交換する

第15回：授業のまとめ：授業全体を総括し、受講者各人の成果や課題を把握する

(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

授業実践に関する先行研究

■ 事後学習

授業分析・リフレクションの理論と実践に関する論文など

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

サイニー等で検索することによって、多様な授業分析やリフレクションの論文等があります。

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

受講人数や受講生の経験などにより、臨機応変に対応する

■ オフィスアワー

火曜日5時間目研究室

■ メールアドレス

多和田美: tawadami@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号					
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等		
2019	後学期	水1	教育学研究科高度教職実践専攻		
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]		■ 単位数		
K51102002	言語活動と協同学習		2		
■ 担当教員[ローマ字表記]					
道田 泰司, 比嘉 俊					

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

①言語活動ならびに協同学習について、その意味や想定される効果について知る。

②沖縄県の実態ならびに先進校の工夫から、言語活動や協同の現状と課題、あるべき姿について考えることができる。

③適切な言語活動ならびに協同学習を通して思考・判断・表現力や学習意欲、多様な人間関係を結んでいく力を育成する授業を構想できる。

フィールドワークによって得られる事例を通して学校における言語活動・協同学習の現状と課題、あるべき姿について理論的視点で考え、それを数度のワークショップや授業設計演習によって具体化することにより、理論と実践が融合された視点を持つ実践者へと成長するきっかけをつかむことを目指す。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

◆学卒院生：学校における言語活動・協同学習の現状と課題、あるべき姿について、教育実習での経験や児童生徒として受けてきた教育を見つめることを通して基礎的知識を得るとともに、実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

◆現職院生：学校における言語活動・協同学習の現状と課題、あるべき姿について、自らの経験の省察を通して理解を深めるとともに、児童生徒の状況に合わせた実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

■ 評価基準と評価方法

毎回の授業において質問や意見を表明するなど、積極的に参加しているか、および、授業設計演習において、それまでの学びがいかされた授業が設計されているかによって評価する。

■ 履修条件

教職大学院以外に所属している人は、事前にご相談ください。

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：言語活動とは①—政策文書検討
- 第3回：言語活動とは②—実践事例を通して
- 第4回：政策文書検討と今後の学習計画
- 第5回：実践報告と検討①—中学校の事例
- 第6回：実践報告と検討②—小学校算数の事例
- 第7回：実践報告と検討③—小学校国語の事例
- 第8回：実践報告と検討④—段階的指導について
- 第9回：振り返り／授業づくり一学卒院生の事例
- 第10回：授業づくり一小学校国語を例に
- 第11回：附属学校授業見学
- 第12回：授業づくり／実習に向けて
- 第13回：指導案検討1（単元計画中心）
- 第14回：指導案検討2（本時案中心）
- 第15回：全体の振り返り

■ 事前学習

自らの、またこれまでの勤務校、沖縄県での言語活動、協同学習の実態を振り返っておく

■ 事後学習

授業時に適宜指示します。

■ 教科書にかかる情報

■ 教科書全体備考

 参考書にかかる情報

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

 メールアドレス

道田 : michita@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	火2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51103002	理数系授業づくりの理論と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
杉尾 幸司 [sugio kouji], 多和田 実			

■ 授業の形態

講義、実習

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する

■ 授業内容と方法

理科・数学（算数）は科学技術創造立国の中盤として特に重要であるが、国際学力調査等によれば、日本の子どもたちは、学年が上がるにつれ理数系科目への興味を失い、生活や将来の職業とも結び付きにくくなっているのが現状である。そのため、学校現場においては、子どもたちの理科・数学（算数）への興味関心を高める学習指導の改善・充実が求められている。本授業では、理科・数学（算数）の事例研究や模擬授業の実施を通して指導法の工夫や改善について学び、理科・数学（算数）における指導力の向上を図る。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

自らの教育実践の改善に必要な指導法の工夫や改善について、個々の理論を学ぶと共に、模擬授業を通して実践へと昇華させる。さらに模擬授業の評価・分析を通して理論と実践を往復しつつ、より高度な授業実践能力を育成する。また、指導法の工夫や改善を試みる取り組みを通して、将来的に理論と実践を融合した実践者へと成長する素地を育む。

国際学力調査、全国学力・学習状況調査等から明らかになった理科・数学（算数）における課題等に対応できる実践的な教科指導力を身に付ける。

学卒院生：事例研究等を通して、理科・数学（算数）における課題についての知識を得ると共にそれらを解決するための指導法の工夫や改善について学び、実践的な教科指導力を修得する。
現職院生：自らの経験や事例研究等を通して、理科・数学（算数）において自らが問題としている課題についての指導法の工夫や改善について学び、より実践的な教科指導力を修得する。

■ 評価基準と評価方法

理科・数学(算数)の事例研究や模擬授業の実施を通して指導法の工夫や改善について学び、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができ、子どもたちの理科・数学(算数)への興味関心を高める学習指導の改善・充実を図る事ができる実践的な教科指導力を身に付けていることが確認できる場合に単位を付与する。授業への取り組み状況(20%)、各種提出物の内容ならびに提出状況(40%)、自己省察結果(課題の把握と対応等)(40%)を総合的に評価する。

■ 履修条件

■ 授業計画

授業計画：全授業を担当教員2名が共同で担当する

第1回：国際学力調査等からみた理科、数学（算数）の現状

第2回：全国学力・学習状況調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実方法

第3回：魅力ある数学（算数）の授業づくり

第4回：数学（算数）事例研究①（基礎基本の定着）

第5回：数学（算数）事例研究②（思考力の育成）

第6回：数学（算数）事例研究③（表現力の育成）

第7回：数学(算数)の模擬授業（発表・討論：基礎基本の定着）

第8回：数学(算数)の模擬授業（発表・討論：思考力・表現力の育成）

第9回：魅力ある理科の授業づくり

第10回：理科事例研究①（基礎基本の定着）

第11回：理科事例研究②（探究活動の活用）

第12回：理科事例研究③（話し合い活動の工夫）

第13回：理科の模擬授業①（発表・討論：基礎基本の定着）

第14回：理科の模擬授業②（発表・討論：探究・話し合い活動の活用と工夫）

第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

非現職院生：各講義のテーマに関連する事例について、教育課程上の位置づけや内容について事前に確認する。

現職院生：各講義のテーマに関連する事例について、自らの実践上の経験を整理しながら、教育課程上の位置づけや役割について事前に確認する。

■ 事後学習

非現職院生：各講義において学習した内容についてまとめ、関連する文献、書籍等でさらに理解を深める。

現職院生：各講義において学習した内容について自らの実践上の経験を踏まえてまとめ、関連する文献、書籍等でさらに理解を深める。

■■ 教科書にかかわる情報

教科書	書名	小・中・高の算数・数学学習指導要領			ISBN		備考	
	著者名							
	出版社		出版年		NCID			
教科書	書名	小・中・高の理科学習指導要領			ISBN		備考	
	著者名							
	出版社		出版年		NCID			

■■ 教科書全体備考

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

月～金：12:00～12:40

■■ メールアドレス

杉尾幸司: sugio@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	月4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51104002	授業づくりの理論と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
藏浦 逸司, 白尾 裕志, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 多和田 実			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験、実習

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

自らの教育実践の改善に必要な指導法の工夫や改善について、個々の理論を学ぶと共に、模擬授業を通して実践へと昇華させる。さらに模擬授業の評価・分析を通して理論と実践を往復しつつ、より高度な授業実践能力を育成する。また、指導法の工夫や改善を試みる取り組みを通して、将来的に理論と実践を融合した実践者へと成長する素地を育む。

① 授業力の向上に必要な指導技術等について理解する。

② 理論と実践の融合をはかり、児童生徒の活用力を高める実践的指導力を養成する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

【到達目標】

学卒院生：事例研究等を通して、効果的な授業づくりにおける課題についての知識を得ると共にそれらを解決するための指導法等の工夫や改善について学び、実践的な教科指導力を修得する。
現職院生：自らの経験や事例研究等を通して、効果的な授業づくりに関して自らが問題としている課題についての指導法等の工夫や改善について学び、より実践的な教科指導力を修得する。

■ 評価基準と評価方法

授業づくりの事例研究や模擬授業の実施を通して授業力の向上に必要な指導技術等について理解するとともに、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができ、子どもたちの授業への興味関心を高め、活用力を高める実践的指導力を身に付けていることが確認できる場合に単位を付与する。授業への取り組み状況(20%)、各種提出物の内容ならびに提出状況(40%)、自己省察結果(課題の把握と対応等)(40%)を総合的に評価する。

■ 履修条件

■ 授業計画

授業計画：全授業を担当教員4名が共同で担当する

第1回：授業づくりのポイント

第2回：学習内容に関する実態把握

第3回：学習意欲を高める教材・教具の工夫

第4回：学習意欲を高める指導方法・学習形態の工夫

第5回：子どもの主体的な活動を促す課題提示

第6回：学習状況の適切な評価について

第7回：学習意欲を高める工夫（事例研究）

第8回：言語活動の工夫（事例研究）

第9回：思考と表現を促す工夫（事例研究）

第10回：効果的な課題設定と評価（事例研究）

第11回：模擬授業①（発表・討論：学習意欲を高める工夫）

第12回：模擬授業②（発表・討論：言語活動の工夫）

第13回：模擬授業③（発表・討論：思考と表現を促す工夫）

第14回：模擬授業④（発表・討論：効果的な課題設定と評価）

第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

授業時に提示する。

■ 事後学習

授業時に提示する。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

授業時に提示する。

■ メールアドレス

藏満逸司 itsushi@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

科目番号			
開講年度	開講学期	曜日時限	開講学部等
2019	後学期	金3	教育学研究科高度教職実践専攻
講義コード	科目名[英文名]		単位数
K51105002	学習指導のための教材・教具の開発と活用	2	
担当教員[ローマ字表記]			
藏浦 逸司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 多和田 実			

授業の形態

講義、演習又は実験、実習、TA有り

アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

授業内容と方法

学習意欲を高め、効果的な授業を行うために必要な、教材・教具の開発や活用法の工夫について理解し、身近な素材や地域の特性を活かした教材開発の力量を高め、ICT機器の活用技能等を身につける。

自らの教育実践の改善に必要な教材・教具の開発と活用について、個々の理論を学ぶと共に、開発・活用内容の発表や討論等を通して実践へと昇華させる。さらに発表や討論等の評価・分析を通して理論と実践を往復しつつ、より高度な教材開発・活用能力を育成する。また、教材開発や活用能力の向上を試みる取り組みを通して、将来的に理論と実践を融合した実践者へと成長する素地を育む。

URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

達成目標

学卒院生：事例研究等を通して、効果的な教材・教具の開発と活用についての知識を得ると共に、教材開発や活用に関する工夫等を行い、実践的な教材開発・活用能力を育成する。
現職院生：自らの経験や事例研究等を通して、効果的な教材・教具の開発と活用についての問題点を明らかにすると共に、自らが問題としている教材開発や活用に関する課題について工夫等を行い、より実践的な教材開発・活用能力を育成する。

評価基準と評価方法

学習意欲を高め、効果的な授業を行うために必要な、教材・教具の開発や活用法の工夫について、具体的な事例に即して、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができ、教材・教具の開発や活用について教育現場に即した実践的指導力が認められる場合に単位を付与する。授業への取り組み状況（20%）、各種提出物の内容ならびに提出状況（40%）、自己省察結果（課題の把握と対応等）（40%）を総合的に評価する。

履修条件

なし

授業計画

授業計画：全授業を担当教員3名が共同で担当する

第1回：教材・教具と活用事例

第2回：教材・教具の開発のポイント

第3回：身近な素材を活かした教材開発①（事例研究：パズル・ゲーム等の活用）

第4回：身近な素材を活かした教材開発②（発表・討論）

第5回：地域の特性を活かした教材開発①（事例研究：沖縄の自然環境の活用）

第6回：地域の特性を活かした教材開発②（発表・討論）

第7回：教育現場で活用されているICT機器

第8回：普通教室での現実的で効果的なICT活用（演習：基本的な使用方法）

第9回：ICTを活用した教材開発①（教材作成：デジタルカメラ等の活用）

第10回：ICTを活用した教材開発②（教材作成：電子黒板等の活用）

第11回：ICTを活用した教材開発③（教材作成：PC・タブレット等の活用）

第12回：ICTを活用した教材開発④（授業場面による発表・討論：電子黒板等の活用）

第13回：ICTを活用した教材開発⑤（授業場面による発表・討論：PC・タブレット等の活用）

第14回：学習指導の効果を高めるICT教材（討論）

第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

事前学習

事前課題を課すことがあります。講義中に説明します。

ウェブクラスを常時使用します。講義中に説明します。

事後学習

事後課題を課すことがあります。講義中に説明します。

ウェブクラスを常時使用します。講義中に説明します。

教科書にかかる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかる情報

参考書	書名	おいしい!授業		ISBN	978-4-89428-752-5	備考	購入の必要はありません。
	著者名	家本芳郎 監修, 蔵満逸司著					
出版社	フォーラム・A	出版年	2013	NCID			

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

水曜日、16時～17時、研究室
随時対応するのでメールでご相談ください

 メールアドレス

藏満逸司 itsushi@edu.u-ryukyu.ac.jp
杉尾幸司 sugio@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	木3	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51106002	活用力としての教科外活動	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
白尾 裕志, 村末 勇介, 杉尾 幸司 [sugio kouji]			

■ 授業の形態

■ アクティブラーニング

■ 授業内容と方法

活用力を使った教科外活動の有効性について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむ。

- ① 活用力を使った教科外活動の有効性を理解する。
- ② 活用力を使った教科外活動の実践的指導力を養成する。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

学卒院生：活用力を使った教科外活動の有効性についての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から活用力を使った教科外活動のあり方について考察し、必要な技能及び実践力を修得する。

現職院生：活用力を使った教科外活動の有効性についての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から活用力を使った教科外活動のあり方について考察し、必要な技能及び実践力を修得する。

■ 評価基準と評価方法

活用力育成における教科外活動の意義の理解を内容の具体的な事例に即して、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができる。分析・検討・省察の内容と学生自身の見解が、活用力育成における教科外活動の意義の理解を十分に反映したものになっていることが確認できる場合に単位を付与する。

■ 履修条件

特になし。

■ 授業計画

授業計画：全授業を担当教員 3 名が共同で担当する

- 第1回：現役（採用希望）校を例にした各学校における教科外活動の分析（実態確認）
- 第2回：上記の教科外活動における課題の分析（実態の背景についての検討）
- 第3回：教科外活動の意義についての考察（学習指導要領の目標の相互関係）
- 第4回：先行実践事例研究における教科外活動の検証①（道徳）
- 第5回：先行実践事例研究における教科外活動の検証②（学級活動）
- 第6回：先行実践事例研究における教科外活動の検証③（外国語活動）
- 第7回：先行実践事例研究における教科外活動の検証④（総合的な学習の時間）
- 第8回：先行実践事例研究における教科外活動の検証⑤（児童会活動）
- 第9回：先行実践事例研究における教科外活動の検証⑥（クラブ活動）
- 第10回：先行実践事例研究における教科外活動の検証⑦（学校行事）
- 第11回：模擬的な教科外活動計画の検討①（道徳を中心）
- 第12回：模擬的な教科外活動計画の検討②（学級活動を中心）
- 第13回：模擬的な教科外活動計画の検討③（総合的な学習の時間を中心に）
- 第14回：模擬的な教科外活動計画の検討④（特別活動を中心に）
- 第15回：授業のまとめ
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

非現職院生：各講義のテーマに沿って教科外活動についての教育課程上の位置づけや役割について事前に確認する。

現職院生：各講義のテーマに沿って、自らの実践上の経験整理及び教科外活動についての教育課程上の位置づけや役割について事前に確認する。

■ 事後学習

非現職院生：学修後に事前に確認した教科外活動についての教育課程上の位置づけや役割についての再検討や関連する文献、書籍等でさらに理解を深める。

現職院生：学修後に事前に確認した自らの実践上の課題を明らかにし、教科外活動についての教育課程上の位置づけや役割についての再検討や関連する文献、書籍等でさらに理解を深める。

■ 教科書にかかる情報

教科書	書名	小・中・高の各学習指導要領	ISBN NCID	備考	
	著者名				
	出版社				

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

- ・毎回の討議・考察の記録を院生が作成し、次時の冒頭に再確認して研究の蓄積・発展につなげたい。
- ・授業を契機として自主的に論文執筆をすすめることを常に念頭に置き、研鑽に励んでほしい。
- ・問題点が生じれば、教員にも相談してもらい共に打開の方向を探りたい。

■ オフィスアワー

月曜日9:00~16:00 – 318研究室

■ メールアドレス

shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	その他	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51107002	授業づくりと指導法の高度化	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
道田 泰司, 村末 勇介			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

課題研究などで各教科の授業実践に関する課題を設定した院生を対象に、教材内容や最適な指導法を吟味し、教材研究法と学習指導の方法を考察する。そのことを通して、学力の向上の方途を解明する。問題の焦点は、受講者が課題解決に取り組む学校種・教科・単元の教材研究の具体的方法と、それを生かした学習指導の実際を構想できるようになることにある。

受講者の課題に応じて、兼任教員69名（教科内容学教員、教科教育学教員など）の中から科目担当者を教職大学院専任教員で決定し、教職大学院専任教員と合わせて「担当教員」とする。

自らの教育実践の改善に必要な教材内容や指導法についてその背景を支える個別学問の理論を学ぶとともに模擬授業を通して実践へと昇華させる。さらに模擬授業の評価・分析を通して理論と実践を往復しつつ、過去の自分の実践よりも高度な授業実践を目指す。さらに将来的に起こり得る課題に応える術（ヒント）を修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむことをを目指す。

①受講者の経験（授業を受ける側、授業をする側）を振り返り、それを元に、児童生徒の学習に課題があると想定した単元・学習内容に関する対応法について解明する。

②自らの実践（あるいは理想とする実践像）を振り返り、特定単元・学習内容での対応法から学習指導のあり方全般を改善し、児童生徒にとって最善となる指導法を開発したり適用したりできる。

■ URGCC学習教育目標

専門性

■ 達成目標

- ・学卒院生：教科の授業実践に必要な、学習内容の背景にある個別学問や学習指導理論について専門的に学び、それを授業づくりに生かすことができる。
- ・現職院生：自らのこれまでの教科の授業実践を振り返りながら、学習内容の背景にある最新の個別学問や学習指導理論について専門的に学び、それを実際の授業へ生かすことができる。

■ 評価基準と評価方法

受講生の課題意識によって担当者が異なるため、各担当者の評価基準及び方法による。

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次生

■ 授業計画

各回の内容に応じて、適切な担当者が単独もしくは共同で担当する。

受講者の課題意識（どの学校種、教科、学年、単元、学習内容で課題達成実習で課題に迫り、課題研究で何をどのように明らかにするのか）に応じ、受講者の要望に応じる形で、その学習内容の背景にある専門性とそれをどのように目の前の児童生徒に適用していくのかという観点から最適な教育方法、教材開発（適用）について一部講義を取り入れた演習形式で行う。受講者が課題対決に迫りたい学校種・教科、学年、単元、学習内容を教職大学院の専任教員が履修登録段階以前にコンサルティングし、その教科等を担当する修士課程の教員がおのおのの専門から必要な示唆を与えるながら受講者の教材解釈力、学習指導力の高度化に資する。

以下、中学校の理科第2学年「電流」で「回路の性質」で「理科嫌い」にならないようにする授業展開を課題として設定した受講者を想定した授業計画を一例として示す。実際には各受講生の課題意識によって個別具体的な内容は異なる。

第0回（履修登録前）：課題意識の把握（課題を達成するために想定している校種・教科・学年・単元・学習内容の把握と、その課題意識の背景にある動機を教職大学院専任教員が確認し、担当教員となる兼任教員を確定する）。

第1回：授業づくりと指導法の現状の分析：受講生全員が、各人の現在の授業づくりや指導法（授業実践）の現状を紹介し、各人の課題意識を交流する（担当教員全員）

第2回：授業づくりと指導法の背景に存在する個別科学と学習内容との関係：授業づくりや指導法の高度化に必要不可欠な教材研究をする際に、学習内容とその背景に存在する個別科学との関係にどのように気づき、迫るのかを概説する（教職大学院専任教員）

第3回：個別テーマに迫る（1）：学習指導要領と「電流」単元の課題との関係（理科教育学教員）

第4回：個別テーマに迫る（2）：自然科学の知識体系と学習内容との関係（1）（物理学教員）

第5回：個別テーマに迫る（3）：自然科学の知識体系と学習内容との関係（2）（物理学教員）

第6回：個別テーマに迫る（4）：算数・数学や技術との関連（數学科・技術科教育学教員）

第7回：個別テーマに迫る（5）：実社会・実生活での必要性との関係（物理学・理科教育学教員）

第8回：授業づくり（1）：想定する具体的な課題「生徒はなぜ理解できないのか、何につまずくのか、何をどうすることで現状がどう改善されるのか」（物理学・理科教育学教員）

第9回：授業づくり（2）：課題を解決しうる単元構成を考える（物理学・理科教育学教員）

第10回：授業づくり（3）：生徒の学習評価とフォローアップのための学習支援活動を考える（物理学・理科教育学教員）

第11回：授業づくり（4）：模擬授業に向けた確認（物理学・理科教育学教員）

第12回：模擬授業と授業評価（1）：受講生が相互に模擬授業を行い、その実践を評価・分析し、授業づくりと指導法の高度化にせまる（担当教員全員）

第13回：模擬授業と授業評価（2）：受講生が相互に模擬授業を行い、その実践を評価・分析し、授業づくりと指導法の高度化にせまる（担当教員全員）

第14回：個別テーマに迫る（6）：模擬授業の振り返りを事例にした教材研究法と学習指導法の開発・適用と改善（物理学・理科教育学教員）

第15回：「授業づくりと指導法の高度化」についてのまとめ（教職大学院専任教員）

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

受講者のニーズに応じて授業時に適宜必要な資料を指示・配付する。

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

受講者のニーズに応じて授業時に適宜必要な資料を提示する。

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

担当教員

道田泰司・村末裕介（年次担当代表）

院生の希望により追加

■■ オフィスアワー

常時受け付ける（各担当及び年次担当）

■■ メールアドレス

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	木2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51201002	積極的生活指導・生徒指導	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
丹野 清彦, 村末 勇介			

■ 授業の形態

■ アクティブラーニング

■ 授業内容と方法

テーマ

◆ 楽観的な教育相談・生活指導・生徒指導について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむ。

①学級・学校運営上必要不可欠な教育相談・生活指導・生徒指導について、その積極的な実践の意義と効果について理解する。

②積極的な教育相談・生活指導・生徒指導が有効であることを理解した上で、積極的生活指導・生徒指導の構想をする

そのため、積極的な生活指導の必要性をより広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践の往還を意識した力量を身につける。

沖縄県では、毎年のようにいじめに関する重大事案の報道がされ、多くの教育関係者や保護者・地域の方が胸を痛めている。いじめや不登校の問題は発達障害を持つ子どもや貧困問題と関連し学校や家庭、あるいは地域で孤立している子どもや家庭も多く、沖縄県の抱える地域的な課題のひとつであるといえよう。しかし、いじめ・いじめられた子どもをどう分析し子ども理解を図ればよいのかなど、単に予防としての生活指導ではなく、積極的に教師が意図を持ち子どもに指導し、より良い集団、より良い人間関係づくりを目指した構想や積極的な指導についての専門的な知識と技術が必要であることを解説する。

そこで、支持的風土のある学級・学校づくりをテーマに、事例をもとに子ども理解を深め理論と実践をつなぐことを意図する。様々な活動の実践事例を中心に、実践を聞き、学卒院生は自分の小学校時代や中学・高校を思い出し、実践を構想することや現職院生は各々の実践を振り返り、ワークショップ的に、場面を設定し実際に

やってみる、レポートを書くことなどを通して自己の体験と結び付け理解することを重視する。こうして、子どもたちが置かれている状況や、学校の在り方をとらえ、

自主性を育て楽しい学校・学級にするために、どのように実践を展開するのか、構想を立てることができる。

迫り方としては、授業では以下のような工夫を行い展開していく。

1. アクティブラーニングを取り入れ、自身の体験と結びつけて話し合う時間を設定する。

2. テーマによっては、ゲストティーチャーを招聘したりビデオ視聴をしたりして、より実践的・実感的な学習ができるようにする。

3. 授業ごとにミニ感想文を書き、相互に交流して学習の成果を共有できるようにする。

4. 実践の構想を立て発表する

このような講義を通して、子どもたちの話し合い活動を中心とした特別活動の持つ意味や特性などを明らかにしたい。なお、現代的な課題であるいじめや不登校、発達障がいの子どもたちも取り上げ、学校が抱える課題を理解できるようにする。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

◆ 到達目標
学卒院生：積極的な教育相談・生活指導・生徒指導についての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から積極的な教育相談・生活指導・生徒指導のあり方について考察し、必要な技能及び実践力を修得する。

現職院生：積極的な教育相談・生活指導・生徒指導についての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から積極的な教育相談・生活指導・生徒指導のあり方について考察し、必要な技能及び実践力を修得する。

そこで、具体的には次のことを達成する。

1) 生活指導・生徒指導の歴史や時代の流れに伴う子どもや社会の変化を理解し、特質や持つ意味、教科との関連を理解する。【専門性】

2) そのため生活指導や生徒指導の意味やにがだいじなのか、きゅとして必要な力量について論理的に述べることができる。【地域性、国際性】

3) 問題を起こす子や気になる子には、成育歴や家庭環境に課題を抱えている場合が多く、彼らの問題行動を否定の中の肯定として読み替える力やどのような支援や指導が必要なのか対策を考え、積極的な指導とはどう展開することなのか、主体的に考えることができる。【自律性】【社会性】【コミュニケーションスキル】

4) 子どもの権利条約や人権的な観点からいじめや命の尊さを見直し、個と集団の指導の基礎を身につけることができる。【専門性】

5) 生活の中で人と人の関わりのつくり方を整理し、考察し授業や授業以外の時間、あるいは学校行事や学級イベント、地域との連携を視野に入れた自主的な活動を具体的に年間計画に位置付けることができる。【問題解決の能力】【専門性】

6) 各々の学校の実情にあった積極的な生活指導・生徒指導を具現化し学校・学級集団が協力、連帯して共に生きていく児童会・生徒会活動や集団をつくるには、どのような活動や教師の指導、工夫、配慮が必要なのだろうか。年間計画とともに発表することができる。【問題解決能力】

などを目標としている。

■ 評価基準と評価方法

◆ 学生に対する評価

積極的な教育相談・生活指導・生徒指導の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができる。分析・検討・省察の内容と学生自身の見解が、積極的な教育相談・生活指導・生徒指導の概要を十分に反映したものになっていることが確認できる場合に単位を付与する。

①毎時間、ミニレポートを提出する(50%)

②講義のまとめレポート(50%)

講義の中での積極的な姿勢や学んだことを生かし計画を立てることができているか、などに注目する。

■ 履修条件

■ 授業計画

授業計画：授業を担当教員 2 名が共同で担当する
第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における学級経営の実践と課題の分析（実態確認）
第2回：上記の学級経営の実践と課題の分析（消極的生活指導・生徒指導の原因追究）
第3回：上記の学級経営の実践と課題の分析（積極的生活指導・生徒指導への転換方略）
第4回：積極的生活指導・生徒指導の理論検討（「生徒指導提要」等の資料の概要把握）
第5回：積極的生活指導・生徒指導の理論検討（生活指導・生徒指導における個人と集団の関連についての検討）
第6回：積極的生活指導・生徒指導の理論分析（経験知との比較を前提にした分析と実践可能性の検討）
第7回：個別事例に基づく積極的生活指導・生徒指導の展開についての検討（「児童生徒の発達課題（特別支援）」）
第8回：個別事例に基づく積極的生活指導・生徒指導の展開についての検討（「喫煙・飲酒・薬物乱用への対応」）
第9回：個別事例に基づく積極的生活指導・生徒指導の展開についての検討（「問題行動（非行・暴力）」）
第10回：個別事例に基づく積極的生活指導・生徒指導の展開についての検討（「インターネット・携帯電話」）
第11回：個別事例に基づく積極的生活指導・生徒指導の展開についての検討（「性と命に関する課題」）
第12回：個別事例に基づく積極的生活指導・生徒指導の展開についての検討（「いじめ問題」）
第13回：積極的生活指導・生徒指導の年度初めを想定した模擬的な構想の検討①
第14回：積極的生活指導・生徒指導の年度初めを想定した模擬的な構想の検討②
第15回：授業のまとめ
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

●これまでに出会った子どもたちや学級集団との関わり方を整理する。
整理する視点は、
1 学級経営上の問題とその原因・背景
2 特定の子どもの実態や成育歴つの分析
3 ひとつの集団をつくる自前の工夫、論理的な説明
4 生活指導、生徒指導の実際を書き、検討する
などである

■ 事後学習

●実践レポートを書き、自己の実践を振り返えるとき、次の視点で考える
1 ではどうすればよかったです
2 いくつかのポイントをつなげていくと、どういう段階的な指導が適切か
3 これまでの子どもの見方、とらえ方と、討論後の自分の見方とらえ方を比較し変化を述べる
などである。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかわる情報

■ 参考書全体備考

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

■ メールアドレス

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	月3	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51202002	いじめ問題への対応と課題	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
丹野 清彦, 村末 勇介, 上間 陽子			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

【テーマ】

いじめ問題について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践力を身につける。沖縄県では、毎年のようにいじめに関する重大事案の報道がされ、多くの教育関係者や保護者・地域の方が胸を痛めている。いじめや不登校の問題は発達障害を持つ子どもや貧困問題と関連し学級や学校、あるいは地域で孤立している子どもや家庭も多く、沖縄県の抱える地域的な課題のひとつであるといえよう。

しかし、いじめ・いじめられる子どもをどう分析し子ども理解を図ればよいのか、個と集団のいじめの構図のとらえ方や積極的な指導についての専門的な研修は乏しく、各自が孤軍奮闘し自分なりの実践を展開している。

そこで、

①いじめ問題について、その実態把握・背景理解・解決過程をこれまでのいじめ事件を分析し理解する。

②いじめ問題についてその現象の背景を沖縄県内や他県から外部講師を招き可能な範囲でお話ししていただくことを通して理解した上で、これを防止・解決する実践的指導力を養成する。

③また、万一本心があると訴えられた場合の対応法について実践をもとに明らかにする

ことを目的に、沖縄県内の教育現場が抱える課題を理解し、解決できる実践力のあるリーダーを育てるを目指す。

その目的達成のために、具体的には以下のことを予定している。

①各地域におけるいじめ問題を理解する上で、過去に起こったいじめ問題を報道や本などで各自が調べ、グループやペアになってその経過や事実を分析し、報告し議論する。

②中でも沖縄県内で起きたいじめ問題について外部講師を招き可能な限り報告してもらい、対応や学校現場の実情について議論する。

③沖縄県内に限らず他県では、日常的にいじめ問題への対策をたて、実践しているのか、外部講師を招き実践報告をしてもらい、沖縄県に置いてはどのような点が取り入れる必要があるのか。あるいはどのように応用し対策をたて、学級や学年、学校で取り組むのか、方針をグループごとに提案として作成する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 成果目標

1 いじめを起こす子やいじめられそうな子、それを見てみぬふりをする子ども同士の関係性やいじめの社会構造を読み取り、「チーム学校」としての予防や早期発見に向けた対策や支援を目指し、子どもたちの抱えている課題を把握し、実践するための意義を理解できる。【社会性】【コミュニケーションスキル】【情報リテラシー】、

2 いじめられる子には発達障害の子どもや家庭環境に課題のある子が多く、彼らの発達支援に向け、どのようにまわりの理解をつくりだすのか、基礎的な方法を理解できる【専門性】

3 いじめを起こす子や気になる子には、成育歴や家庭環境に課題を抱えている場合が多く、彼らの問題行動を否定の中の肯定として読み替える力やどのような支援や指導が必要なのか対策を考え、いじめのメカニズムや基礎的な知識を理解できる。【自律性】【社会性】【コミュニケーションスキル】

4 子どもの権利条約や人権的な視点からいじめや教師の発言を見直し、個と集団の指導の基礎を身につけることができる。【専門性】

5 学級や学校での生活の中でいじめのない関わりのつくり方を整理し、考察し授業や授業以外の時間、あるいは学校行事や学級イベントなどの自主的な活動を年間計画に位置付け、自治的な活動を作りだすことを意図する基礎的な実践力を身につけることができる。【問題解決の能力】【専門性】

■ 評価基準と評価方法

いじめ問題の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、いじめいじめられる関係性やいじめの構図、成育歴や家庭環境との関連等をもとにいじめのメカニズムを分析・検討・省察して大学院生からの見解として表現することができる。また、それをもとにいじめを防ぐためにはどのような活動や指導の重点が必要か、年間計画を作成し対応プログラムを作成することができる。分析・検討・省察の内容と大学院生自身の見解が、いじめ問題の概要を十分に反映したものになっていることが確認でき、それに対応する年間計画が作成されている場合に単位を付与する。具体的には、毎回される事例のレポート課題と具体的ないじめ事件の報告、最終のプログラム作成を評価の対象とする。

■ 履修条件

特になし。

■ 授業計画

授業計画：全授業を担当教員2名（丹野、村末）が分担・共同で担当する

第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校におけるいじめ問題の実態（実態確認・丹野）

第2回：上記のいじめ問題における課題の分析・いじめ時代に生きる君たちへ（実態把握の方法やいじめの進み方・丹野）

第3回：上記のいじめ問題における課題の分析（いじめの定義と構図、カッターナイフ事件・丹野）

第4回：上記のいじめ問題における課題の分析（厳罰化と家族の責任・丹野）

第5回：上記のいじめ問題における課題の分析（解決についての考察：学級、学校及び家庭や地域との連携、現状と対応・丹野）

第6回：上記のいじめ問題における課題の分析（解決についての考察：学級、学校及び家庭や地域との連携、いじめの危機と生活背景・丹野）

第7回：先行実践事例研究（沖縄県を中心とした具体的ないじめ問題の検証①（問題点の把握・村末）

第8回：先行実践事例研究（沖縄県を中心とした具体的ないじめ問題の検証②（関係機関との連携、解決策のポイント・丹野）

第9回：先行実践事例研究（沖縄県を中心とした具体的ないじめ問題の検証③（未然防止への対応・村末）

第10回：いじめの未然防止につながる積極的生徒指導の展開についての検討・発表①（学級、学校経営・村末）

第11回：いじめの未然防止につながる積極的生徒指導の展開についての検討・発表②（個別対応・村末）

第12回：模擬的ないじめ問題に対する解決方策 対策プログラムの作成と検討①（いじめの3段階・村末）

第13回：模擬的ないじめ問題に対する解決方策 対策プログラムの作成と検討②（いじめのメカニズム・村末）

第14回：模擬的ないじめ問題に対する解決方策 対策プログラムの発表と討論③（村末）

第15回：授業のまとめ（丹野）

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

次に指定する文献をあらかじめ購読すること。
いじめのある世界に生きる君たちへ（中井久夫著 中央公論社）
いじめの構造（内藤朝雄 講談社現代新書）
子どもの願い（丹野清彦 高文研）

■ 事後学習

いじめのある世界に生きる君たちへ（中井久夫著 中央公論社）
いじめの構造（内藤朝雄 講談社現代新書）
子どもの願い（丹野清彦 高文研）
などを読み自分の見解を各自の実践や経験と照らして具体的にまとめてくる。

■ 教科書にかかる情報

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかる情報

参考書	書名	いじめの構造			ISBN NCID	備考				
	著者名	内藤朝雄								
	出版社	講談社現代新書	出版年	2009						
参考書	書名	いじめのある世界に生きる君たちへ			ISBN NCID	備考				
	著者名	中井久夫著								
	出版社	中央公論社	出版年	2016						
参考書	書名	子どもの願い いじめ vs 12の哲学			ISBN NCID	備考				
	著者名	丹野清彦								
	出版社	高文研	出版年	2018						

■ 参考書全体備考

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

丹野（209研究室） 水曜日 2限から3限

■ メールアドレス

丹野 (momocafe@edu.u-ryukyu.ac.jp)

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	水2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51203002	こども支援のための地域・保護者との協力関係づくり	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
村末 勇介, 丹野 清彦, 城間 園子			

■ 授業の形態

講義

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

【テーマ】

こども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについて、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について習得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむ。学校教育は学校での児童生徒理解に基づく生徒指導を基盤として成立っている。この授業では児童生徒を学校外で支える地域や保護者との協力関係づくりについて検討しながら、生徒指導上の課題解決に有効に活用していくための実践的な指導力を養う。その中で、具体的な地域や保護者との協力づくりについて、これまでの各自の取り組みを振り返り、意味付け、方法と成果及びその意義を確認していく。

1. こども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについて、その意義と方法を理解する。
2. 地域・保護者との協力関係を積極的に取り組む、生徒指導に有効に活用していく実践的資質・能力を養成する。

子ども支援の問題について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。講義を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践力を身につける。沖縄県では、毎年のように貧困問題に関わり子ども支援の必要性が報道がされ、多くの教育関係者や保護者・地域の方が胸を痛めている。発達障がいを持つ保護者や子ども、貧困問題の連鎖により地域で孤立している子どもや家庭も多く、沖縄県の抱える地域的な課題のひとつであるといえよう。

しかし、どのような支援が学校として求められているのか。地域として取り組む必要があるのか。さらに関係機関とどう連携すればよいのか、などについての研修は少なく、各自が孤軍奮闘し自分なりの実践を展開している。

そこで、

- ①子ども支援の問題について、その実態把握・背景理解・解決過程をこれまでの事例を分析し理解する。
- ②支援のあり方について、背景を沖縄県内や狩野であれば、他地域から外部講師を招き可能な範囲でお話ししていただくことを通じて理解した上で、これを防止・解決する実践的指導力を養成する。
- ③また、支援の必要があると思われる場合の対応法について実践をもとに明らかにすることを目的に、沖縄県内の教育現場が抱える課題を理解し、解決できる実践力のあるリーダーを育てることを目指す。

その目的達成のために、具体的には以下のことを予定している。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

◆授業の到達目標

次の2つの目標を立てている。

非現職院生：こども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的なこども支援のための地域・保護者との協力関係づくりのあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得できる。

現職院生：こども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地からこども支援のための地域・保護者との協力関係づくりのあり方について考察し、これらを踏まえた実践力を修得できる。

具体的な達成目標として、

- 1) 子ども支援の重要性について理解する。【専門性】
- 2) そのため、どのような支援体制を構築するすればよいのか、学校体制について関心を持つ。】【社会性】【コミュニケーションスキル】
- 3) 気になる子や気になる保護者を、困っている子、困っている親と読みかえ、共に成育歴や家庭環境に課題を抱えている場合が多く、読み替える力やどのような支援や指導が必要なのか、基礎的な問題を理解できる。【自律性】【社会性】【コミュニケーションスキル】
- 4) 子どもの権利条約や人権的な視点から、支援の必要な子どもにどのような配慮がいるのか、学校や地域、社会のあり方に目を向け、改善点を指摘できる。【専門性】
- 5) 保護者や地域と連携するために何が必要なのか、事例をもとに明らかにし、学校の実情にあった対応計画を作成することができる。【問題解決の能力】【専門性】

■ 評価基準と評価方法

こども支援のための地域・保護者との協力関係づくりの概要の理解を内容の具体的な事例に即して、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができる。分析・検討・省察の内容と学生自身の見解が、こども支援のための地域・保護者との協力関係づくりの概要を十分に反映したものになっていることが確認できる場合に単位を付与する。

■ 履修条件

特になし。

■ 授業計画

全授業を担当教員3名が共同で担当する

第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における生徒指導上の課題の分析（実態確認）

第2回：生活・生徒指導上の課題と、保護者との協力関係についての分析（沖縄の実態把握）

第3回：こども支援と地域・保護者との協力関係の重要性についての検討（これまでの実践の把握）

第4回：こども支援と地域・保護者との協力関係の事例分析（学習指導面）

第5回：子ども支援と地域、保護者との協力関係の事例分析（生徒指導面）
第6回：子ども支援と地域、保護者との協力関係の事例分析（教育課程面）
第7回：子ども支援と地域、保護者との協力関係の事例分析（PTA活動面）
第8回：生活・生徒指導上の課題をもつ子どもと保護者との協力関係についての検討（実態確認）
第9回：生活・生徒指導上の課題をもつ子どもと保護者との協力関係づくりについての検討（方法の確認）
第10回：子ども支援につながる保護者との積極的な協力関係づくりについての検討
第11回：個別事例に基づくトラブル発生後の保護者との対応についての検討①（即応的対応）
第12回：個別事例に基づくトラブル発生後の保護者との対応についての検討②（継続的対応）
第13回：模擬的なトラブル発生に対する保護者との対応についての検討①
第14回：模擬的なトラブル発生に対する保護者との対応についての検討②
第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一部を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

非現職院生：各講義のテーマの視点から、子ども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについての自己の知識を確認する。

現職院生：各講義のテーマの視点から、子ども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについての自らの実践経験を振り返り、確認する。

■ 事後学習

非現職院生：学習後に、子ども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについての自己の知識を再検討し、関連する文献、書籍等でさらに理解を深める。

現職院生：学習後に、子ども支援のための地域・保護者との協力関係づくりについての自らの実践経験を再検討し、関連する文献、書籍等でさらに理解を深める。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかわる情報

■ 参考書全体備考

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

火曜日9:00-12:00 技術教育棟206研究室

■ メールアドレス

ymurasue@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

<http://murasue.style.coocan.jp/>

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日限	■ 開講学部等
2019	後学期	金4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]		■ 単位数
K51204002	特別な支援を必要とする子どもの理解と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
藏浦 逸司, 城間 園子			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

自らの教育実践の改善に必要な「特別な支援を必要とする子どもの理解と実践」について、個々の理論を学ぶと共に、事例研究や学校及び関係機関の訪問等をもとにした発表・討論を通して実践へと昇華させる。さらに発表や討論等の評価・分析を通して理論と実践を往復しつつ、より高度な現状理解と実践的対応力を育成する。

また、個々の事例への対処を工夫する取り組みを通して、将来的に理論と実践を融合した実践者へと成長する素地を育む。

1 発達障害を含めた個別の教育的ニーズのある子どもに対する基本的な指導や対応を行う力量を身に付ける。

2 特別支援教育の理念やインクルーシブ教育システム、保護者や関係機関との連携の在り方等についての理解を深め、実践する力を高める。

3 発達障害のある子どもを含めた特別な支援が必要な子どもへの授業実践と学級経営について、理論的な学びを深め、教育実践力の向上を図る。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

非現職院生：理論的な学びや事例研究を通して、個々の問題の論理的な背景と具体的な対処法への知識を得ると共に、適切な指導及び支援方法への検討を行い、特別な支援を必要とする子どもへの授業実践力及び学級経営力を育成する。

現職院生：自らの経験及び理論的学びや事例研究を通して、個々の問題の論理的な背景と具体的な対処法への知識を得ると共に、適切な指導及び支援方法への検討を行い、特別な支援を必要とする子どもへの授業実践・学級経営力及び支援体制の構築を図ることを育成する。

■ 評価基準と評価方法

- | | |
|-----------------------------------------------------|-------|
| 1 レポート：個人の課題解決に向け、事例研究や学校訪問を通して取り組んだ内容 | 3 0 % |
| 2 受講態度：授業での質疑、協議における発言などの参加意欲、自らの課題解決に向け自己の意見を述べること | 3 0 % |
| 3 発表/表現：授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 | 2 0 % |
| 4 自己省察：受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 | 2 0 % |

■ 履修条件

子ども支援のための地域・保護者との協力関係づくり

■ 授業計画

- 第1回：沖縄県における特別支援教育の現状と課題（国及び県内の主な施策と現状等）
- 第2回：発達障害の理解と具体的な指導・支援（診断基準・障害の特性、アセスメント等）
- 第3回：支援が必要な子どもの行動分析（行動特性に応じた適切な指導及び支援等）
- 第4回：個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成演習（軽度知的障害の子ども、就学支援等）
- 第5回：生活・生徒指導上の課題と発達障害との関連性（二次障害、トラブルシューティング等）
- 第6回：校内支援体制の構築・運営及び保護者や関係機関との連携（特別支援教育地域連携協議会、自立支援連絡協議会等）
- 第7回：小学校における支援が必要な子どもへの対応（施設併設の学校訪問）
- 第8回：中学校における支援が必要な子どもへの対応（施設併設の学校訪問）
- 第9回：通級指導教室における具体的な指導・支援（小学校）
- 第10回：通級指導教室における具体的な指導・支援（中学校）
- 第11回：関係機関と連携した支援体制の構築
- 第12回：通常学級における支援が必要な子どもへの教科指導、教材・教具の工夫
- 第13回：関係機関との連携・協働の実際（福祉）
- 第14回：関係機関との連携・協働の実際（医療）
- 第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講者の学修の程度に応じて授業の一部を非現職院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

授業時に適宜指示する。

 参考書にかかわる情報

参考書	書名	小学校の授業づくり・板書・ノート指導			ISBN NCID		備考		
	著者名	蔵満逸司							
	出版社	黎明書房		出版年	2013				
参考書	書名	通常学級のユニバーサルデザインと合理的配慮			ISBN NCID		備考		
	著者名	阿部俊彦							
	出版社	金子書房		出版年	2016				
参考書	書名	ユニバーサルアクセシビリティ			ISBN NCID		備考		
	著者名	小貴悟							
	出版社	東洋館出版社		出版年	2015				
参考書	書名	こどもの発達が気になるときに読む心理検査入門			ISBN NCID		備考		
	著者名	安住ゆう子							
	出版社	合同出版		出版年	2014				
参考書	書名	応用行動分析学から学ぶ子ども観察力&支援力養成ガイド			ISBN NCID		備考		
	著者名	平澤典子							
	出版社	Gakken		出版年	2010				

 参考書全体備考

文部科学省特別支援教育関係の施策等

その他授業時に適宜指示する

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

城間：月、火、水、金 9時～10時 教育学部本館等 210号室

 メールアドレス

城間：sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	火1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51205002	新時代こども支援活動	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
丹野 清彦, 城間 園子			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

こども支援活動について、現代社会の新たな課題を踏まえたより広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむ。

1. 沖縄県の教育についての実態と課題を知り、これまでの生徒指導について理解する。
2. 沖縄県の教育課題の理解に立った、新たな生徒指導の方向性や教育課題に対する実践的資質・能力を育成する。

この中で、具体的な新時代の子ども支援活動について、時代背景をもとに振り返り、意味付け、方法と成果及びその意義を確認していく。

1. 新時代とは何を指すのか、その背景を理解する。
2. 沖縄にあってはどのような子ども支援があるのかを解説する
3. そのうえで、沖縄にあった新しい時代の地域、保護者との協力関係を積極的に取り上げ、生徒指導に有効に活用していく実践的資質・能力を養成する。

新時代子ども支援の問題について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。講義を通して沖縄県の実情に迫り、理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践力を身につける。

また、沖縄県では毎年のように貧困問題に関わり子ども支援の必要性が報道がされ、多くの教育関係者や保護者・地域の方が胸を痛めている。その一方で、様々な子ども支援活動が生まれている。しかし、どのような支援活動が、沖縄県にあるのか実態等についてはあまり知られていない。ここでは、どういう意図で行われているのか、どのような支援活動があるのかを明らかにし、学校や地域、公的機関が、あるいは個人的な取り組み等を含めて連携し、子どもを支援したらよいのか、などについて明らかにすることを目的に、沖縄県内の教育現場が抱える課題を理解し、解決できる実践力のあるリーダーを育てることを目指す。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

非現職院生：子どもの支援活動について自らの見識の上に省察を加え、現代社会の新たな課題を踏まえたより広い視野と実践的なこどもの支援の在り方について考察し、必要な実践力を修得する。
現職院生：子ども支援活動についての自らの経験と見識の上に省察を加え、現代社会の新たな課題を踏まえたより広い視野と実践的な見地からこども支援活動の在り方について考察し、必要な実践力を修得する。

■ 評価基準と評価方法

- | | |
|-----------------------------------------------------|-------|
| 1 レポート：個人もしくはグループで取り組んだ事例研究や課題の内容 | 3 0 % |
| 2 受講態度：授業での質疑、協議における発言などの参加意欲、自らの課題解決に向け自己の意見を述べること | 3 0 % |
| 3 発表/表現：授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 | 2 0 % |
| 4 自己省察：受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 | 2 0 % |

■ 履修条件

いいじめ問題への対応と課題

■ 授業計画

- 第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における生徒指導上の課題の分析（実態確認）
- 第2回：沖縄県の学校での生活指導・生徒指導実践と指導上の諸問題とその背景についての分析①（学校）
- 第3回：沖縄県の学校での生活指導・生徒指導実践と指導上の諸問題とその背景についての分析②（地域社会）
- 第4回：沖縄県の学校での生活指導・生徒指導実践と指導上の諸問題とその背景についての分析③（歴史的背景）
- 第5回：沖縄県の学校での生活指導・生徒指導実践と指導上の諸問題とその背景についてのまとめ
- 第6回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導①（保護者との連携）
- 第7回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導②（地域との連携）
- 第8回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導③（関係機関との連携）
- 第9回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導④（行政機関との連携）
- 第10回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導のまとめ
- 第11回：模擬的な生活指導・生徒指導上の課題に対する指導方法についての検討①（いいじめ問題）
- 第12回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導②（不登校）
- 第13回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導③（学校不適応）
- 第14回：学校での積極的生活指導・生徒指導と保護者・地域との協力を融合した指導④（学力問題）
- 第15回：授業のまとめ

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

 事後学習

授業時に適宜指示する。

 教科書にかかる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかる情報

参考書	書名	沖縄子ども白書			ISBN	NCID	備考			
	著者名	「沖縄子ども白書」編集員会								
	出版社	ボーダインク	出版年	2010						
参考書	書名	沖縄のこどもたち			ISBN	NCID	備考			
	著者名	加藤彰彦・横山正見								
	出版社	榕樹書林	出版年	2016						

 参考書全体備考

人権/道徳—沖縄県いじめ対応マニュアル・沖縄県いじめ防止基本方針
県立学校生徒指導の手引き

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

城間：月、火、水、金 9時～10時

 メールアドレス

sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	木4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51301002	地域と学校の在り方	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
田中 洋, 白尾 裕志, 蔵浦 逸司, 多和田 実			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

学校と地域との関係について、これまでの変遷を歴史的に学ぶとともに、現在、求められている学校と地域との連携について、中央教育審議会答申等の基本資料を読みながら理解する。また、PTAについては、これまでの経験と同時に現在の課題を検討し、その解決に努める各地の実践例を詳しく調べる。そのうえで、現職院生は現任校のPTAについて合理的反省を行い、学卒院生とともに地域を含めた有効な連携案を作成する。

学校と地域との関係について理解を深めるとともに、今日の学校に求められている地域での役割及び学校が地域に求める役割について学び、学校と地域との有機的につなぐ資質を養う。

学校と地域との関係について、それがどのように論じられてきたのか、理論的に振り返るとともに、自らの経験に照らし合わせながら、具体的な事例を検討する。それによって、学校と地域とのあるべき姿を探るために端緒をつかむことを目指す。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

- ・学卒院生：学校と地域との関係について、これまでの理論を振り返ることによってイメージをつかむとともに、具体的な事例の検討を通じて、学校と地域とのあるべき姿を模索できる資質・能力を養う。
- ・現職院生：学校と地域との関係について、自らの実践に照らし合わせながら、これまでの理論を振り返りつつ、具体的な事例の検討を通じて、今後、自らが地域との連携に積極的に取り組む姿勢を養う。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート…個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度…授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現…授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察…受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次生

■ 授業計画

全授業を担当教員 4 名が共同で担当する

第1回：イントロダクション（学校と地域の連携）

第2回：学校と地域～過去～

第3回：学校と地域～現在～

第4回：学校と地域～未来～

第5回：学校・地域の連携実践事例研究 1～学校主導型～

第6回：学校・地域の連携実践事例研究 2～地域主導型～

第7回：学校・地域の連携実践事例研究 3～対等型～

第8回：PTAを解剖する 1～過去～

第9回：PTAを解剖する 2～現在～

第10回：PTAの課題克服実践事例研究 1～運営方法～

第11回：PTAの課題克服実践事例研究 2～活動対象～

第12回：PTAの課題克服実践事例研究 3～全般～

第13回：現任校でのPTA分析報告 1

第14回：現任校でのPTA分析報告 2

第15回：家庭・地域との連携から見たあるべきPTA像の発表

(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

■ 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

授業時に適宜指示・配付する。

 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

中央教育審議会答申等の各種資料等。

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

常時受け付ける（教育学部棟325室）。

 メールアドレス

tanakah@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号					
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等		
2019	後学期	木1	教育学研究科高度教職実践専攻		
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]		■ 単位数		
K51302002	校内研究組織の実践と課題		2		
■ 担当教員[ローマ字表記]					
白尾 裕志, 小林 稔					

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

校内研究組織の在り方について検討し、より実践的で有効な校内研究組織の構築に向けた運用方法を理解する。また、模擬的な校内研究組織を想定して検討することで、教育上の課題解決に有効に活用していくための実践的な指導力を養う。

校内研究組織の実践と課題について、より広い視野と実践的な見地から学ぶ。演習を通して理論と実践の往還を図りながら、より実践的な対応について修得し、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつくる。

① 校内研究組織の実践と課題について理解する。

② 校内研究組織を積極的につくり上げ、教職員の研究意欲と実践力を高め、成果を有効に活用していく実践的資質・能力を養成する。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

非現職院生：校内研究組織の実践と課題についての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な校内研究組織 の実践のあり方について考察し、必要な実践力を修得する。

現職院生：校内研究組織の実践と課題についての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から校内研究組織の実践のあり方について考察し、必要な実践力を修得する。

■ 評価基準と評価方法

非現職院生：校内研究組織の実践と課題についての自らの見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な校内研究組織について、毎回の取組やレポート等のまとめか ら判断する。

現職院生：校内研究組織の実践と課題についての自らの経験と見識の上に省察を加え、より広い視野と実践的な見地から 校内研究組織の実践のあり方について考察し、必要な実践力を修得できたかに て判断する。

校内研究組織の実践と課題の概要の理解を内容の具体的な事例に即して、分析・検討・省察して学生自らの見解として表現することができる。分析・検討・省察の内容と学生自身の見解が、校内研究組織の実践と課題の概要を十分に反映したものになっていることが確認できる場合に単位を付与する。

■ 履修条件

特になし

■ 授業計画

授業計画：全授業を担当教員 2 名が共同で担当する

第1回：現任（採用希望）校を例にした各学校における校内研究及び組織の課題分析（実態の確認）

第2回：校内研究及び組織の課題からそれぞれの課題の要因についての分析（問題把握と目標確認）

第3回：校内研究組織別にみた課題の検討（個別研究・教科等別グループ研究・全体研究）

第4回：校内研究組織における研究主題設定方法についての検討

第5回：校内研究組織における研究主任の役割についての検討（マネージメント力・組織運営力）

第6回：校内研究の事例分析と課題・改善の検討（個別中心）

第7回：校内研究の事例分析と課題・改善の検討（グループ中心）

第8回：校内研究の事例分析と課題・改善の検討（全体研究中心）※役割分担型

第9回：校内研究組織運営に関する先行研究の検討①（個別研究中心）

第10回：校内研究組織運営に関する先行研究の検討②（グループ研究中心）

第11回：校内研究組織運営に関する先行研究の検討③（全体研究中心）※役割分担型

第12回：模擬的な校内研究組織に対する研究主任の役割についての検討①（個別研究中心）

第13回：模擬的な校内研究組織に対する研究主任の役割についての検討②（グループ研究中心）

第14回：模擬的な校内研究組織に対する研究主任の役割についての検討③（全体研究中心）

第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

内容や受講生の学修の程度に応じて授業の一節を学卒院生と現職院生、勤務（採用希望）学校種別等で分けて実施することもある。

■ 事前学習

非現職院生は、毎回のテーマに沿って、校内研究に関する文献や各学校がまとめた研究紀要等を確認しておく。

現職院生は、毎回のテーマに沿って、自らの経験をまとめておき、校内研究の課題等を明らかにしておく。また必要に応じて校内研究に関する文献や各学校がまとめた研究紀要等を確認しておく。

■■ 事後学習

非現職院生は、毎回のテーマに沿って、学修内容を確認して、関連する校内研究に関する文献や各学校がまとめた研究紀要等を確認しておく。

現職院生は、毎回のテーマに沿って、学修内容を確認して、自らの経験を捉え直すようとする。その際、必要に応じて校内研究に関する文献や各学校がまとめた研究紀要等を確認して、改善点等を見出していく。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

サイニー等で検索することによって、本授業と関連する参考となる論文などがあります。

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

授業時に適宜必要な資料を提示する。
事例については受講者が持ち寄る。

■■ オフィスアワー

白尾裕志 毎週水曜日 2限（10時20分～11時50分）

■■ メールアドレス

白尾裕志 shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	金2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51303002	組織的意思決定マネジメント	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
比嘉 俊, 道田 泰司			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

目的に達成する能力を効果的に伸ばし続けられる、学習する組織を作るためには、よりよい討議ができるようファシリテートする必要がある。そのために、事例を通して意思決定のプロセスを知り、適切な意思決定を妨げる要因やよりよい意思決定を促す方法を知るとともに、模擬的な意思決定を受講生同士でファシリテーションすることにより、よりよい意思決定ができる組織を作り出す方法を構想できる力を育成する。

①組織での意思決定のあり方について知る。

②適切な意思決定を妨げる要因を知り、よりよい意思決定を促す方法を知る。

③模擬的な意思決定場面を体験することを通して、学習し続ける組織を作り出す方法を構想できる。

事例を通して組織での意思決定の現状と課題、あるべき姿について理論的視点で考え、それを数度のワークショップによって具体化することにより、理論と実践が融合された視点を持つ実践者へと成長するきっかけをつかむことを目指す。

■ URGCC学習教育目標

自律性、問題解決力、専門性

■ 達成目標

◆学卒院生：学校における組織での意思決定の現状と課題、あるべき姿について、教育実習その他のリーダー経験を見つめることを通して基礎的知識を得るとともに、模擬的意思決定を通して実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

◆現職院生：学校における組織での意思決定の現状と課題、あるべき姿について、自らの経験の省察を通して理解を深めるとともに、模擬的意思決定を通して実践的指導方法を計画するのに必要な技能を修得する。

■ 評価基準と評価方法

毎回の授業において質問や意見を表明するなど、積極的に参加しているか、および、模擬的意思決定ワークショップにおいて、それまでの学びがいかされたファシリテーションが行われているかによって評価する。

■ 履修条件

教職大学院生以外は事前に相談してください。

■ 授業計画

第1回：うまく機能した組織・うまく機能しなかった組織の振り返り（ワークショップ）

第2回：組織的意思決定におけるリーダーシップ

第3回：意思決定のプロセス

第4回：率直な対話を妨げるもの

第5回：アイデアの衝突を促すために

第6回：対立を建設的に解決するために

第7回：決められない組織の文化

第8回：公正で妥当な決定プロセス

第9回：今求められるリーダーと学び続ける組織

第10回：模擬的意思決定ワークショップ（1）グループ別の構想・準備

第11回：模擬的意思決定ワークショップ（2）グループAのファシリテーションによる対話の場づくり～率直な対話を促すファシリテーションを中心に

第12回：模擬的意思決定ワークショップ（3）グループBのファシリテーションによる議論と解決～アイデアの衝突と対立の解決を促すファシリテーションを中心に

第13回：模擬的意思決定ワークショップ（4）グループCのファシリテーションによる意思決定～公平で妥当な決定プロセスを促すファシリテーションを中心に

第14回：模擬的意思決定ワークショップ（5）振り返りと意思決定プロセスの再構想

第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

■ 事前学習

自らの、またこれまでの勤務校ならびに沖縄県における組織マネジメントについて振り返っておく

■ 事後学習

授業時、適宜指示します

■ 教科書にかかる情報

教科書	書名	決断の本質：プロセス志向の意思決定マネジメント	ISBN	4901234943	備考	ウォートン経営戦略シリーズ
	著者名	マイケル・A.ロベルト 著,スカイライトコンサルティング株式会社 訳,				
	出版社	英治出版	出版年	2006	NCID	

■■ 教科書全体備考

教科書は生協で注文しています。

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

■■ メールアドレス

道田 : michita@edu.u-ryukyu.ac.jp
比嘉 : higa-t@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	月2	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51304002	教師の成長とメンタリング	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
吉田 安規良, 比嘉 優			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

受講者のこれまでの教職経験を振り返ることを出発点にし、初任者段階から教師としての職能開発・成長に何がどのように影響してきたのかを相互に交流する。現職院生は実際に学卒院生と教職大学院での教育課程全般で学びを共同して行く中で、経験の浅い者にどのような支援が適切なのか、どうすれば協働的人間関係・環境が構築できるのかを相互に検討・検証する。とりわけ教職員が協働・共同して沖縄県の教育課題に応える教職員集団のあるべき姿に迫る。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

- (1)受講者の経験の振り返りを元に、「教師として歩み進む」ことの意味を再確認する。
- (2)協働する職場環境、協働する人間関係の構築に必要な、自らの職能開発を支援する同僚性を先輩教師（中核的教員）としての振る舞いにを探究する。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察 受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）の学生の中で、組織運営（とりわけ協働性の構築）に関して学究したい者。

■ 授業計画

- 第1回：初任者時代の振り返りの交流：受講者の経験の振り返りを交流し、本講義の目的、内容、方法を明示する
 - 第2回：教職の意義の再確認：教職の意義や社会が教員に求めるものを再確認する
 - 第3回：教師として歩み続けるまでの転換点（事例分析）：「教師として成長するきっかけ・糧」となった事項を受講者の事例を交流していく中で整理する
 - 第4回：協働できる関係性・協働できない関係性の実際（事例分析）：「教師として成長できる（できない）関係」となった事項を受講者の事例を交流していく中で整理する
 - 第5回：辞めていく教員とは：早期退職する教員の背景を分析する
 - 第6回：職能教育としてのメンタリング（1）メンタリングとは：メンタリングについて講述する
 - 第7回：職能教育としてのメンタリング（2）後進を育て、自分も成長する：メンタリングによって何がどう変化していくのかについて講述する
 - 第8回：メンターとしてのロールプレイ：新採用教員の指導者になったことを想定してロールプレイを行う
 - 第9回：若手教員の支援の実際（1）受講者の実体験を例に：若手時代の実体験を発表する
 - 第10回：若手教員の支援の実際（2）受講者の実体験を例に：若手時代の自分がどうされたかについて意見交流する
 - 第11回：若手教員の支援の実際（3）受講者の実体験を例に：先輩教員として「かつての私」にどう接するべきなのかを討論する
 - 第12回：若手教員の支援の実際（4）受講者の実体験を例に：先輩教員として「かつての私」にどう接するべきなのかを討論した結果を発表する
 - 第13回：協働的な人間関係・職場の構築に必要な資質・能力とは（1）汎用的な力とは何か：これからの職能成長に求められる汎用的な力について講述する
 - 第14回：協働的な人間関係・職場の構築に必要な資質・能力とは（2）メンティー（プロテジエ）の成長への還元はどうするのか：若手を成長させる土壤をどうつくっていくべきかを討論する
 - 第15回：授業のまとめ：授業全体を総括し、受講者各人の成果や課題を把握する
（定期試験は授業科目の特性上実施しない）
- 【注】授業内容と順番は受講学生の課題意識等に応じて適宜変更することがある

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

■ 教科書にかかる情報

教科書	書名	メンタリング入門			ISBN	9784532110932	備考	日経文庫, 1093				
	著者名	渡辺三枝子, 平田史昭著										
	出版社	日本経済新聞社										

■ 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配付もしくは提示する。
事例については受講者が持ち寄る。

■ 参考書にかかる情報

参考書	書名	メンタリング：会社の中の発達支援関係	ISBN 456126387	備考
	著者名	キャシー・クラム 著,渡辺直登, 伊藤知子 訳,Kram, Kathy E, 1950-,渡辺, 直登, 1951-,伊藤, 知子, 教育学,		
	出版社	白桃書房	出版年 2003	NCID

■ 参考書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配付もしくは提示する。

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

吉田：研究室（教育学部本館棟438）前に時間割とスケジュールを掲示している。基本的には授業時間と諸用務で留守にしている時間以外は研究室に在室しているが事前に電子メール等で連絡していただければ幸いである。

■ メールアドレス

吉田 : whelk@eve.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	月1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51401002	学校安全管理	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
田中 洋, 吉田 安規良, 下地 敏洋			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

学校現場が対応しなければならない安全管理について、児童生徒が被害者となりうる事象について、これまで起きた事件・事故（いじめ、正課中の事故など）や受講者の経験を元にその対応策を学ぶ。また、想定外の事象が生じた際の在り方をイメージすることを通して不測の事態に対応する資質・能力を養う。これらのこと元に、とりわけ沖縄県の教育課題にある「学習指導の充実」や「生徒指導の充実」に、ここで養われた資質能力が下支えになることをめざす。

安全管理に関する自らの経験を振り返りながら、それが危機管理の理論的視点からどのように裏付けられるのか、あるいは見直さるべきなのか、について学ぶ。それにより、将来的に起こり得る課題に応えられるような危機管理能力を修得することを目指す。

①学校経営上必要不可欠な安全管理の面について、児童生徒の生命・身体や個人情報等に被害が及ぶ状況について想定し、それらを防ぐ方策を理解する。

②児童生徒に被害が及ぶ危機の全てを想定することが困難であることを理解した上で、ロールプレイングを通じて想定外（未曾有）の事象への対応をイメージすることができる。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

- ・学卒院生：安全管理上問題となる事例を具体的に検討して危機管理について理解するとともに、ロールプレイングを通じて、危機的状況に対処しうる能力を養う。
- ・現職院生：安全管理上問題となる事例について、自らの経験を振り返りながら、具体的に検討することによって、来たるべき危機的状況に対処しうる能力を養う。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート…個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度…授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現…授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察…受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次生

■ 授業計画

全授業を担当教員が共同で担当する

第1回：学校が抱える危険

第2回：守秘義務の再確認

第3回：児童生徒の救命措置の体系化（1）：実際に起きた事故の例から考える組織的対応理論

第4回：児童生徒の救命措置の体系化（2）：救急活動（外部専門家）との連携の実際

第5回：避難訓練の在り方、防災・減災教育

第6回：施設管理者としての防災・減災への日常的な対応

第7回：個人情報の取り扱い

第8回：体罰はなぜ起るのか

第9回：実際に起った学校での事件事故事例研究（1）いじめなどを中心に

第10回：実際に起った学校での事件事故事例研究（2）正課中の事故を中心

第11回：実際に起った学校が関係する学校外での事件事故事例研究

第12回：情報公開と児童生徒の保護

第13回：危機における対応（1）ロールプレイ

第14回：危機における対応（2）合意形成と組織的な対応、外部機関との対応

第15回：授業のまとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

■ 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配布する。

 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

授業時に適宜必要な資料を提示する。
事例については受講者が持ち寄る。

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

常時受け付ける（教育学部棟325室）。

 メールアドレス

tanakah@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	火5	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51402002	学校マネジメント	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
田中 洋, 下地 敏洋			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

学校経営（協働する学級経営、学年経営、校務分掌運営を含む）を行いうえで不可欠の法的事項について概観したうえで、これまでに蓄積された学校教育に関する裁判例を始めとした実際の事例を分析するとともにその現実について理解する。そのうえで、自身がこれまでに体験した問題事例を振り返りながら、適切な処理とは何かを検討する。

自らの経験を振り返りながら、それが法的観点からどのように裏付けられるのか、あるいは見直されるべきなのかについて学び、自身の教育実践の改善へつなげる。それにより、将来的に起こり得る課題に応えられるような法的資質を得て、理論と実践を融合した実践者へと成長するきっかけをつかむことを目指す。

学校経営（協働する学級経営、学年経営、校務分掌運営を含む）において中堅～管理職に必要な組織マネジメント能力について、法的な基本的事項を理解するとともに、実際の裁判例を始めとした現実の事例の分析を通じて、今日の学校経営に求められている危機管理に対応する資質を養う。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

・現職院生：法的な基本的事項を理解するとともに、裁判例等の検討を通じて、学校経営等について自らの実践を法的観点から省察することができる資質・能力を養う。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート…個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度…授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現…授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察…受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次生

■ 授業計画

全授業を担当教員2名が共同で担当する

第1回：イントロダクション（学校の法的責任）

第2回：学校経営と法1～学校と法～

第3回：学校経営と法2～子どもと法～

第4回：学校経営と法3～教職員と法～

第5回：学校教育判例分析1～入学・進級～

第6回：学校教育判例分析2～学校事故～

第7回：学校教育判例分析3～学校管理～

第8回：学校教育判例分析4～研修・評価～

第9回：学校教育判例分析5～不利益処分～

第10回：学校教育判例分析6～人事上の措置～

第11回：学校教育判例分析7～その他～

第12回：実際に体験したヒヤリハット事例の報告・検討1～授業・部活動等～

第13回：実際に体験したヒヤリハット事例の報告・検討2～学校管理運営～

第14回：実際に体験したヒヤリハット事例の報告・検討3～その他～

第15回：まとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

授業時に適宜指示・配付する。

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

裁判例等の各種資料等。

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

常時受け付ける（教育学部棟325室）。

■ メールアドレス

tanakah@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	木5	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51403002	学校と地域との連携の実践と課題	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
吉田 安規良, 下地 敏洋, 小林 稔			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

現在求められている学校と地域との連携について、現在の各人の勤務校（あるいは教育実習校）での実態を足掛かりに、中央教育審議会等の資料を読んで概観したうえで、成功例だけでなく失敗例を含めた実際の連携事例を検討し、その現状と課題とを明らかにする。さらに、沖縄県で行われている実践事例について、自身の経験したものも含めて報告し、それを批判的に検討したうえで、改善プランを作成・提案する。

■ URGCC学習教育目標

専門性

■ 達成目標

今日求められている学校と地域との連携について、広く全国の事例を学んで、その実践力を学ぶとともに、実際に沖縄県で行われている実践事例について、地域的な特色と課題を明らかにすることによって、地域連携を支える資質を養う。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容 30%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること 30%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
4. 自己省察 受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示 20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）の学生で、この科目の履修が課題意識と合致する者

■ 授業計画

第1回：イントロダクション（学校と地域の在り方）：受講者の実際の経験の交流から本講義の目的、内容、方法を明示する

第2回：学校と地域の連携の実際と制約～教育政策や教育財政の視点を意識して：教育政策や教育財政の現状を分析しつつ、学校と地域の連携事例を分析する

第3回：大学教員という「地域素材」を学校教育に取り入れた事例：大学教員を活用した授業実践の事例を紹介する

第4回：大学教員といふ「地域素材」を学校教育に取り入れた事例から見えるメリット・デメリット：大学教員を活用した授業実践の事例からそのメリット・デメリットを討論する

第5回：全国的な実践事例の報告・検討1：受講生が探してきた幼稚園・小学校での顕著な事例を発表し検討する

第6回：全国的な実践事例の報告・検討2：受講生が探してきた中学校・高等学校での顕著な事例を発表し検討する

第7回：全国的な実践事例の報告・検討3：受講生が探してきた地域が主（学校が從）となっている顕著な事例を発表し検討する

（第5～7回は1回に3名程度の受講者が発表し、受講者が全員1回発表することを想定）

第8回：沖縄県の幼稚園・小学校での実践事例報告・検討1：受講生が探してきた事例、もしくは自らの実践事例（幼稚園・小学校）を発表し検討する

第9回：沖縄県の幼稚園・小学校での実践事例報告・検討2：受講生が探してきた事例、もしくは自らの実践事例（幼稚園・小学校）を発表し検討する

第10回：沖縄県の中学校・高等学校での実践事例報告・検討1：受講生が探してきた事例、もしくは自らの実践事例（中学校・高等学校）を発表し検討する

第11回：沖縄県の中学校・高等学校での実践事例報告・検討2：受講生が探してきた事例、もしくは自らの実践事例（中学校・高等学校）を発表し検討する

（第8～11回は1回に2名程度の受講者が発表し、受講者が全員1回発表することを想定）

第12回：沖縄の中で学校と地域が連携するための鍵は何か：全国や沖縄県での実践事例から、学校と地域とが連携する際の「鍵」となる事項（共通して存在する推進要因や阻害要因）が何かを協議する

第13回：沖縄県の実践事例改善提案1（自分の学校を見据えて）：これまでの授業を踏まえて、自分の勤務校を想定して、学校と地域の連携の在り方の改善策を考える

第14回：沖縄県の実践事例改善提案2（自分の学校を見据えて）：考えた改善策を発表し、意見交換する

第15回：まとめ：授業全体を総括し、受講者各人の成果や課題を把握する

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

【注】授業内容と順番は受講学生の課題意識等に応じて適宜変更することがある

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

■ 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

授業時に適宜指示する。

 参考書にかかる情報

 参考書全体備考

中央教育審議会答申等の各種資料等。
その他授業時に適宜指示する。

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

吉田：研究室（教育学部本館棟438）前に時間割とスケジュールを掲示している。基本的には授業時間と諸用務で留守にしている時間以外は研究室に在室しているが事前に電子メール等で連絡していただければ幸いである。

 メールアドレス

吉田：whelk@eve.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	木3	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51501001	特別支援教育特論	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
浦崎 武, 緒方 茂樹, 城間 圭子			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

特別支援教育に関する教育制度、教育法規は、障害児者をとりまく社会情勢の目まぐるしい変化に伴い大きく変革を遂げている。特殊教育から特別支援教育に変遷してきた過程及びこれまでの障害児者の教育について振り返り、障害のある個々の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進について検討する。また、社会情勢を踏まえた上で、特別支援学校が果たす役割と組織的な運営について検討を行い、障害のある子どもの体制整備について検討を行う。

さらに、特別支援学校が果たすセンター的機能について、教育制度を踏まえた上で検討を行い、共生社会の実現のための検討を行う。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 非現職院生

①特別支援教育に関する国際的な動向と国の施策、支援が必要な子どもへのアプローチを中心に理解することができる。

②特別支援教育の推進を目指すため、その基本的考え方を理解し、支援が必要な子どもへの授業づくり、学級経営等の具体的対応を示すことができる。

2 現職院生

①特別支援教育に関する国際的な動向と国の施策、支援が必要な子どもへのアプローチを中心に理解し実践することができる。

②特別支援教育の推進を目指すため、その基本的考え方を理解し、支援が必要な子どもへの授業づくり、学級経営等の具体的対応を実践することができる。

③従来の特別支援教育の実践の積みあげを、インクルーシブ教育システムを考慮において再構成し今後の特別支援教育の改革の観点を提起することができる

■ 評価基準と評価方法

1 評価基準

(1) 非現職院生

①特別支援教育に関する国際的な動向と国の施策を踏まえ、支援が必要な個々の子どもへの教育実践が提示できる。

②特別支援教育の基本的考え方を理解し、支援が必要な個々の子どもへの指導・支援について具体的に提示ができる。

(2) 現職院生

①特別支援教育に関する国際的な動向と国の施策を踏まえ、学校教育での教育実践が提示でき、実践に繋げる事ができる。

②特別支援教育の基本的考え方を理解し、支援が必要な個々の子どもへの指導・支援について教育的ニーズを把握した上で具体的に提示でき、実践することができる。

2 評価方法

(1) レポート 4 0 %

(2) 受講態度 2 0 %

(3) 発表・表現 2 0 %

(4) 自己省察 2 0 %

■ 履修条件

■ 授業計画

第1回：オリエンテーション

第2回：特殊教育から特別支援教育への転換

第3回：戦後日本における「特殊教育」の現状と課題

第4回：障害児教育の発展と経過

第5回：特別支援教育の具体化とその過程

第6回：特別支援教育の法制度とその整備

第7回：特別支援教育の推進と障害者の権利

第8回：特別支援教育における支援体制の構築に向けて

第9回：特別支援教育の推進を踏まえた教育実践

第10回：障害のある子どもの就学支援

第11回：障害のある子どもの多様な学びの場

第12回：障害のある子どもへの合理的配慮・基礎的環境整備

第13回：特別支援教育の推進とインクルーシブ教育システム構築

第14回：共生社会の実現に向けた特別支援教育の推進

第15回：まとめ（特別支援教育推進に向けた課題と展望）

■ 事前学習

1. 授業で指示する。

2. 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■■ 事後学習

授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

授業中に別途指示

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

文部科学省：特別支援学校学習指導要領(平成29年4月)・同解説(平成30年3月)・特別支援教育資料、障害者に関する法制度

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

■■ メールアドレス

sien@w3.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号					
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等		
2019	前学期	集中	教育学研究科高度教職実践専攻		
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]		■ 単位数		
K51502001	特別支援教育システム論		2		
■ 担当教員[ローマ字表記]					
城間 園子, 緒方 茂樹					

■ 授業の形態

講義、演習又は実験、実務経験講師

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

- ①「一人一人の教育的ニーズを把握し、必要な支援を提供する」という特別支援教育の理念を踏まえ、特別支援教育を多面的に理解し、インクルーシブ教育システム構築の具現化を図り、特別支援教育推進に向けたシステムについて把握する。
- ②特別支援学校の校内支援体制及びセンター的役割についての組織的運営の開発の展望を示す。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 非現職院生

- ①特別支援学校における支援体制整備の理論的背景を踏まえ、関係者及び地域との連携について説明できる。
- ②児童生徒個々の教育的ニーズに応じた支援体制の構築を説明できる。

2 現職院生

- ①特別支援学校における支援体制整備の現状と課題を踏まえ、関係者及び地域との連携について理論的背景を基に構築できる。
- ②児童生徒個々の教育的ニーズに応じた支援体制について、関係者及び関係機関と連携・協働を図り構築することができる。

■ 評価基準と評価方法

1 評価基準

- (1) 非現職院生
 - ①特別支援学校における支援体制整備を理解し、関係者及び地域との効果的な連携について提案できる。
 - ②児童生徒個々の教育的ニーズに応じた支援体制の構築についての具体策を提案できる。

(2) 現職院生

- ①特別支援学校における支援体制整備の現状と課題を踏まえ、関係者及び地域との連携・協働について具体的に取り組むことができる。
- ②児童生徒個々の教育的ニーズに応じた支援体制について理論的背景を基に実践することができる。

2 評価方法

- | | | | | | | | |
|----------|-------|----------|-------|-----------|-------|----------------------|-------|
| (1) レポート | 4 0 % | (2) 受講態度 | 2 0 % | (3) 発表・表現 | 2 0 % | (4) 自己省察（自己の課題との関連性） | 2 0 % |
|----------|-------|----------|-------|-----------|-------|----------------------|-------|

■ 履修条件

特別支援教育特論

■ 授業計画

第1回:オリエンテーション

第2回:教育分野における組織とシステム論

第3回:特別支援学校における組織体制

第4回:組織体制とシステム論に関する協議

第5回:特別支援学校内における連携・協働

第6回:特別支援学校内外における連携・協働した取り組みについて協議・発表

第7回:システム論からみた特別支援学校におけるセンター的役割（現状）

第8回:システム論からみた特別支援学校におけるセンター的役割（課題）

第9回:地域・関係機関と連携・協働した特別支援学校センター的役割の協議・発表

第10回:システム論からみた教育委員会等行政における支援体制の構築（現状）

第11回:システム論からみた教育委員会等行政における支援体制の構築（課題）

第12回:教育委員会等行政における支援体制の構築について協議・発表

第13回:システム論からみたインクルーシブ教育のためのシステム構築

第14回:特別支援教育を推進するためのシステム構築についての協議・発表

第15回:まとめ（特別支援学校におけるシステムの構築）の課題と展望

■ 事前学習

文部科学省:特別支援学校学習指導要領(平成29年4月)・同解説(平成30年3月)・特別支援教育資料関連
その他授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

 教科書にかかる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかる情報

参考書	書名	糸川英夫の創造性組織工学講座			ISBN		備考	
	著者名	糸川英夫						
参考書	出版社	ブレジデント社		出版年	1993	NCID		
	書名	連携とコンサルテーション			ISBN		備考	
	著者名	柘植雅義						
	出版社	ぎょうせい		出版年	2017	NCID		

 参考書全体備考

文部科学省特別支援教育関係の施策等
その他授業時に適宜指示する

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

城間：月、火、水、金 9時～10時 教育学部本館等 210号室

 メールアドレス

城間：sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	未定	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51503002	特別支援教育コーディネーター論	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
城間 園子, 浦崎 武, 緒方 茂樹			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験、実務経験講師

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

①特別支援教育を推進する上で特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーターとする）が果たす役割は重要である。コーディネーターは中核的存在であり、支援体制の構築においては、学校、保護者、関係機関との連携・調整という役割について知る
 ②特別支援学校のコーディネーターは地域のセンターの役割を担い、域内の幼稚学校からの相談や支援体制構築に向けた助言機能を果たすための役割を知り、コンサルテーションの専門性を高める
 ③離島県である沖縄では、限られた資源の中で支援体制の構築を余儀なくされる。その中心的な存在として域内の教育資源を組み合わせ（スクールクラスター）、体制整備を図っている主な担い手が知的障害特別支援学校のコーディネーターの果たす役割を、諸外国での取組及び特別支援教育の制度から概説し、その課題を明確にした上で、沖縄県における特別支援学校の支援体制の整備及びセンター的機能について検討を行い。地域の特別支援教育の推進に向けたコーディネーターとしての専門性と資質について検討する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 非現職院生

- ①特別支援学校における特別支援教育コーディネーターの目的と役割を理解することができる。
- ②知的障害特別支援学校の事例の検討を通して、校内及び地域での特別支援教育コーディネーターとしての取組を深めることができる。

2 現職院生

- ①特別支援教育コーディネーターの目的と役割を理解し、支援体制の構築ができる。
- ②知的障害特別支援学校の事例の検討を通して、専門的な知識の向上と取組を再確認し、特別支援教育コーディネーターとしての役割について検討することができる。
- ③関係機関との連携・調整に関する資質の向上を図り、地域での特別支援教育に関するリーダー的役割を担うことができる。

■ 評価基準と評価方法

1 評価基準

- (1) 非現職院生
 - ①コーディネーターの目的と役割を理解することができ、支援体制について説明することができる
 - ②知的障害特別支援学校等の事例の検討を通して、コーディネーターとしての取組を深め、その役割を説明することができる。
- (2) 現職院生
 - ①コーディネーターの目的と役割を理解し、支援体制を構築することができる。
 - ②知的障害特別支援学校等の事例の検討を通して、専門的な知識の向上と取組を再確認し、コーディネーターとしての役割を果たすことができる。
 - ③関係機関との連携・調整に関する資質の向上を図り、地域での特別支援教育に関するリーダーとなり推進することができる。

2 評価方法

- (1) レポート 30 % (2) 受講態度 30 % (3) 発表・表現 20 % (4) 自己省察 20 %

■ 履修条件

文部科学省：特別支援学校学習指導要領(平成29年4月)・同解説(平成30年3月)、特別支援教育に関する調査（毎年度文部科学省調査）

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：特殊教育から特別支援教育への変遷
- 第3回：特別支援教育コーディネーターが果たす役割
- 第4回：知的特別支援学校における支援体制の構築（校内）
- 第5回：地域への支援体制の構築（センター的役割）
- 第6回：関係機関との連携（知的障害特別支援学校を中心とした連携・協働）
- 第7回：行政機関における特別支援教育の体制整備と推進に向けた取組
- 第8回：知的障害特別支援学校における個別の教育支援計画、個別の指導計画の活用
- 第9回：知的障害特別支援学校における事例の検討（幼稚部・小学部）
- 第10回：知的障害特別支援学校における事例の検討（中学部・高等部）
- 第11回：センター的役割としての事例の検討（特別支援学級・通常指導教室への支援）
- 第12回：センター的役割としての事例の検討（通常学級の支援が必要な子どもへの支援）
- 第13回：事例検討会の発表とまとめ（知的障害特別支援学校等における現状）
- 第14回：事例検討会の発表とまとめ（課題と対応策）
- 第15回：まとめ（支援体制構築におけるコーディネーターの役割と機能）

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

文部科学省：特別支援学校学習指導要領(平成29年4月)・同解説(平成30年3月)、特別支援教育に関する調査（毎年度文部科学省調査）

■ 参考書にかかわる情報

参考書	書名	特別支援学校における学校組織マネジメントの実際—組織的な特別支援教育の推進—			ISBN		備考	
	著者名	杉野学						
	出版社	ジアース社	出版年	2016	NCID			
参考書	書名	特別支援教育「連携づくり」ファシリテーション			ISBN		備考	
	著者名	堀公俊						
	出版社	金子書房	出版年	2008	NCID			
参考書	書名	学校コンサルテーションを進めるためのガイドブック			ISBN		備考	
	著者名	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所						
	出版社	ジアース社	出版年	2007	NCID			
参考書	書名	学校コンサルテーションケースブック			ISBN		備考	
	著者名	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所						
	出版社	ジアース社	出版年	2007	NCID			
参考書	書名	特別支援教育を推進するための地域サポートブック			ISBN		備考	
	著者名	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所						
	出版社	ジアース社	出版年	2007	NCID			

■ 参考書全体備考

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

城間：月、火、水、金 9時～10時 教育学部本館等 210号室

■ メールアドレス

城間：sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日限時	■ 開講学部等
2019	後学期	未定	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51504002	特別支援教育の教育課程・授業特論演習	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
城間 園子, 田中 敦士			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験、実務経験講師

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

- ①特別支援教育の教育課程を構成するために必要な基本的な概念と要件を検討する。障害児教育・特別支援教育の教育課程を歴史的に検討しながら、特別支援学校の教育課程及び授業の在り方について考察する。
- ②特別支援学級を設置していたり通常の学級にいる支援が必要な児童生徒が在籍していたりする小学校・中学校等への助言や援助活動の1つとして、特別支援学級等における教育課程や授業の在り方についても考察する。
- ③主に知的障害者に対する教育を行う特別支援学校におけるよりよい教育実践を検討する。
- ④障害のある児童生徒の発達に視点をあてた授業づくりとして、教育内容、教材・教具の検討、指導過程の検討を行い、個々の教育的ニーズに応じた教育実践を検討していく。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 非現職院生

特別支援教育の教育課程編成について、特別支援学校の学習指導要領の変遷を理解し、教育課程編成の基礎的概念及び事項を理解すること。

2 現職院生

障害のある子どもの教育課程と授業を構成する基本的な視点・考え方を説明することができ、特別支援学校・学級での授業計画などを具体的に示すことができる。

■ 評価基準と評価方法

授業実践の発表（100%）で評価する。評価の観点は以下のとおり。

1 非現職院生

①インクルーシブ教育システムの構築と特別支援学校における教育課程と指導の工夫（授業づくりの工夫）と特色を理解し、関係者及び地域との効果的な連携について提案できる。

②児童生徒個々の教育的ニーズに応じた支援体制の構築についての具体策の1つとして、特別支援学校における教育課程と授業実践上の工夫を提案できる。

2 現職院生

①特別支援学校における教育課程と指導の工夫（授業づくりの工夫）の実際と現実が抱える具体的な問題を把握し、インクルーシブ教育システムの構築を踏まえ、実効性のある特別支援学校における教育課程と指導の工夫（授業づくりの工夫）について理解し、特別支援学級や通級指導教室への助言や援助ができる。

②児童生徒個々の教育的ニーズに応じた支援体制について理論的背景を基に、特別支援学校で実行可能な教育課程を編制したり授業実践として具体化したりすることができるとともに、他の特別支援教育実践者に対して教育課程編制や授業実践に必要な助言や援助を行なうことができる。

■ 履修条件

特別支援学校学習指導要領(文部科学省 平成29年4月)・同解説(文部科学省 平成30年3月)

■ 授業計画

第1回：オリエンテーション

第2回：特別支援教育の歴史と特別支援学校的教育課程の変遷

第3回：特別支援学校的教育課程の構造

第4回：特別支援学校的教育課程（視覚障害）と授業づくり・教育課程及び指導法の工夫

第5回：特別支援学校的教育課程（聴覚障害）と授業づくり・教育課程及び指導法の工夫

第6回：特別支援学校的教育課程（知的障害）と授業づくり・教育課程及び指導法の工夫

第7回：特別支援学校的教育課程（肢体不自由障害）と授業づくり・教育課程及び指導法の工夫

第8回：特別支援学校的教育課程（病弱障害）と授業づくり・教育課程及び指導法の工夫

第9回：特別支援学級の教育課程と授業づくり・教育課程及び指導法の工夫とその実際（主に知的障害者に対する教育を中心）

第10回：通級指導教室と通常学級での授業づくり・教育課程及び指導法の工夫とその実際（主に知的障害者と発達障害者に対する教育を中心）

第11回：知的障害者に対する教育を行う特別支援学校における授業実践の事例①：その実際の把握

第12回：知的障害者に対する教育を行う特別支援学校における授業実践の事例②：事例の内容検討

第13回：知的障害者に対する教育を行う特別支援学校における授業実践の事例③：評価すべき点の把握及び問題点の指摘と改善策の提案

第14回：知的障害者に対する教育を行う特別支援学校における授業実践の事例④：改善策の評価

第15回：まとめ（特別支援学校における教育課程、授業づくりの現状と課題）

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

 教科書にかかる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかる情報

参考書	書名	特別支援教育の基礎・基本	ISBN		備考
	著者名	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所			
	出版社	ジアース社	出版年	2017	NCID

 参考書全体備考

特別支援学校学習指導要領(文部科学省 平成29年4月)・同解説(文部科学省 平成30年3月)

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

城間：月、火、水、金 9時～10時 教育学部本館等 210号室

 メールアドレス

城間：sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日限	■ 開講学部等
2019	後学期	水5	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51505002	特別支援教育・地域支援の理論と実践	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
浦崎 武, 緒方 茂樹			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験、実習、実務経験講師

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害のある子どもたち、発達支援の必要な子どもたちとの関わりを通して特別支援教育と発達支援について理解を深める。地域の学校の子どもたちとの関わりや教育実践、大学における子どもたちへの地域支援活動を通して、地域の子どもたちの日常の生活のなかの「共生社会の形成の基礎」となる子どもたちの体験から特別支援教育・インクルーシブ教育および地域発達支援の理論と実践について考える。

重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害のある子どもたちや発達支援の必要な子どもたちへの理解やその子どもたちへの教育実践については、子どもたちとの実際の関わりや取り組み、その実践を録画した映像、実際の取り組みの実践記録や事例記録などの資料を用いながら考える。重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害のある子どもたちや発達支援を必要とする子どもたちとの関わりについて理解を深めるために、発達的視点を用いて特別支援教育・発達支援についての意義や基礎的知識に伴う本質について、実践を踏まえながら考える。

また大学における重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害のある子どもたちへの地域支援活動を通して地域の子どもたちや教育現場を支えている現職教員、保育士、心理士、福祉職員等の「チームとしての学校」の実現に向けて福祉、保健・医療、労働等の接觸領域の専門家の参加のもと、受講生や担当教員との意見交換および様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の基礎を形成するための地域のネットワークを学ぶ

実際に現職の先生や専門家が参加した重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害のある子どもたちとの遊びや創作活動によるワークショップを通して、関わりが難しかったことや関わりから発見したことを、ミーティングや講義でとり上げ、話しあい、考えることを基本的な方法とする。また、実践による体験に基づいた事例の話や資料を用いて理解をより深める。具体的に子どもの実態を把握し、支援計画を作成し、実践を行い、その変容過程を検討する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 非現職院生

重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害のある子どもたちや発達支援を必要とする子どもたちとの実際の関わりを通して、子どもたちの実態を捉え、実践現場で役に立つ特別支援教育に関する支援や地域支援を行うための基礎を身につける。また、子どもたちとの関係性、支援者間のチーム支援を形成する能力、および支援の企画を立案し実践する能力を身につける。

2 現職院生

発達的視点により支援教育のあり方を判断し教育実践、臨床実践力を身につける。重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害のある子どもたちや発達支援を必要とする子どもたちとの関わりについて考察し、遊びや創作活動を通じた触れ合いから、教育現場で必要とされる特別支援教育における支援や教育を創造する実践力を習得する。

■ 評価基準と評価方法

- レポート・・・取り組んだ課題の内容 30%
- 受講態度・・・授業での質問、発言や子どもたちとの関わり等の参加意欲、授業での課題に自ら意見を述べること 30%
- 発表・表現・・・授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20%
- 自己省察・・・受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己の成長 20%

■ 履修条件

■ 授業計画

- 第1回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害児に関する特別支援教育、地域支援の理論と実践についてのオリエンテーション
 第2回 特別支援教育と重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害の理解
 第3回 特殊教育から重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害に関する特別支援教育への転換
 第4回 特別支援教育・総合支援の実際①（障害児との関係性の形成）
 第5回 特別支援教育の理念と重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症、知的障害児への教育実践
 第6回 特別支援教育特論と総合支援の実際②（障害児の理解と対応）
 第7回 インクルーシブ教育と重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症児、知的障害児への合理的配慮
 第8回 特別支援教育特論と総合支援の実際③（障害児との遊びの展開と総合支援）
 第9回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症児、知的障害児の発達支援（遊び）と教育実践（自立活動）
 第10回 特別支援教育特論と総合支援の実際④（共有する場の形成）
 第11回 合同授業と重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症児、知的障害児の多様な学びの場
 第12回 特別支援教育特論と総合支援の実際⑤（LD児、ADHD児、自閉スペクトラム症児との体験を共有する企画の創造）
 第13回 共生社会の形成に向けた地域における重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉ス

ペクトラム症児、知的障害児の取り組み
第1・4回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉スペクトラム症児、知的障害児の特別支援教育特論と総合支援の実際⑥（共有する体験の形成）
第1・5回 まとめ：課題（通常の教育の改革）と展望

■■ 事前学習

1. 授業で指示する。
2. 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■■ 事後学習

授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。

■■ 教科書にかかわる情報

教科書	書名	発達障害のある子どもとともに楽しむ＜トータル支援＞と海を活かした教育実践－自立活動の授業実践と集団支援を通して＜向かう力＞を育む－			ISBN		備考
		浦崎武、武田喜乃恵					
	出版社	協同出版	出版年	2016	NCID		

■■ 教科書全体備考

資料を必要に応じて配布する

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

特別支援学校学習指導要領(文部科学省 平成29年4月)・同解説(文部科学省 平成30年3月)

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

■■ メールアドレス

sien@w3.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日限	■ 開講学部等
2019	後学期	水4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51506002	障害児理解と教育実践・発達臨床支援	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
浦崎 武, 城間 園子			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験、実習

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉症スペクトラム、知的障害のある子どもたちや発達支援を必要とする子どもたちとの関わりについて理解を深めるとともに発達臨床的視点、心理学的視点を用いて教育実践、発達臨床支援を学ぶ。実際に地域の学校の教育実践を報告してもらい討論する。教員のみならず、心理士、福祉士、保育士、医師等の近接領域の専門家と連携・協働による「チームとしての学校」を展開、発展させていくための地域における教育実践力を身につける。重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉症スペクトラム、知的障害等の障害種に応じた関わりが難しかったことや関わりから発見したことを、ミーティングや講義でとり上げ、話しあい、考えることを大切にする。また、実践による体験に基づいた事例の話や資料を用いて理解をより深めることで理論を形成していく力を形成する。実践を通して理論を形成する実践と理論の往還による高度な障害児臨床支援における実践力を習得する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1. 非現職院生

重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉症スペクトラム、知的障害のある子どもたちや支援を必要とする子どもたちとの関わりについて関心や意欲をもち、基礎的理を深めるとともに発達臨床的視点、心理学的視点により特別支援教育のあり方を検討し教育実践力、臨床実践力を身につける。

2. 現職院生

発達の視点および臨床心理学的視点により、重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉症スペクトラム、知的障害のある子どもたちや支援を必要とする子どもたちとの関わりについて考察し、臨床・教育現場で必要とされる障害児発達支援における実践力を習得する。

■ 評価基準と評価方法

- レポート・・・取り組んだ課題の内容 30 %
- 受講態度・・・授業での質問、発言や子どもたちとの関わり等の参加意欲、授業での課題に自ら意見を述べること 30 %
- 発表・表現・・・授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 20 %
- 自己省察・・・受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己の成長 20 %

■ 履修条件

特になし

■ 授業計画

- 第1回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、自閉症スペクトラム、知的障害児の理解と教育実践・発達臨床支援についてのオリエンテーション
- 第2回 重複・LD等（ADHD、LD）の理解（アセスメント）と実践
- 第3回 重複・LD等（ADHD、LD）の地域の教育実践の事例検討
- 第4回 重複・LD等（ADHD、LD）の地域の発達臨床支援の実際
- 第5回 自閉症スペクトラム症児の理解（アセスメント）と実践
- 第6回 自閉症スペクトラム症児の地域の教育実践の事例検討
- 第7回 自閉症スペクトラム症児の地域の発達臨床支援の実際
- 第8回 知的障害児の理解（アセスメント）と実践
- 第9回 知的障害児の地域の教育実践の事例検討
- 第10回 知的障害児の地域の発達臨床支援の実際
- 第11回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、知的障害児の心理学的アセスメントと知能検査の実際
- 第12回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、知的障害児の地域の心理学的視点による教育実践の事例検討
- 第13回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、知的障害児の地域の発達臨床支援、心理学的視点の実際
- 第14回 重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、知的障害児の心理学的アセスメントと投影法の実際
- 第15回 まとめ：重複・LD等（LD、ADHD、情緒）、知的障害児の心理学的理解と教育臨床実践・地域発達支援

■ 事前学習

- 授業で指示する。
- 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■ 事後学習

授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。

■ 教科書にかかる情報

教科書	書名	発達障害のある子どもとともに楽しむ＜トータル支援＞と海を活かした教育実践－自立活動の授業実践と集団支援を通して＜向かう力＞を育む－	ISBN		備考
	著者名	浦崎武、武田喜乃恵			
	出版社	協同出版	出版年	2016	NCID

■ 教科書全体備考

資料は必要に応じて配布する

■ 参考書にかかる情報

■ 参考書全体備考

文部科学省：特別支援学校学習指導要領(平成29年4月)・同解説(平成30年3月)、特別支援教育に関する調査（毎年度文部科学省調査）

■ 使用言語

日本語

■ メッセージ

■ オフィスアワー

■ メールアドレス

sien@w3.u-ryukyu.ac.jp

■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	未定	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K51507002	肢体不自由児の理解と支援	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
韓 昌完, 小原 愛子			

■ 授業の形態

講義

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

本授業では、肢体不自由児の心理・生理・病理的側面の基礎的知識について概説する。

肢体不自由のある児童生徒に対する教育的対応の実際について紹介する。

授業方法としては、アクティブラーニングを取り入れながら講義を進めていく。

初めに課題を提示し、それについて各グループで討論する。その後討論した内容や新たに出た疑問等を発表させ、その発表内容に沿って講義形式の解説を行う。

■ URGCC学習教育目標

自律性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 肢体不自由児の心理・生理・病理的特徴について理解する。

3 肢体不自由児に対する教育的支援について理解する。

■ 評価基準と評価方法

出席：20% 発表・討論：30% 試験：50%

■ 履修条件

■ 授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 心理・生理・病理とはⅠ
- 3 心理・生理・病理とはⅡ(心理と生理・病理の関係性について)
- 4 こころが身体に及ぼす影響
- 5 量子力学とこころ
- 6 肢体不自由の定義・特性
- 7 内部障害の特性及び教育に対する討論
- 8 脳性麻痺の特性
- 9 脳性麻痺児教育に対する討論
- 10 二分脊椎の特性及び教育に対する討論
- 11 筋ジストロフィーの特性
- 12 筋ジストロフィー児教育に対する討論
- 13 奇形・奇形症候群の特性及び教育に対する討論
- 14 肢体不自由者に対する教育的支援の実際
- 15 肢体不自由教育に関する最新の研究動向
- 16 試験

■ 事前学習

次回の講義内容に関する論文を検索し、一読してくる。

■ 事後学習

講義内容の教育的対応についての論文を検索し、一読する。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

担当教員が作成した資料を配布する。

■ 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

2/3以上の出席がない学生は、単位を履修することができない。
20分以上の遅刻は欠席とみなす。
授業計画は、進み具合によって多少変更が生じる場合がある。

 オフィスアワー

研究室：教216-1
TEL : 098-895-8420
訪問を希望する際には電話やメールにて事前に連絡して下さい。

 メールアドレス

hancw917@gmail.com

 URL

■ 科目番号					
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等		
2019	後学期	未定	教育学研究科高度教職実践専攻		
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]		■ 単位数		
K51508002	病弱児の理解と支援の探究		2		
■ 担当教員[ローマ字表記]					
田中 敦士, 小原 愛子					

■ 授業の形態

講義

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

- ・授業内容：小児医療の進歩のなかで、病弱教育のしくみ・教育に求められる役割を学び特別支援教育の視点から病弱教育について理解する。
- ・授業方法：講義形式と討論（議論）形式で行う。

■ URGCC学習教育目標

コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

- ・病弱教育の定義・歴史・対象・教育の場を理解する[専門性]。
- ・病気の子供の治療や心理特性を理解し、学校教育の意義や役割について考えることで、指導の視点について説明できる[コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性]。
- ・病弱教育のこれまでの研究動向から、病弱教育の分野における現状と課題を理解し、説明できる[コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、専門性]。

■ 評価基準と評価方法

- ・評価基準：A（優）=90点以上、B（優）=80~89点、C（良）=70~79点、D（可）=60~69点、F（不可）=0~59点
- ・評価方法：発表（70%）と授業態度（30%）で評価する

■ 履修条件

特になし

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
 第2回 病弱者教育の概要
 第3回 院内学級の概要
 第4回 慢性疾患と成育医療
 第5回 病弱教育の教育課程
 第6回 自己管理能力の育成
 第7回 病弱児に対する指導法I（小児がんの子どもへの指導）
 第8回 病弱児に対する指導法II（糖尿病の子どもへの指導）
 第9回 病弱児に対する指導法III（心疾患の子どもへの指導）
 第10回 病弱児に対する指導法IV（呼吸器疾患の子どもへの指導）
 第11回 病弱児に対する指導法V（アレルギー疾患の子どもへの指導）
 第12回 復学支援の現状と課題
 第13回 感染予防とスタンダードプロコロニション
 第14回 病弱教育の指導案作成（講義）
 第15回 病弱教育の指導案作成（発表）

■ 事前学習

- ・病弱教育の理論に関する学習が必要である。
- ・授業の中で事前・事後学習の内容を告知する。

■ 事後学習

- ・病弱教育の理論に関する学習が必要である。
- ・授業の中で事前・事後学習の内容を告知する。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

担当教員が作成した資料を配布

 参考書にかかる情報

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

- ・2/3以上の出席がない学生は、単位を履修することができない。
- ・20分以上の遅刻は欠席とみなす。
- ・授業計画は、授業の進み具合によって、多少変更が生じる場合がある。

 オフィスアワー

研究室：213室

メールで事前に連絡してください。

 メールアドレス

aikohara@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号					
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等		
2019	後学期	未定	教育学研究科高度教職実践専攻		
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]		■ 単位数		
K51509002	重複障害児の理解と支援		2		
■ 担当教員[ローマ字表記]					
小原 愛子, 韓 昌完					

■ 授業の形態

講義

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

授業内容は、1)重複障害児の定義や特性、教育課程と自立活動、医療的ケアなど、重複障害児に対する基本的な知識について説明する、2)重複障害児に対する指導法を具体的に学ぶことにより、重複障害児に必要な支援の方法を解説する。

授業方法は、講義形式とグループによるディスカッション・発表を行う。

■ URGCC学習教育目標

コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

- 1.重複障害の定義を説明できる[知識・理解]
- 2.重複障害児の心理・生理・病理的特性に関する知識を習得する[知識・理解]
- 3.重複障害児教育の教育課程に関する知識を習得する[知識・理解]
- 4.重複障害に関わる医療や福祉等の連携の必要性を説明できる[技能・表現]
- 5.重複障害児に対する支援と具体的な指導方法を身に付ける[思考・判断、技能・表現]

■ 評価基準と評価方法

- ・評価基準：A（優）=90点以上、B（優）=80～89点、C（良）=70～79点、D（可）=60～69点、F（不可）=0～59点
- ・評価方法：授業の中でグループで議論し発表する時間を設けるため、発表により評価する。

■ 履修条件

特記事項なし

■ 授業計画

- 1.重度重複障害の概念
- 2.重度重複障害の原因
- 3.重度重複障害児の特徴
- 4.特別支援学校における医療的ケア
- 5.重度重複障害児の教育課程
- 6.重度重複障害児の指導法①動作法、静的弛緩誘導法、水泳療法、知覚運動療法
- 7.重度重複障害児の指導法②リズム運動法、インリアル療法、感覚統合療法、スマーズレン教育
- 8.重度重複障害教育の最新研究

■ 事前学習

重度重複障害に関する研究論文を読んでおくこと。先行研究は、教育分野に限定せず、医療分野、福祉分野等の幅広い観点から調べること。

■ 事後学習

授業の内容と併せて研究論文の内容をまとめること。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

授業内で配布される資料

■ 参考書にかかわる情報

■ 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

随時。事前にメールにて希望する日程の確認をすること。

研究室：教育学部棟2階213号室

 メールアドレス

colora420@gmail.com

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	金1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K52001001	課題発見実習 I	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
比嘉 俊, 道田 泰司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 下地 敏洋, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 城間 園子, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

実習

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

附属学校及び特別支援学校を中心とした実習学校での教育実践の観察を通して、児童生徒の成長と発達を支援する教師の役割を把握する。実習学校での学級活動、研究授業、校内研究会等に参加し、留意点等を理解する。小学校3.5日間、中学校3.5日間、特別支援学校3日、合計10日間（80時間）の実習とする。

観察実習を中心とした実習から他者の教育実践を見つめ、その実践に内在する理論を見いだしたり、理論と実践を往復することをくり返したりしながら理論と実践を融合した実践者へと自らが成長するために必要な課題を整理する。

- ① 実習学校での児童生徒の成長と発達を支援する学校教育活動とそれを具体的に行う教師の役割を把握する。
- ② 実習学校での学級活動、研究授業、校内研究会等への参加からその活動の留意点を理解するとともに、受講者の中での課題を明確にする。

■ URGCC学習教育目標

自律性・社会性・地域・国際性・コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

学卒院生： 附属学校及び特別支援学校での観察実習を通して、児童生徒の成長と発達を支援する教師の役割を把握するとともに、教職大学院での学びの中で迫る課題を明確にことができる。
現職院生： 附属学校及び特別支援学校での観察実習を通して、自らのこれまでの実践を省察し、児童生徒の成長と発達を支援する教師の役割を再確認するとともに、教職大学院での学びの中で迫る課題を今後の教職生活を見据えて明確にできることがある。

■ 評価基準と評価方法

学卒院生： ① 附属学校等での観察実習を通して、児童生徒の成長と発達を支援する教師の役割を具体的に把握することができたか。
② 教職大学院での学びの中で迫る課題を明確にできただか。

現職院生： ① 附属学校等での観察実習を通して、自らのこれまでの実践を省察し、児童生徒の成長と発達を支援する教師の役割を再確認することができたか。
② 教職大学院での学びの中で迫る課題を今後の教職生活を見据えて明確にできただか。

評価方法：① 実習の記録を評価基準に基づいて評価する。
② 実習後のレポートを評価基準に基づいて評価する。

■ 履修条件

特になし。

■ 授業計画

この実習は、担当教員全員が共同で担当し、附属学校及び特別支援学校での観察実習を中心に行う。

実習は、実習学校の都合と受講者の課題意識とを調整して延べ80時間実施する。

実習学校を訪問し、学校の概要、学校経営、学年経営、学級経営、教科経営の基本方針を把握する。

実習学校に在籍する児童生徒に対する学校教育活動を参観し、その目的や教師の役割を把握する。

校内研修等に参加し、校種の特徴と授業実践上の課題を把握する。

事前指導：4月17日（火）3限

附属小学校：6月8日（金）、15日（金武）、22日（金）

附属中学校：5月18日（金）、25日（金）、6月6日（水）、7月6日（金）

特別支援学校：4月末～7月5日（木）の間で今後、調整する。

事後指導：7月10日（火）

■ 事前学習

学卒院生 ① 教育実習等を含めた経験の他に学部等での学修の成果を整理して実習に臨む。
② 観察を通して考察したことを実習日毎に振り返り、まとめるを通じて研究課題を明確化する。

現職院生 ① これまでの教育経験を通して得た知見や自らの経験を相対化し、整理して実習に臨む。
② 観察を通して考察したことを実習日毎に振り返り、まとめるを通じて研究課題を明確化する。

■ 事後学習

・当初の研究テーマと実習での学修を踏まえて、研究テーマの検討を行い、まとめる。

 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

学習指導要領（小学校・中学校・特別支援学校）

 使用言語

日本語

 メッセージ

個人情報の保護については十分に注意する。

 オフィスアワー

月曜 15時～16時30分 318研究室

 メールアドレス

shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	その他	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K52002002	課題発見実習Ⅱ	4	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
比嘉 俊, 道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 下地 敏洋, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 城間 園子, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

■ アクティブラーニング

■ 授業内容と方法

課題発見実習Ⅰで明確化した「教職大学院での学びの中で迫る課題」に対して、公立学校で児童生徒の成長と発達を支援する学校教育活動を実際にを行い、その結果を分析・評価し、課題をより鮮銳にするとともに、課題解決に必要な理論の中で自らに不足しているものが何であるのかを見いだし、教職大学院での他の科目での履修につなげることで理論と実践を往還することを実体験する。

① 実習学校での児童生徒の成長と発達を支援する学校教育活動を分析・評価し改善点を検討するとともに受講者の課題を鮮銳にする。

② 実習学校での児童生徒の成長と発達を支援する学校教育活動とそれを具体的に行う教師の役割を受講者の課題と関連付けて鮮銳にする。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

学卒院生：実習を通して、教職大学院での学びの中で迫る課題を鮮銳にするとともに、その課題解決の方策を教職大学院での実習以外の学びとも関連づけて考えることができる。

現職院生：実習を通して、教職大学院での学びの中で迫る課題を鮮銳にするとともに、自らのこれまでの実践を省察し、その課題解決に向けた現実的な方策を教職大学院での実習以外の学びとも関連づけて考えることができる。

■ 評価基準と評価方法

学卒院生：実習を通して、教職大学院での学びの中で迫る課題を鮮銳にするとともに、その課題解決の方策を教職大学院での実習以外の学びとも関連づけて考えることができたかについて、実習の記録、観察、授業等の取組および事後のレポートによって評価する。

現職院生：実習を通して、教職大学院での学びの中で迫る課題を鮮銳にするとともに、自らのこれまでの実践を省察し、その課題解決に向けた現実的な方策を教職大学院での実習以外の学びとも関連づけて考えることができたかについて、実習の記録、観察、授業等の取組および事後のレポートによって評価する。

■ 履修条件

課題発見実習Ⅰ、課題研究Ⅰ

■ 授業計画

この実習は、公立学校等での教壇実習を中心に行う。

実習は、実習学校の都合と受講者の課題とを調整して延べ160時間実施する。

実習では大学院の担当教員や実習学校の実習指導担当教員と適宜リフレクションを行い、振り返った内容を次の実践に活かす。

実習学校での教育実践を分析・評価し、改善点を提案し、再試行してみる。

実習学校の実習指導担当教員ならびに大学院の担当教員の指導を定期的に受ける。

個人情報の保護については十分に注意する。

■ 事前学習

課題発見実習Ⅰ及び課題研究Ⅰの成果と課題を踏まえた上で、自らの研究テーマについての検討を深める。研究テーマに関わる文献等の確認や院生同士の意見交換等も日常的に行い、自らの研究テーマに收れんするようとする。

■ 事後学習

実習期間の毎日の振り返りを基に実習後のレポートにしっかりとまとめる。その際、これまでの学修成果が反映されたものになるような表現に努める。また実習後のレポートにおいては、実習を通して、教職大学院での学びの中で迫る課題を鮮銳にするとともに、自らのこれまでの実践を省察し、その課題解決に向けた現実的な方策を教職大学院での実習以外の学びとも関連づけてまとめるようとする。

■ 教科書にかかわる情報

■ 教科書全体備考

■ 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

体調に十分留意して実習に臨んでください。また児童生徒の安全はもちろん個人情報の保護にも十分留意してください。

 オフィスアワー

月曜日9:00~16:00 – 318研究室

 メールアドレス

shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	通年	その他	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K52003001	課題解決実習	4	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
比嘉 俊, 道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 下地 敏洋, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 城間 園子, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

実習

■ アクティブラーニング

フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

【 目的A に関する : 課題研究に関する実習内容 】

- ① 学生各自が設定した課題解決（学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など）のための対応策を立案し、それを実践する。
- ② 実践内容としては、教科の授業や特別活動等の授業および学校内の研修会の実施や地域連絡会の設定が想定される。
- ③ 実践後は、実践検討会を開催し、自己的実践を評価、再考察し、次の実践案を考案する。学生の実践及び実践後の検討会は、実習校及び近隣の小・中学校教員に対して全て公開とする。実践検討会には、実践者（学生）、実習施設の実習指導教員、大学院教員が参加するが、その他、実習校及び近隣の小・中学校教員の参加も募る。
- ④ さらに、その実践案を実施し、再度、実践検討会を開催し、自己の実践を評価、再考察し、次の実践へつなげる。
- ⑤ このようなサイクルを繰り返すが、サイクルの回数や時期などは、学生の課題研究のテーマにより個別に計画していく。

【 目的B に関する : 日常の実践力の向上に関する実習内容 】

- ① 次の3点の実践及び実践検討会を必ず3回以上含める。
 - a.教科等の指導
 - b.学級経営
 - c.児童生徒指導の実践
- ※ 実践の時期及び回数は、課題研究に関する実習との関連や学生の既存の実践力などを鑑み、学生ごとに実習校指導教員と大学院指導教員が相談の上、決定する。

実習の実施方法

- ① 実践計画を実習開始前に実習校における年間教育計画に組み込み、学校での教育活動における位置づけを明確にする。その際、大学院教員も同席し、学生の課題に沿った実習ができるよう実習校指導教員と相談しながらアドバイスをする。
- ② 大学院教員は、a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導の実践時に最低各1回、学生の実践を参観し、実践検討会を開催して指導を行う。また、それ以外にも必要に応じて実習校に出向き、合計10回(40時間)は実習校において指導にあたる。
- ③ 実習期間中も課題研究の授業は併行して行うが、実習とは別の時間帯に、主に大学において指導する。また課題研究の授業では、実習での実践を様々な角度から捉えなおし、再考察し、まとめ、次の実践へ繋ぐべくより深い考察を行う。それゆえ、課題研究の評価は、実習における評価とは別に、大学院教員が行う。
- ④ 実習生は、実習日ごとに実習記録簿を記載する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

- ① 1年に発見し試行した課題解決について、特定校（勤務校、あるいは連携協力校）で複数回することで、より確かな解決を目指す。
 - A 学生各自が課題解決のための対応策の企画・立案を実習開始前に行い、その実践に向けて計画的に実習することにより、課題研究の内容を検証し、課題解決に向けた実践力を確かなものとする。
 - B 全ての教員にとって必要な、教科等の指導、学級経営、及び、児童・生徒指導の実践力を高める。

■ 評価基準と評価方法

① 現職院生について

〔自己省察〕

実習校での協働からなる実習を通して、研究課題の解決策を示し、授業実践に積極的に取り組み、省察し、どの程度、具体的かつ明確にできたかどうか。

〔課題解決力〕

研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を提起し、実践することを通して研究課題に対する答えを示すことができたかどうか。

〔教育実践力〕

- 1) これまでの経験と大学院での実習を含めた学修を通して、研究課題の解決に向かう授業実践を広い視野から創造して実践することができたかどうか。
- 2) 自らの教育実践力を自己評価して向上のために必要な手立てを考え、実行することができたかどうか。
- 3) 児童生徒に育てる力を見取るために必要な授業実践をする力（教材研究・実践・評価・反省等を自ら行う力）を授業に反映できたかどうか。
- 4) a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導などの実践的技能は、他の教員の模範となるレベルにあるか。

② 学卒院生について

〔自己省察〕

実習校での協働からなる実習を通して、研究課題の解決策を示し、授業実践に積極的に取り組み、省察し、どの程度、具体的かつ明確にできたかどうか。

〔課題解決力〕

研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を提起し、実践することを通して研究課題に対する答えを示すことができたかどうか。

〔教育実践力〕

- 1) これまでの大学院での実習を含めた学修を通して、研究課題の解決に向かう授業実践を広い視野から創造して実践することができたかどうか。
- 2) 自らの教育実践力を自己評価して向上のために必要な手立てを考え、実行することができたかどうか。
- 3) 児童生徒に育てる力を見取るために必要な授業実践をする力（教材研究・実践・評価・反省等を自ら行う力）を授業に反映できたかどうか。
- 4) a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導などの実践的技能が、即戦力として通用するレベルにあるか。

評価方法 ※実習校は評価の情報は提供するが、評価の実務はない。

- ① 評価項目・基準を実習校と共有し、実習記録簿の記述内容、及び、実習時や事後検討会での発言内容から、上記評価項目・基準に照らし合わせて、実習校担当教員と大学院教員の協議の上、専攻会議で評価する。
- ② 最終的な成績評価は、原案を教育実習部会で作成し、専攻会議で評価する。

■■ 履修条件

- ・必修及び選択科目の規定の単位数を獲得し、課題発見実習Ⅰ及びⅡを終了していること。

■■ 授業計画

- ・院生が勤務校及び連携協力校と事前に協議して決定した「課題解決実習日」（8時間×20日間（実習校と調整して随時設定する））に基づいて実施する。
- ・試験等は行わず、実習のまとめを作成し、課題研究Ⅲ・Ⅳの学修と連動させる。

■■ 事前学習

- ・「課題解決実習日」の内容に基づいて研究及び授業等の十分な準備をする。

■■ 事後学習

- ・「課題解決実習日」の振り返りを基に省察をまとめる。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

課題解決実習の実習日の調整及び決定については、各院生が実習校と調整の後、教職大学院の主・副担当者と事前に十分に連絡を取り合って進めること。

■■ オフィスアワー

火曜日 16時30分～17時15分 文系総合研究棟305室

■■ メールアドレス

白尾 shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	その他	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K52004001	インターン実習	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
比嘉 俊, 道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 下地 敏洋, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 城間 園子, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

実習

■ アクティブラーニング

フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

実習の具体的な内容

- ① 実習当初に実習校指導教員より、学校の全体的概要やカリキュラムの特性と構成などの教務事項について説明を受けることにより、実習校の全体像を把握する。
- ② 1年次に発見し試行した課題解決について、連携協力校で複数回試すことで、より確かな解決を目指す。
- ③ 年度開始時期の学校の総体を体験的に学修した上で、学生各自が設定した課題解決（学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など）のための対応策を立案し、それを実践する。
- ④ 課題解決実習に連絡して取り組む。

実習の実施方法

- ① 実践計画を実習開始前に実習校における年間教育計画に組み込み、学校での教育活動における位置づけを明確にする。その際、大学院教員も同席し、学生の課題に沿った実習ができるように実習校指導教員と相談しながらアドバイスをする。
- ② 大学院教員は事前指導として、実習校に出向き、観察オリエンテーションと実習計画作成のアドバイスをする。また、事後検討会に同席し、指導にあたる。さらに、各学生の実習の成果及び課題の明確化等を確認する。
- ③ 実習生は、実習日ごとに実習記録簿を記載する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

- ・学卒院生が1年次に発見し試行した課題解決について、連携協力校で複数回試すことで、より確かな解決を目指す。また学校における年間サイクルを経験し、教員就職後に即戦力として活躍できるための準備をする。

■ 評価基準と評価方法

評価項目・基準

〔自己省察〕

- ① 年度開始時期の学校での協働からなる実習を通して、学生各自が設定した課題と照らして解決のための見通しをもつことができたかどうか。
〔協働力〕
- ② 年度開始時期から学級の安定化に向けた重要な時期に学級担任と協力してより良い教育活動を実践することができたかどうか。
〔教育実践力〕
- ③ 年度開始時期の学校の総体を体験的に学修した上で、学生各自が設定した課題解決（学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など）のための対応策を立案し、それを実践することができたかどうか。

評価方法　※実習校は評価の情報は提供するが、評価の実務はない。

- ① 評価項目・基準を実習校と共有し、実習記録簿の記述内容、及び、実習時や事後検討会での発言内容から、上記評価項目・基準に照らし合わせて、実習校担当教員と大学院教員の協議の上、専攻会議で評価する。

■ 履修条件

- ・必修及び選択科目の規定の単位数を獲得し、課題発見実習Ⅰ及びⅡを終了していること。

■ 授業計画

- ・院生が勤務校及び連携協力校と事前に協議して決定した「インターン実習日」（8時間×10日間（実習校と調整して随時設定する））に基づいて実施する。
- ・「課題解決実習」との連動も積極的に取り入れる。
- ・試験等は行わず、実習のまとめを作成し、課題研究Ⅲ・Ⅳの学修と連動させる。

■ 事前学習

- ・年度当初の協働的な学びにつながる実習に取り組むことができるよう事前、事後の連絡・調整を十分に行なう。
- ・行動計画を作成し、基本的な仕事の流れを確認しておく。

■ 事後学習

- ・振り返りを基に反省をまとめる。
- ・次回の実習の準備（連絡・調整・確認）を行う。

■ 教科書にかかる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかる情報

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

・連携協力校との連絡・調整・確認を十分に行なうこと。

 オフィスアワー

火曜日 16時30分～17時15分 文系総合研究棟305室

 メールアドレス

白尾 shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日限	■ 開講学部等
2019	前学期	金1	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K52101001	課題発見実習Ⅰ A (特別支援教育)	1	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
城間 園子, 道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 下地 敏洋, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 比嘉 俊, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

実習

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

附属小・中学校における教育実践の観察を通して、通常学校における障害や支援が必要な児童生徒の授業実践及び校務全般に関わることで、自己の教員としての更なる資質能力の向上と教育研究上の実践的課題の発見と探求に取り組む。

附属小学校 2日間（16時間） 附属中学校 3日間（24時間） 合計 5日間（40時間）

附属小・中学校での観察実習から、通常学校における支援が必要な児童生徒への授業実践と校内外における支援体制等の構築について、「教育的ニーズに応じた指導」「持てる力を高め、主体的な活動を促す」等特別支援教育の理論的背景を踏まえたうえで、分析し（省察）自らの課題を明確化する。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

1 非現職院生

附属小・中学校での観察実習を通して、通常学校における支援が必要な児童生徒への教育実践や支援体制における教員の専門的資質の探求と教職大学院で学んだ理論と実践の融合から、自己の課題を明確にする。

2 現職院生

附属小・中学校での観察実習を通して、通常学級における支援が必要な児童生徒の授業実践や支援体制における教員の専門的資質の再確認と教職大学院で学んだ理論と実践を融合・分析を行い、自己の課題を明確にする。

■ 評価基準と評価方法

1 評価基準

(1) 非現職院生

- ①教育実習を含めた経験の他に学部等での学修の成果を整理して実習に臨む。
- ②実習の考察・分析をすることで自己の課題を明確にする。

(2) 現職院生

- ①これまでの教育経験を通して得た知見や自らの経験を相対化し、整理して実習に臨む。
- ②実習の考察・分析をすることで自己の課題を明確にする。

2 評価方法

- | | |
|----------------------------------|-----|
| (1) 実習時における実践力（自己省察・課題解決力・教育実践力） | 30% |
| (2) 実習記録簿 | 30% |
| (3) レポート（実習後） | 40% |

■ 履修条件

特になし

■ 授業計画

実習における活動内容

- ①授業及び校務の継続的な補助
- ②児童生徒の授業や行事等の学校生活の観察
- ③教員の職務全体の観察・授業の観察
- ④課題研究におけるテーマの設定と課題解決実習に向けての準備
- ⑤教職大学院教員との省察

4月 オリエンテーション（事前指導）

5月～6月

実習（附属小学校 2日間 16時間、附属中学校 3日間 24時間）

■ 事前学習

非現職院生 ① 教育実習等を含めた経験の他に学部等での学修の成果を整理して実習に臨む。
② 観察を通して考察したことを実習日毎に振り返り、まとめることを通して研究課題を明確化する。

現職院生 ① これまでの教育経験を通して得た知見や自らの経験を相対化し、整理して実習に臨む。
② 観察を通して考察したことを実習日毎に振り返り、まとめることを通して研究課題を明確化する。

■■ 事後学習

当初の研究テーマと実習での学修を踏まえて、研究テーマの検討を行い、まとめる。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

文部科学省：特別支援学校学習指導要領(平成29年4月)・同解説(平成30年3月)、特別支援教育に関する調査（毎年度文部科学省調査）

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

城間：月、火、水、金 9時～10時 教育学部本館等 210号室

■■ メールアドレス

城間：sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	その他	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K52102001	課題発見実習ⅠB（特別支援教育）	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
城間 園子			

■ 授業の形態

実習

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

課題発見実習ⅠAで明確になった課題に対し、視覚障害教育・聴覚障害教育・知的障害教育・肢体不自由教育・病弱教育の各特別支援学校にて自己の課題研究テーマに沿って観察を中心とした実習を行い、教育実践における資質能力の向上と教育研究上の実践的課題の解決を教職大学院で学んだ理論と融合しさらなる明確化と検討を図る。

視覚障害教育・聴覚障害教育・知的障害教育・肢体不自由教育・病弱教育特別支援学校

10日間（8時間×10） 合計 10日間（80時間）

特別支援学校での教育実践実習から、障害のある児童生徒や教育的支援をする児童生徒への授業実践と支援体制等の構築についての理論的背景を見いだし、分析し（省察）自らの課題を明確にする。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 非現職院生

特別支援学校での教育実践実習を通して、障害のある児童生徒の授業実践や支援体制における資質能力の向上と教職大学院で学んだ理論と実践の融合から課題を明確にする。

2 現職院生

特別支援学校での教育実践実習を通して、障害のある児童生徒の授業実践や支援体制における専門的資質の再確認とさらなる向上を教職大学院で学んだ理論と実践を融合・分析を行い、課題を明確にする。

■ 評価基準と評価方法

1 評価基準

(1) 非現職院生

障害のある児童生徒への授業実践（特性理解、指導・支援方法）及び支援体制の理論的背景を把握し、課題解決の糸口を見いだすことができたか。

(2) 現職院生

授業実践と支援体制の実習から自己の実践を省察し、障害のある児童生徒の指導・支援方法について再確認し、実践と理論的背景を分析し、自己の課題を明確にすることことができたか。

2 評価方法

(1) 実習における実践力（自己省察・課題解決力・教育実践力） 30%

(2) 実習記録簿 30%

(3) レポート（実習後） 40%

■ 履修条件

特になし

■ 授業計画

実習における活動内容

①授業及び校務の継続的な補助

②児童生徒の授業や行事等の学校生活の観察

③教員の職務全体の観察・授業の観察

④課題研究におけるテーマの設定と課題解決実習に向けての準備

⑤教職大学院教員との省察

4月 オリエンテーション（事前指導）

5月～7月 実習（盲学校 8時間×3日間、ろう学校 8時間×3日間、知的障害教育・肢体不自由教育・病弱教育 4日間 32時間）

■ 事前学習

非現職院生 ① 教育実習等を含めた経験の他に学部等での学修の成果を整理して実習に臨む。

② 観察を通して考察したことを実習日毎に振り返り、まとめるこを通して研究課題を明確化する。

現職院生 ① これまでの教育経験を通して得た知見や自らの経験を相対化し、整理して実習に臨む。

② 観察を通して考察したことを実習日毎に振り返り、まとめるこを通して研究課題を明確化する。

■ 事後学習

・当初の研究テーマと実習での学修を踏まえて、研究テーマの検討を行い、まとめる。

■ 教科書にかかる情報

 教科書全体備考

特別支援学校学習指導要領(文部科学省 平成29年4月)・同解説 (文部科学省 平成30年3月)

 参考書にかかる情報

 参考書全体備考

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

城間：月、火、水、金 9時～10時 教育学部本館等 210号室

 メールアドレス

城間：sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	未定	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K52103002	課題発見実習Ⅱ（特別支援教育）	4	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
城間 園子, 浦崎 武			

■ 授業の形態

実習

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ

■ 授業内容と方法

課題発見実習ⅠA・ⅠBで明確になった課題に対し、知的障害教育・肢体不自由教育・病弱教育のいずれかの特別支援学校にて自己の課題研究テーマに沿って実習を行い、教育実践における資質能力の向上と教育研究上の実践的課題の解決を教職大学院で学んだ理論と融合しさらなる明確化と検討を図る。

知的障害教育・肢体不自由教育・病弱教育特別支援学校での実習

10日間（1日あたり8時間）×2回 合計 20日間（160時間）

特別支援学校での教育実践実習から、障害のある児童生徒や教育的支援を要する児童生徒への授業実践と支援体制等の構築についての理論的背景を見いだし、分析し（省察）自らの課題を明確にする。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1 非現職院生

特別支援学校での教育実践実習を通して、障害のある児童生徒の授業実践や支援体制における資質能力の向上と教職大学院で学んだ理論と実践の融合から課題を明確にする。

2 現職院生

特別支援学校での教育実践実習を通して、障害のある児童生徒の授業実践や支援体制における専門的資質の再確認とさらなる向上を教職大学院で学んだ理論と実践を融合・分析を行い、課題を明確にする。

■ 評価基準と評価方法

1 評価基準

(1) 非現職院生

障害のある児童生徒への授業実践（特性理解、指導・支援方法）及び支援体制の理論的背景を把握し、課題解決の糸口を見いだすことができたか。

(2) 現職院生

授業実践と支援体制の実習から自己の実践を省察し、障害のある児童生徒の指導・支援方法について再確認し、実践と理論的背景を分析し、自己の課題を明確にすることことができたか。

2 評価方法

- | | |
|----------------------------------|-----|
| (1) 実習時における実践力（自己省察・課題解決力・教育実践力） | 30% |
| (2) 実習記録簿 | 30% |
| (3) レポート（実習後） | 40% |

■ 履修条件

特になし

■ 授業計画

授業計画

実習における活動内容

①授業及び校務の継続的な補助

②児童生徒の授業や行事等の学校生活の観察

③教員の職務全体の観察・授業の観察

④課題研究におけるテーマの設定と課題解決実習に向けての準備

⑤教職大学院教員との省察

7月 オリエンテーション（事前指導）

9月 実習（知的障害教育・肢体不自由教育・病弱教育特別支援学校10日間 80時間）

1月～2月 実習（知的障害教育・肢体不自由教育・病弱教育特別支援学校10日間 80時間）

■ 事前学習

課題発見実習Ⅰ-A、Ⅰ-B及び課題研究Ⅰの成果と課題を踏まえた上で、自らの研究テーマについての検討を深める。研究テーマに関わる文献等の確認や院生同士の意見交換等も日常的に行い、自らの研究テーマに收れんするようにする。

■ 事後学習

実習期間の毎日の振り返りを基に実習後のレポートにしっかりとまとめる。その際、これまでの学修成果が反映されたものになるような表現に努める。また実習後のレポートにおいては、実習を通して、教職大学院での学びの中で迫る課題を鮮鋭にするとともに、自らこれまでの実践を省察し、その課題解決に向けた現実的な方策を教職大学院での実習以外の学びとも関連づけてまとめるようにする。

 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

特別支援学校学習指導要領(文部科学省 平成29年4月)・同解説(文部科学省 平成30年3月)

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

城間:月、火、水、金 9時~10時 教育学部本館等 210号室

 メールアドレス

城間:sono0814@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号					
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等		
2019	前学期	火3	教育学研究科高度教職実践専攻		
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]		■ 単位数		
K53001001	課題研究 I		2		
■ 担当教員[ローマ字表記]					
道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 下地 敏洋, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 比嘉 俊, 城間 園子, 多和田 実, 森 力					

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、学生が文献や資料を調べる

■ 授業内容と方法

受講生各人のこれまでの教職経験、連携協力校の課題に即した教材開発、カリキュラム開発、授業実践評価と同時に校内研究会の組織化と実施、授業研究力・授業力の向上を目指した校内研究会への参画、教職大学院での必修科目の履修などを通して、学校教育における今日的な教育課題を探り、解決に向けての方向性を考察する。

まず、受講者各人の学校教育における教材開発、カリキュラム開発、授業実践などの教育課題を整理する。その課題の本質を受講生や担当教員との意見交換を通して明らかにする。

すなわち、教育実践を見つめ、その実践に内在する理論を見いだしたり、理論と実践を往復することをくり返したりしながら理論と実践を融合した実践者へと自らが成長するために必要な課題や方向性を整理する。

■ URGCC学習教育目標

■ 達成目標

学卒院生：将来のリーダーとして、学校教育の授業改善に関わる課題を捉え、その解決の方向性について考察できる。

現職院生：中堅からベテランあるいは管理職等として活躍する今後の教職キャリアを見通し、学校教育の授業改善やカリキュラム改善に関わる実践課題を捉え、自らの経験を踏まながら、その解決の方向性について考察できる。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容：30%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること：30%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度：20%
4. 自己省察 受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示：20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻 1年次

■ 授業計画

第0回：学修成果報告会に参加して学んだことを報告

第1回：・図書館ワークショップ（年次指導）

第2回：課題研究・構想発表ガイダンス

第3回：教員より、課題研究に望むこと

第4回：課題研究構想発表（4～5人×4グループ）

第5回：授業参観の視点と授業分析

第6回：個別相談

第7回：課題研究構想発表（4～5人×4グループ）

第8回：2期生の研究プロセスから研究を考える

第9回：個別相談

第10回：実習を通して自己の課題を発見する（振り返り）

第11回：課題研究構想発表（4～5人×4グループ）

第12回：論の立て方（ジグソー学習）

第13回：課題発見実習Ⅰ振り返り

第14回：課題研究構想発表（4～5人×4グループ）

第15回：課題研究Ⅰの振り返り

第16回（随時）：主担当教員と、今後について相談

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

■ 事前学習

1. 授業で指示する。

2. 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■ 事後学習

1. 授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。

2. 必要に応じて、課題に関するプレゼンテーション及びリフレクションを実施するものとする。

3. 課題発見実習の成果も踏まえ、課題研究IIの中間報告書作成に向けて諸準備を行うものとする。

 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配布する。

 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

1. 授業時に適宜必要な資料を提示する。
2. 事例については受講者が持ち寄る。

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

年次担当へメールをし、アポを取ってください。

 メールアドレス

道田泰司 : michita@edu.u-ryukyu.ac.jp
村末勇介 : ymurasue@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	火3	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K53002002	課題研究Ⅱ	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 下地 敏洋, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 比嘉 俊, 城間 園子, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

課題研究Ⅰの最後で明らかになった受講生各人の課題意識をベースに、連携協力校に即した学校実践に関するフィールドワーク、学校経営・学級経営調査、実態調査・ニーズ調査、課題解決的実践プログラムの開発、校内研究会への参画などを通して、学校教育における今日的な課題を探り、解決に向けての方向性を考察する。まず、受講生各人の課題意識と課題発見実習Ⅱの受け入れ先である連携協力校での課題と密接に関連する課題を検討する。次に、連携協力校の教育課題に対する支援案を作成し、課題発見実習Ⅱで実践する。それまでの実践に対する意見交換、リフレクションを行う。受講生各人のこれまでの教職経験、連携協力校の課題に即した教材開発、カリキュラム開発、授業実践評価と同時に校内研究会の組織化と実施、授業研究力・授業力の向上を目指した校内研究会への参画、教職大学院での選択科目の履修などを通して、学校教育における今日的な教育課題を探り、解決に向けての方向性を明確にする。

すなわち、教職大学院での学びの中で理論と実践を往復することをくり返しながら理論と実践を融合した実践者へと自らが成長するために必要な課題や方向性を明確にする。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

1. 学卒院生：将来のリーダーとして、学校教育の授業改善に関する課題を捉え、その解決の方向性を明確化できる。
2. 現職院生：中堅からベテランあるいは管理職等として活躍する今後の教職キャリアを見通し、学校教育の授業改善やカリキュラム改善に関する実践課題を捉え、自らの経験を踏まえながら、その解決の方向性を明確化できる。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容：30%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること：30%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度：20%
4. 自己省察 受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示：20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻1年次

■ 授業計画

授業計画：担当教員全員が共同で担当する

- 1回 オリエンテーション：授業の進め方、連携協力校についての説明
- 2回 連携協力校（1校目）の実態の報告
- 3回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成1：課題発見実習Ⅱと関わって具体的に実践する支援策の作成と議論
- 4回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成2：課題発見実習Ⅱと関わって具体的に実践する支援策の発表と評価
- 5回 実践のリフレクション1：課題発見実習Ⅱにおける実践プログラムの実施状況の報告と議論
- 6回 実践のリフレクション2：課題発見実習Ⅱにおける実践プログラムの実際、課題と修正、議論
- 7回 実践のリフレクション3：次への課題の明確化
- 8回 連携協力校（2校目）の実態の報告
- 9回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成1：課題発見実習Ⅱと関わって具体的に実践する支援策の作成と議論
- 10回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成2：課題発見実習Ⅱと関わって具体的に実践する支援策の発表と評価
- 11回 実践のリフレクション1：課題発見実習Ⅱにおける実践プログラムの実施状況の報告と議論
- 12回 実践のリフレクション2：課題発見実習Ⅱにおける実践プログラムの実際、課題と修正、議論
- 13回 実践のリフレクション3：次への課題の明確化
- 14回 課題の設定：課題解決実習Ⅱで解決すべき課題の交流
- 15回 まとめ
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

1. 授業で指示する。
2. 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■ 事後学習

1. 授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。
2. 必要に応じて、課題に関するプレゼンテーション及びリフレクションを実施するものとする。
3. 課題発見実習の成果も踏まえ、課題研究Ⅲ及び中間報告書作成等の諸準備を行うものとする。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配布する。

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

1. 授業時に適宜必要な資料を提示する。
2. 事例については受講者が持ち寄る。

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

年次担当へメールをし、アポを取ってください。

■■ メールアドレス

道田泰司 : michita@edu.u-ryukyu.ac.jp
村末勇介 : ymurasue@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	火4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K53003001	課題研究Ⅲ	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
下地 敏洋, 道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 比嘉 俊, 城間 園子, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

課題研究IIの最後で明らかになった受講生各人の課題意識をベースに、課題解決実習の受け入れ先である連携協力校（現職院生の場合は勤務校）に即した実践プログラムに沿って観察・調査・実践のプランニング及び結果のプレゼンテーションと討議を行う中で、学校教育における今日的な課題を探り、解決に向けての方向性を考察し、自己省察を行う。まず、連携協力校の課題を踏まえた支援案を出し、課題解決実習で実践する。それぞれの実践に対して意見交換、討議、リフレクションを行う。次に、実践をレポートとしてまとめ、報告会において、発表、意見交換、討議を行う。

まず、受講生各人の課題意識と連携協力校での課題と密接に関連する課題を検討する。次に、連携協力校の教育課題に対する支援案を作成し、課題解決実習で実践する。それぞれの実践に対する意見交換、リフレクションを行う。受講生各人のこれまでの教職経験、連携協力校の課題に即した教材開発、カリキュラム開発、授業実践評価と同時に校内研究会の組織化と実施、授業研究力・授業力の向上を目指した校内研究会への参画、教職大学院での選択科目の履修などを通して、学校教育における今日的な教育課題を探り、解決に向けての方向性を明確にする。

すなわち、教職大学院での学びの中で理論と実践を往還してきたことを生かしつつ自らの課題解決のアプローチを省察しながら課題解決に迫る。さらに、理論と実践を融合した実践者へと自らが成長するために必要な資質・能力を自律的に育成できるようになることを目指す。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

学卒院生：将来のリーダーとして、学校教育の学校経営、授業改善等に関わる課題を捉え、その解決の支援策を作成し、教育実践を見渡す力を持ち、自己省察を行うことができる。

現職院生：中堅からベテランあるいは管理職等として活躍する今後の教職キャリアを見通し、学校教育の学校経営、授業改善等に関わる実践課題を捉え、その解決の支援策を作成し、自らが実践する中で、よりよい支援策を策定し、教育実践を見渡す力を持ち、実践に対する自己省察を行うことで加えて学校教育の授業改善に関わる課題を捉え、その解決の方向性を明確にすること。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 個人もしくはグループで取り組んだ課題の内容：30%
2. 受講態度 授業での質問、発言などの参加意欲、授業での課題に自らの意見を述べること：30%
3. 発表/表現 授業でのプレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度：20%
4. 自己省察 受講前後の受講者自らの成長や課題の把握と自己成長策の提示：20%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻 2年次

■ 授業計画

授業計画：担当教員全員が共同で担当する

- 第1回 オリエンテーション：課題研究I, IIを踏まえた研究課題の設定、連携協力校の確認
- 第2回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成(1)：自らが実習する連携協力校の実態から教育課題に関する支援策の作成
- 第3回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成(2)：連携協力校の教育課題に関する支援策を議論、修正
- 第4回 実践のリフレクション(1)：課題解決実習における実践の実施状況の報告、議論（前半7人）
- 第5回 実践のリフレクション(2)：課題解決実習における実践の実施状況の報告、議論（後半7人）
- 第6回 実践のリフレクション(3)：課題解決実習における実践の実際、課題と修正、議論
- 第7回 実践のリフレクション(4)：課題解決実習における実践の評価、議論
- 第8回 中間報告会に向けて、実践プログラムのまとめ
- 第9回 実践報告書作成に向けた中間報告会(1)：3人分の課題解決実践（授業改善、カリキュラム開発に関わる授業実践等）の修了レポートの発表
- 第10回 実践報告書作成に向けた中間報告会(2)：3人分の課題解決実践（授業改善、カリキュラム開発に関わる授業実践等）の修了レポートの発表
- 第11回 実践報告書作成に向けた中間報告会(3)：3人分の課題解決実践（授業改善、カリキュラム開発に関わる授業実践等）の修了レポートの発表
- 第12回 実践報告書作成に向けた中間報告会(4)：3人分の課題解決実践（学校経営、地域連携などに関わる学校実践等）の修了レポートの発表
- 第13回 実践報告書作成に向けた中間報告会(5)：2人分の課題解決実践（学校経営、地域連携などに関わる学校実践等）の修了レポートの発表、報告会のまとめ
- 第14回 課題の明確化：課題解決実習で解決すべき課題の再認識
- 第15回 総括

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

■ 事前学習

1. 授業で指示する。
2. 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■ 事後学習

- 授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。
- 必要に応じて、課題に関するプレゼンテーション及びリフレクションを実施するものとする。
- 課題発見実習の成果も踏まえ、課題研究Ⅳ及び最終報告書作成等の諸準備を行うものとする。

■■ 教科書にかかる情報

■■ 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配布する。

■■ 参考書にかかる情報

■■ 参考書全体備考

- 授業時に適宜必要な資料を提示する。
- 事例については受講者が持ち寄る。

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

年次担当へメールをし、アポを取ってください。

■■ メールアドレス

下地敏洋：shimoto@edu.u-ryukyu.ac.jp
比嘉 俊：higa-t@edu.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	火4	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K53003002	課題研究Ⅳ	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
下地 敏洋, 道田 泰司, 杉尾 幸司 [sugio kouji], 田中 洋, 吉田 安規良, 上間 陽子, 浦崎 武, 丹野 清彦, 白尾 裕志, 藏満 逸司, 村末 勇介, 比嘉 俊, 城間 園子, 多和田 実, 森 力			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

課題研究Ⅰ, Ⅱ, Ⅲでの課題意識をベースに、課題解決実習の受け入れ先である連携協力校での課題と結びつながら学校現場における今日的な教育課題を探り、それを解決するために具体的に解決策を実践する。その結果に対する考察を行い、受講生や担当教員との意見交換からその課題の何がどう解決し、まだ残る課題が何であるのかを明らかにする。

課題研究Ⅲの最後に再確認した受講生各人の課題意識をベースに、課題解決実習の受け入れ先である連携協力校（現職院生の場合は勤務校）に即した実践プログラムに沿って観察・調査・実践のプランニング及び結果のプレゼンテーションと討議を行ううで、学校教育における今日的な課題を探り、解決に向けての方向性を考察し、自己省察を行う。まず、連携協力校の課題を踏まえた支援案を作成し、課題解決実習で実践する。それぞれの実践に対して意見交換、討議、リフレクションを行う。次に、実践をレポートとしてまとめ、報告会において、発表、意見交換、討議を行う。

課題研究Ⅲに引き続き、受講生各人の課題意識と課題解決実習の受け入れ先である連携協力校での課題と密接に関連する課題を検討する。次に、連携協力校の教育課題に対する支援案を作成し、課題解決実習で実践する。それぞれの実践に対する意見交換、リフレクションを行う。受講生各人のこれまでの教職経験、連携協力校の課題に即した教材開発、カリキュラム開発、授業実践評価とともに校内研究会の組織化と実施、授業研究力・授業力の向上を目指した校内研究会への参画、教職大学院での選択科目の履修などを通して、学校教育における今日的な教育課題を探り、解決に向けての方向性を明確にする。

すなわち、教職大学院での学びの中で理論と実践を往還してきたことを生かしつつ自らの課題解決のアプローチを省察しながら課題解決に迫るとともに、その課題解決の軌跡をまとめ、自らの教職大学院での学びを総括する。あわせて理論と実践を融合した実践者へと自らが成長するために必要な資質・能力を自律的に育てできるようになることを目指す。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 達成目標

学卒院生：将来のリーダーとして、学校教育の学校経営、授業改善等に関わる課題を捉え、その解決の支援策を作成し、教育実践を見渡す力を持ち、自己省察を行うことができる。さらに自らの教職大学院での学びを総括し、まとめることができる。

現職院生：中堅からベテランあるいは管理職等として活躍する今後の教職キャリアを見通し、学校教育の学校経営、授業改善等に関わる実践課題を捉え、その解決の支援策を作成し、自らが実践する中で、よりよい支援策を策定し、教育実践を見渡す力を持ち、実践に対する自己省察を行うことに加えて学校教育の授業改善に関わる課題を捉え、その解決の方向性を明確にすることができます。さらに自らの教職大学院での学びを総括し、まとめることができる。

■ 評価基準と評価方法

1. レポート 課題報告書の内容 50%
2. 発表/表現 プレゼンテーションや質疑応答の姿勢・態度 50%

■ 履修条件

教育学研究科高度教職実践専攻 2年次生

■ 授業計画

担当教員全員が共同で担当する

- 第1回 オリエンテーション：課題研究Ⅰ, Ⅱ, Ⅲを踏まえた研究課題の設定、連携協力校の確認
- 第2回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成(1)：自らが実習する連携協力校の実態から教育課題に関する支援策の作成
- 第3回 連携協力校の教育課題に対する支援案の作成(2)：連携協力校の教育課題に関する支援策を議論、修正
- 第4回 実践のリフレクション(1)：課題解決実習における実践の実施状況の報告、議論（前半7人）
- 第5回 実践のリフレクション(2)：課題解決実習における実践の実施状況の報告、議論（後半7人）
- 第6回 実践のリフレクション(3)：課題解決実習における実践の実際、課題と修正、議論
- 第7回 実践のリフレクション(4)：課題解決実習における実践の評価、議論
- 第8回 最終報告会に向けて、実践のまとめ
- 第9回 実践報告書作成に向けた討論(1)：4人分の実践報告書（案）の発表と討論
- 第10回 実践報告書作成に向けた討論(2)：4人分の実践報告書（案）の発表と討論
- 第11回 実践報告書作成に向けた討論(3)：4人分の実践報告書（案）の発表と討論
- 第12回 実践報告書作成に向けた討論(4)：2人分の実践報告書（案）の発表と討論、報告書と報告会の準備の確認、
- 第13回～第15回 課題研究報告会（公開）：各人のこれまでの取組の発表（別途日程設定して実施）
(定期試験は授業科目の特性上実施しない)

■ 事前学習

授業時に適宜指示する。

■ 事後学習

授業時に適宜指示する。

 教科書にかかわる情報

 教科書全体備考

授業時に適宜必要な資料を配布する。

 参考書にかかわる情報

 参考書全体備考

授業時に適宜必要な資料を提示する。
事例については受講者が持ち寄る。

 使用言語

日本語

 メッセージ

 オフィスアワー

常時受け付ける（教育学部棟515室）。

 メールアドレス

下地敏洋：shimoto@edu.u-ryukyu.ac.jp
比嘉 俊：higa-t@edu.u-ryukyu.ac.jp

 URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	前学期	火3	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K53101001	課題研究 I (特別支援教育)	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
浦崎 武			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験、実務経験講師

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

受講者は自らの生活を取り巻くとともに子どもたちが生きる地域のなかで、障害があり、特別の支援が必要とされる子どもたちと出会い、そして「ともに過ごす」共生社会を形成するかについて思いを巡らせる、次に特別の支援が必要とされる子どもたちがいかに育ち、学ぶのかについて地域の日常の生活のなかで考えてみる。特に、子どもたちの育ちと学びは地域の歴史的、文化的な土壤のなかで生きていくのであり、特別の支援が必要とされる子どもたちの日常の生活のなかの育ちと学びのありようを丁寧に捉えることから始める。

そして、特別の支援が必要とされる子どもたちの地域の日常の生活に根差した生きる力をいかに育むかについて、特別支援学校における今日的な課題と役割を探る。さらにその課題を解決するためには具体的に「何を」「どのように」するのかという方向性を具体的な子どもたちが生きるかたちや子どもたちを取り巻く関わりから明確にする。

受講生や担当教員および特別の支援が必要とされる子どもたちの保護者、「チームとしての学校」のメンバーとして構成される支援者、学校職員を含めた専門家、学校外の関係機関等の近接領域の専門家との意見交換を通してその課題の本質を検討しながら、個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画の策定を行つたための基礎を形成する。受講生各人のこれまでの特別の支援が必要とされる子どもたちとの関わりによる実態把握に基づいた活動、障害のある幼児児童生徒の地域や日常生活における実態や発達上必要な支援やその取組、個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画の策定について検討する実践事例研究会、教職相談等の大学を拠点とした取組（トータル支援活動）において実践感覚を磨く、また、教職経験、連携協力校の課題に即した教材開発、カリキュラム開発、授業実践評価と同時に校内研究会の組織化と実施、授業研究力・授業力の向上を目指した校内研究会への参画、教職大学院での必修科目の履修などを通して、学校教育における今日的な教育課題を探り、解決に向けての方向性を考察する。

まず、特別の支援が必要とされる障害のある子どもたちとの具体的継続的な関わりを記録し、その子どもたちの発達の様子や生きるかたち（実態）を丁寧に捉え整理する。また、日常のなかの子どもたちの姿や学校における子どもたちの姿を詳細に記述することで、受講者各人の特別支援学校における教材開発、カリキュラム開発、授業実践等に内在する教育課題を整理する。その課題の本質を受講生や担当教員との意見交換を通して明らかにする。

教育実践を見つめ、その実践に内在する理論を見いだしたり、理論と実践を往復することをくり返したりしながら理論と実践を融合した実践者へと自らが成長するために必要な課題や方向性を整理する。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 成果目標

1 非現職院生

特別支援教育で活躍できる将来のリーダーとして、特別の支援が必要とされる子どもたちが生活する「共生社会の実現」に向けた地域における課題、学校生活および学校教育の授業改善に関わる課題を捉え、その解決の方向性について考察できる。

2 現職院生

中堅からベテランあるいは管理職等特別支援学校に勤務する教職員として地域をコーディネートし活躍する力を有し、今後の教職キャリアを見通し、地域における課題をも視野に入れつつ、特別支援学校における授業改善やカリキュラム改善に関わる実践課題を自らの経験を踏まえ、その解決の方向性について考察できる。

■ 評価基準と評価方法

レポート（30%）、受講態度（30%）、発表・表現（20%）、自己省察（20%）で評価する。評価の観点は以下のとおり。

1 非現職院生

①日常生活や地域の子どもたちとのこれまでの大学における教育実践的取組の体験を踏まえながら、特別支援学校に就学する障害のある子どもたちとの具体的継続的な関わりを記録し、その子どもたちの発達の様子や生きるかたち（実態）を丁寧に捉え整理し、特別支援学校での課題解決の方向性について考察できる。

②日常生活や学校生活における特別の支援が必要とされる子どもたちの姿を整理し、「共生社会の実現」に向けた地域に目を向けた特別支援学校での課題解決の方向性について考察できる。

2 現職院生

①特別の支援が必要とされる子どもたちとのこれまでの教育実践を踏まえながら、特別支援教育における教材開発、カリキュラム開発、授業実践などの背景に存在する教育課題を整理し、特別支援学校に勤める一教員としての課題解決の具体的方向を考察できる。

②課題の本質を受講生や担当教員との意見交換を通して整理し、「共生社会の実現」に向けた地域における課題解決の具体的方向（特別支援学校全体としての関わり方とそこに勤める一教員としての関わり方の具体）について考察できる。

■ 履修条件

■ 授業計画

第1回 オリエンテーション：授業の進め方、研究課題の設定の仕方についての説明

第2回 受講生各人の現時点での特別支援教育に関する課題意識の交流

第3回 課題の設定1：共生社会に向けた課題の設定、地域のなかの障害のある子どもたちの実態と課題、障害のある子どもたちの集団の場における過ごし方における発達的課題

第4回 課題の設定2：特別支援学校における授業実践を見据えた教材開発に関する課題の設定、授業改善との関連、カリキュラム開発に関する課題の設定、連携協力校（特別支援学校）との関連

第5回 課題の設定3：特別支援学校における授業実践評価に関する課題の設定、目標と評価の一 体化との関連、評価のための評価ではなく、支援につながる

第6回 連携協力校（特別支援学校）の実態と教育課題の把握1：連携協力校（特別支援学校）での実習と課題との関係性についての討論

第7回 連携協力校（特別支援学校）の実態と教育課題の把握2：連携協力校（特別支援学校）の現状と授業改善等に関する

第8回 連携協力校（特別支援学校）の実態と教育課題の把握3：カリキュラム開発等に関する

第9回 連携協力校（特別支援学校）の教育課題に対する支援案の作成1：課題発見実習I（特別支援学校）と関わって授業改善の支援策の作成と議論

第10回 連携協力校（特別支援学校）の教育課題に対する支援案の作成2：課題発見実習I（特別支援学校）と関わってカリキュラム開発等の支援策の評価と議論

第11回 リフレクション1：沖縄県内の特別支援学校で行った課題発見実習I（特別支援学校）の実施状況の報告

第12回 リフレクション2：沖縄県内の特別支援学校で行った課題発見実習Ⅰ（特別支援学校）で明らかになってきた課題と、各人の当初の課題との修正の討論

第13回 リフレクション3：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）で解決すべき課題の明確化

第14回 課題の設定4：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）で解決すべき課題の交流

第15回　まとめ

■■ 事前学習

1. 授業で指示する。
2. 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■■ 事後学習

1. 授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

資料は必要に応じて配布する

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

資料は必要に応じて配布する

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

■■ メールアドレス

sien@w3.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL

■ 科目番号			
■ 開講年度	■ 開講学期	■ 曜日時限	■ 開講学部等
2019	後学期	火3	教育学研究科高度教職実践専攻
■ 講義コード	■ 科目名[英文名]	■ 単位数	
K53102002	課題研究Ⅱ(特別支援教育)	2	
■ 担当教員[ローマ字表記]			
浦崎 武			

■ 授業の形態

講義、演習又は実験

■ アクティブラーニング

学生が議論する、学生が自身の考えを発表する、フィールドワークなど学生が体験的に学ぶ、学生が文献や資料調べる

■ 授業内容と方法

課題研究での障害のある幼児児童生徒の地域や日常の生活に根差し、生きる力をいかに育むかについて特別支援学校の今日的な課題意識を基盤に、受け入れ先である連携協力校（特別支援学校）での課題と結びながら共生社会の形成の実現に向けた学校現場における課題と役割を探り、それを解決するために具体的に実践を行う。その実践において、特に子どもたちの育ちと学びは地域の歴史的、文化的な土壤のなかで生きていくのであり、特別の支援が必要とされる子どもたちの日常の生活のなかの育ちと学びのありようを重ねながら、その結果に対する考察を行い、受講生や担当教員との意見交換から特別支援教育に求められる課題の本質を明らかにする。

課題研究Ⅰの最後に明らかになった課題意識を基盤に、障害のある子どもたちの地域や日常の生活における実態や発達上必要な支援やその取組（トータル支援活動）における体験を踏まえながら、連携協力校（特別支援学校）に即した学校実践に関する取組を通して特別支援学校における今日的な課題を探り、解決に向けての方向性を考察する。

まず、特別支援教育の課題意識と連携協力校（特別支援学校）での課題と密接に関連する課題を検討する。その際、大学を拠点とする特別の支援が必要とされる子どもたちとの教育実践的取組（トータル支援活動）の体験を通して学校教育の意義やあり方の理解を深める。次に、連携協力校（特別支援学校）の教育課題に対する個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画を策定およびその資料に基づいて実践を行う。その実践に対する意見交換、リフレクションを行う。受講生各生のこれまでの障害のある幼児児童生徒との関わりによる実態把握に基づいた活動、障害のある幼児児童生徒の地域や日常の生活における実態や発達上必要な支援や取組、個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画の策定を検討する実践事例研究会、教職相談等の大学を拠点とした取組の体験（トータル支援活動）、教職経験、連携協力校（特別支援学校）の課題に即した教材開発、カリキュラム開発、授業実践評価と同時に校内研究会の組織化と実施、授業研究力・授業力の向上を目指した校内研究会への参画、教職大学院での選択科目の履修などを通じて、特別支援学校における今日的な教育課題を探り、解決に向けての方向性を明確にする。

特別の支援が必要とされる障害のある子どもたちとの具体的継続的な関わりを整理し、その子どもたちの発達の様子や生きるかたち（実態）を検討する。また、日常生活や学校生活における子どもたちの姿を詳細に整理することで、受講者各人の特別支援学校における教材開発、カリキュラム開発、授業実践等に内在する教育課題を整理する。その課題の本質を受講生や担当教員との意見交換を通して明らかにする。

教職大学院での学びを通して、理論と実践を往還することをくり返しながら理論と実践を融合した実践者へと自らが成長するために必要な課題や方向性を明確にする。

■ URGCC学習教育目標

自律性、社会性、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、問題解決力、専門性

■ 成果目標

1 非現職院生

特別支援教育で活躍できる将来のリーダーとして、特別の支援が必要とされる子どもたちが生活する「共生社会の実現」に向けた地域における課題、学校生活および学校教育の授業改善に関わる課題を捉える。個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画を策定およびその資料に基づいて実践を行う。計画を検討しながら解決の方向性について考察できる。

2 現職院生

中堅からベテランあるいは管理職等特別支援学校に勤務する教職員として地域をコーディネートし活躍する力を有し、今後の教職キャリアを見通し、個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画を策定およびその資料に基づいて実践を行う。計画を検討しながら特別支援学校における授業改善やカリキュラム改善に関わる実践課題を自らの経験を踏まえ、その解決の方向性について考察できる。

■ 評価基準と評価方法

レポート（30%）、受講態度（30%）、発表・表現（20%）、自己省察（20%）で評価する。評価の観点は以下のとおり。

1 非現職院生

①特別支援学校に就学する障害のある子どもたちとの具体的継続的な関わりを記録し、その子どもたちの発達の様子や生きるかたち（実態）を丁寧に捉え、個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画の策定を行い、整理し、特別支援学校での課題解決の方向性について考察できる。

②日常生活や学校生活における特別の支援が必要とされる子どもたちの行動や発達課題を整理することで特別支援学校での課題を整理し、その課題解決の具体的方向性について考察できる。

2 現職院生

①受講者各人の特別支援教育における教材開発、カリキュラム開発、授業実践などの背景に存在する教育課題を整理し、個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画の策定に基づいて実践を行なうから、特別支援学校での課題解決の方向性について考察できる。

②課題の本質を受講生や担当教員との意見交換および交流を通して整理することで特別支援学校での課題を整理し、その課題解決（特別支援学校全体としての関わり方とそこに勤める一教員としての関わり方の具体）の方向性について考察できる。

■ 履修条件

■ 授業計画

第1回 オリエンテーション：授業の進め方、連携協力校（特別支援学校）についての説明

第2回 連携協力校（特別支援学校）の実態の報告

第3回 連携協力校（特別支援学校）の教育課題に対する支援案の作成1：課題発見実習Ⅱと関わって具体的な実践に対する授業改善の支援策と議論

第4回 連携協力校（特別支援学校）の教育課題に対する支援案の作成2：課題発見実習Ⅱと関わって具体的な実践に対するカリキュラム開発等の支援策の発表と評価と議論

第5回 実践のリフレクション1：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）における実践プログラムの実施状況の報告と議論

第6回 実践のリフレクション2：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）における実践プログラムの実際、課題と修正、議論

第7回 実践のリフレクション3：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）で解決すべき課題の明確化

第8回 実践のリフレクション4：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）の連携協力校（特別支援学校）の実態の報告

第9回 連携協力校（特別支援学校）の教育課題に対する支援案の作成1：課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）と関わって具体的な教育課題に対する実践プログラムを実施する支援策の作成と議論

第10回 連携協力校（特別支援学校）の教育課題に対する支援案の作成2：課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）と関わって具体的な教育課題に対する実践プログラムを実践する支援策の発表と評価

第11回 実践のリフレクション1：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）における実践プログラムの具体的な実践に対する授業改善の支援策の報告と議論

第12回 実践のリフレクション2：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）における実践プログラムの具体的な実践に対するカリキュラム開発等の支援策の実際、課題と修正、議論

第13回 実践のリフレクション3：沖縄県内の特別支援学校で行う課題発見実習Ⅱ（特別支援学校）における解決すべき課題の明確化、援策の発表と評価、議論

第14回 課題の設定：沖縄県内の特別支援学校で行う課題解決実習Ⅱ（特別支援学校）で解決すべき課題の交流

第15回 まとめ

（定期試験は授業科目の特性上実施しない）

■■ 事前学習

1. 授業で指示する。
2. 授業で使用する文献、論文、事例等については受講者が持ち寄る。

■■ 事後学習

授業で討論及び発表した内容について、関連する図書、文献、及び資料等を確認するものとする。

■■ 教科書にかかわる情報

■■ 教科書全体備考

授業中に必要に応じて別途提示

■■ 参考書にかかわる情報

■■ 参考書全体備考

特別支援学校学習指導要領(文部科学省 平成29年4月)・同解説 (文部科学省 平成30年3月)

■■ 使用言語

日本語

■■ メッセージ

■■ オフィスアワー

■■ メールアドレス

sien@w3.u-ryukyu.ac.jp

■■ URL